

東アジアの共生のために  
日韓の若者ができること

2013年度

## 第9回日韓大学生国際交流セミナー報告書

主催 お茶の水女子大学グローバル教育センター  
お茶の水女子大学グローバル文化学環  
同徳女子大学校外国語学部日本語科



日韓民族衣装体験（7月26日、お茶の水女子大学）



茶道体験（7月26日、お茶の水女子大学）



グループ別発表会（7月29日、草津セミナーハウス）



草津観光（7月30日）



白根山観光（7月31日）

# 目次

<b>第9回日韓大学生国際交流セミナー概要</b> .....	1
森山新 (お茶の水女子大学)	
<b>講演</b>	
今こそ過去を乗り越えグローバル人とならん! .....	5
森山新 (お茶の水女子大学)	
<b>個人レポート</b>	
お茶の水女子大学 .....	7
同徳女子大学校 .....	57
<b>総評</b>	
第9回 日韓セミナーを終えて—もやもや感の先にあるもの .....	109
松野志歩 (お茶の水女子大学 大学院生)	
学生間の交流から見える日韓の新たな関係構築の可能性 .....	111
チョナレ (お茶の水女子大学 大学院生)	
日韓—相互理解のための文化意識における基礎知識—文化相対主義の次の段階へ .....	112
金暻泳 (同徳女子大学校)	
居場所を共有した中での主体的な対話と協働 .....	115
森山新 (お茶の水女子大学)	
<b>グループ研究レポート</b>	
報道グループ .....	116
共生グループ .....	122
歴史グループ .....	128
教育グループ .....	134
文化グループ .....	140
<b>編集後記</b> .....	145

# 第9回日韓大学生国際交流セミナー概要

森山新（お茶の水女子大学）

日時 2013年7月25日～31日

場所 お茶の水女子大学・代々木オリンピック青少年センター・草津セミナーハウス

主催 お茶の水女子大学グローバル教育センター・グローバル文化学環  
同徳女子大学校日本語科

今回が第9回目となる日韓大学生国際交流セミナーは本学学生21名と協定校である同徳女子大学校の学生24名が参加して実施された。グローバルな視点に立ち、日韓両国の学生が言語・文化・歴史の壁を乗り越えつつ、両国の間に横たわる未解決な課題について、挑戦的に討論を行うものである。

今回はまず4月から7月まで、「多文化交流実習Ⅰ」（月9-10時間目）としてTV会議システムを用いて事前の遠隔交流授業が行われ、その後7月25日から31日まで「多文化交流実習Ⅱ」として第9回日韓大学生国際交流セミナーが実施された。また、今回は、参加した同徳女子大学校の学生たちにも「多文化交流実習Ⅱ」の単位（2単位）が与えられた。

## 1. 日程表

7月25日(木)	代々木オリンピック青少年センター・同泊
15:55-17:00	同徳メンバー成田国際空港着、成田発
17:00-18:30	本学メンバー、代々木オリンピック青少年センター着、チェックイン
18:30-19:00	同徳メンバー、代々木オリンピック青少年センター着、チェックイン
19:00-20:00	グループ別に夕食
20:00-22:00	歓迎会（セミナー棟513号室）、【担当：報道グループ】
7月26日(金)	本学人間文化棟大会議室、代々木オリンピック青少年センター泊
10:00-12:00	開講式【担当：文化グループ】
10:05-10:15	挨拶 三浦徹（本学教員）
10:15-12:00	講演1「日韓—相互理解のための文化意識における基礎知識」金囁泳 講演2「今こそ過去と国境を越えグローバル人とならん！」森山新
13:00-14:30	日韓伝統衣装体験（担当：教育グループ）
14:30-17:00	和菓子作り、茶道体験【担当：教育グループ】
20:00-22:00	打ち合わせ（代々木オリンピックセンター・セミナー棟513号室）



7月27日(土)	東京近郊・代々木オリンピック青少年センター泊
9:00-21:00	テーマ別グループ実習
21:00-22:00	ミーティング
7月28日(日)	草津セミナーハウス・同泊
8:20-8:50	代々木オリンピック青少年センター・チェックアウト
8:50-12:30	代々木を出発、草津セミナーハウスへ
12:30-17:30	自由時間
18:30-21:30	グループ別発表準備
7月29日(月)	草津セミナーハウス・同泊
9:00-12:00	グループ別発表準備
14:00-20:00	グループ発表会【担当：文化グループ】
7月30日(火)	草津セミナーハウス・同泊
9:30-17:30	草津探索【担当：歴史グループ】
18:30-21:00	送別会【担当：共生グループ】
7月31日(水)	白根山
8:40-9:00	チェックアウト、白根山へ
10:00-12:00	白根山にて散策
12:00-16:30	白根山発、代々木へ
16:30	解散
8月1~2日	同徳女子大学校企画
8月3日	
9:00	同徳女子大学校メンバーを見送り【担当：共生グループ】

## 2. 参加者

### 2.1 本学学生 (21名)

グループ	学籍番号	氏名	所属	学年
報道	1310279	安井 祐菜	言語文化学科	1年
	1310261	永野 友梨	言語文化学科	1年
	1210255	徳嶽 沙紀	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年
	1210105	伊藤 ほのか	人文科学科 (グローバル文化学環)	2年
共生	1310284	横川 和花	言語文化学科	1年
	1210202	新井 佑理	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年
	1210206	井上 佳苗	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年
	1010240	ストルスマン・リリアン・シュウ	言語文化学科 (グローバル文化学環)	4年

歴史	1310234	佐藤 文香	言語文化学科	1年
	1210414	加藤 紗妃	人間社会科学科 (グローバル文化学環)	2年
	1110415	笠 智遥	人間社会科学科 (グローバル文化学環)	3年
	1210419	小山 奈月	人間社会科学科 (グローバル文化学環)	2年
教育	1210141	梨本 夏菜子	人文科学科 (グローバル文化学環)	2年
	1210216	柿平 恵理	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年
	1210410	牛留 早亜彩	人間社会科学科 (グローバル文化学環)	2年
	1010114	片山 華花	人文科学科 (グローバル文化学環)	4年
	1210152	南 奈那	人文科学科 (グローバル文化学環)	2年
文化	1210280	山本 梨紗	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年
	1110207	池田 亜柊	言語文化学科 (グローバル文化学環)	3年
	1210238	酒井 佑果	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年
	1210156	吉村 茜	人文科学科 (グローバル文化学環)	2年

## 2.2 同徳女子大学校学生 (24名)

グループ	名 前	学 科	学年
報道	김영주 (金榮珠, Kim Young Ju)	日本語科	3年
	서다인 (徐多寅, Seo Da In)	日本語科	2年
	백경옥 (白京沃, Paik Kyung Ok)	日本語科	2年
	임효정 (任孝靜, Lim Hyo Jeong)	日本語科	3年
	서현주 (徐賢珠, Suh Hyun Joo)	日本語科	1年
共生	정지은 (鄭至恩, Jung Ji Eun )	日本語科	3年
	남윤영 (南潤暎, Nam Yoon Young)	日本語科	2年
	조계현 (趙桂賢, Cho Gye Hyun)	日本語科	2年
	백수정 (白守丁, Baek Soo Jeong)	日本語科	4年
	김보은 (金報恩, Kim Bo Eun)	保健管理学科	3年
歴史	정근희 (鄭根姬, Jeong Guen Hee)	日本語科	1年
	김정민 (金旼旻, Kim Jeong Min)	日本語科	3年
	장유진 (張有鎭, Jang Yu Jin)	日本語科	2年
	강지원 (姜智媛, Kang Ji Won)	国際経営学科	2年
	권영아 (權英芽, Kwon Young Ah)	日本語科	1年
教育	최윤정 (崔允禎, Choi Yoon Joung)	日本語科	3年
	김희준 (金希俊, Kim Hee Jun)	日本語科	3年
	류미리 (柳美莉, Ryu Mi Ri)	日本語科	2年
	강은솜 (姜은솜, Kang Eun Som)	日本語科	4年

文化	김선경 (金善京, Kim Sun Kyeong)	日本語科	4年
	신수진 (申秀珍, Shin Su Jin)	日本語科	3年
	김윤아 (金玬我, Kim Yoon A)	日本語科	4年
	이경은 (李京恩, Lee Kyungeun)	日本語科	3年
	강수진 (姜秀珍, Kang Soo Jin)	経営学科	3年

### 2.3 スタッフ

氏 名	所属・職位
森山 新	お茶の水女子大学大学院・教授
金嘯泳 (Kim Yu Young)	同徳女子大学校・助教授
チョ ナレ	お茶の水女子大学大学院生 (T A)
松野 志歩	お茶の水女子大学大学院生

## 【講演】

# 今こそ過去を乗り越えグローバル人とならん！

森山新（お茶の水女子大学）

このセミナーも早いもので、9回目を迎える。日韓セミナーが会を重ねる中で思い起こされるのは、かつての朝鮮通信使である。実は朝鮮通信使は江戸時代以前からあったそうだが、豊臣秀吉が当時の朝鮮を侵略し、中断した。秀吉の朝鮮侵略で両国の関係は最悪になった。

その後江戸幕府を開いた徳川家康は両国関係を改善すべく、朝鮮に使者を遣わし、朝鮮通信使は再開した。通信使は国を挙げて迎えられ、その回数は10数回にわたった。

明治に入り、両国関係は再び悪化、日清、日露戦争を経て、1910年ついに日本は韓国を植民地化してしまった。そして悲しくつらい時代を経て、1945年、韓国はついに解放の日を迎える。これを韓国では「光復節（クァンボクチョル）」と呼んでいる。

しかし、両国関係の修復には時間を要した。1965年に日韓国交正常化が実現しても、両国関係はよくならなかった。それはなぜであろうか。いくつかの理由が考えられよう。第一にドイツのように政権が交代せず、過去に対する正当な謝罪と清算が行われなかった点を挙げることができる。第二に「徳川家康」のように関係改善のために努力する人物が現れなかったことも原因であろう。であるとすれば、私たち若者が両国の関係を変える先頭に立ち、両国の関係を変えるべきであろう。

では具体的にどうしたらいいか。まず私たちの心がグローバル化することである。確かにグローバル化には正の部分と負の部分とがある。しかし「心のグローバル化」は正、つまり絶対に必要なことである。

今までの国際関係は国益優先が大前提であった。しかしそれでは限界があると気づき始めた世界各国は徐々にグローバルな視野に立ち始めて問題解決に取り組み始めた。最近の地球温暖化や東日本大震災復興への取り組みなどがそれである。しかし依然、その背後には「自国の利益」が見え隠れしている。言うならば、まだ心のグローバル化ができていないということである。でも若者なら、自国の利益を越え、それができると信じている。

では心のグローバル化はどうしたらできるのだろうか。ここでは、ヨーロッパ共同体が模索してきた「複言語・複文化主義」、そして塩原良和が提唱する「居場所を共有し対話と協働」という考え方を紹介したい。

ヨーロッパは二度の世界大戦を引き起こした苦い経験から、二度とこのような悲劇を繰り返すまいと、1949年「欧州協議会」を設立し、ヨーロッパに国を越えた地域共同体を創成したが、その際にそれまでの「国」を単位としたナショナル・アイデンティティではなく、ヨーロッパ人という文化的アイデンティティを確立するための理念として構築された

のが「複言語・複文化主義」である。これはヨーロッパの人たちが母語・母文化だけではなく、複数の言語・文化を学ぶことで、個の中に「国」を越えた「ヨーロッパ人」というアイデンティティを築こうとするものである。

では複数の言語・文化を学べば、国を越えた「ヨーロッパ人」になれるのであろうか。そんな簡単なものでないことはだれもがわかる。そこでその限界を超えるヒントを与えてくれるのが、オーストラリアの多言語主義の限界を超えるべく塩原が提示する「居場所を共有し、日常的な対話と協働を」という考え方である。

オーストラリアは、前世紀の半ば、それまでの白人中心主義である「白豪主義」を捨て、多文化主義へと大きく舵を切った。その結果、Ghassan Hage が言う、Good White Nationalists が誕生した。しかしながら、彼らもまた「白人優越の幻想」から脱却することはできなかった。塩原はこの「優越性の幻想」を越えるには、「居場所を共有する中で対話と協働を継続すること」を主張している。

我々のこの日韓セミナーのめざすものも同じで、「複言語・複文化主義」と「居場所の共有した対話と協働の継続」である。日韓の学生が互いの言語と文化を学びあうところからはじめ、セミナーの期間、居場所を可能な限りともにしながら友情を深め、その友情の基盤の上に対話と協働を継続していく。そのような中で、我々のアイデンティティは国を越え、東アジア人としてのアイデンティティが育まれるというのである。

「心のグローバル化」により、我々が過去を克服できたとすれば、今まで対立に費やしてきた思いと力を日韓、東アジア、そして世界の共生のために用いよう。そうすれば両国の悲しい過去を越えられるだけでなく、共生のグローバル社会を築く第一歩となるであろう。

今回のセミナーはこれまでの国の視点を越え、東アジア人、グローバル人とならんとするものである。このセミナーが、国連決議より、日韓首脳会談より、六か国協議よりも歴史的な一歩となることを信じたい。

## 発表そして交流、2つの学び

安井祐菜

### 1. グループ活動報告と学び

#### 1.1 活動内容

私たちは、日本と韓国の報道の違いをテーマにし、二つの国の代表的な放送局について、そして、ひとつの事件に対する新聞やテレビの報道の仕方・内容について事前に調べました。また実際のグループ活動では、韓国の人が抱く印象を知るためにNHKに足を運んだり、韓国での報道が彼女たちにどのような影響を与えているかを知るために靖国神社を訪れ、訪問前と訪問後の心境、印象の違いを彼女らに聞き、日本人が抱いた印象も彼女らに伝え、話し合いなども行ないました。それらをパワーポイントにまとめ発表をしました。

#### 1.2 私の学び

その活動の中で自分にとって最も学びが多かったことは、ひとつのテーマに対して二つの事項を比較するとき、多くのことに配慮し、誰が見ても平等だと言える視点から比較を行わなければならないということです。私たちは日本と韓国の代表的な放送局を比較する際、日本はNHK、韓国はKBSを例に用いました。私たちは、視覚的放送いわゆるテレビを、私たちのテーマである“報道”を行なうための身近なツールの一つとしてピックアップし、それぞれの国の代表的な放送局とはどのようなものなのか、違いはあるのかを知ってもらおうという思いで紹介したのですが、見ている人からすると、私たちの発表の仕方ではまるで「日韓の報道の違い＝テレビ局の違い＝NHKとKBSの違い」と言っているように聞こえたそうです。報道の方法はもちろんテレビだけではなく新聞、雑誌、インターネット等様々な種類があるにもかかわらず、それにきちんと言及せずにテレビだけが報道のすべてであると誤解を生むような発表の仕方、スライドの内容であったことを反省しました。また二カ国間の報道の雰囲気・事実と意見の割合・繰り返しの程度、の違いを具体的な事件を用いて調べるための例として、私たちは「橋下発言」を用いました。しかし橋下発言はこの場合あまり適切な例ではなかったと考えられます。その大きな理由は日本国内の事件であるということです。日本からしたら政治の分野のニュースや話題になりますが、韓国からすれば国外、世界のニュースです。その違いがあれば調査の精密さの違いや繰り返しの程度の違いが生まれてくるのは当然のことです。例えば他の国の政治家の発言をなど二つの国から平等な立場で評価することができる事件を取り上げるかもしくは、日本の政治家の発言に対する韓国の報道と韓国の政治家に対する日本の報道を比べるなどの工夫が必要であったと思いました。どんな話題に対しても、常に自分が先入観にとらわれず平等で、客観的な立場に立てているかどうかをまず検証することが非常に大事であり必要であることを身をもって学びました。

### 2. 日韓の文化の違いと学び

#### 2.1 日韓の文化の違い

このセミナーを通じて私が感じたのは、日本人の場合「きっと向こうも察してくれるだろう」とか、「これを面と向かって言うのはなんか恥ずかしい」などと思ってしまい言葉にしないようなことを、韓国の子たちは素直に言葉にして伝えてくれたということです。

## 2.2 私の学び

それを一番初めに実感したのは、発表の準備を始めるときに韓国の子たちが、「私たちはこの発表が成績に関係しないけれども、日本のみんなは成績に関係するから、私たちのせいで日本のみんなに迷惑になってしまうのがすごく心配です。どうにかして良い発表を作ることができるよう私たちも全力で協力します。」という言葉をかけてくれたときでした。このような素直な思いを伝えられたのはなんだか久しぶりで、あまり慣れていなかったため自分も少し恥ずかしくなってしまったけれど、韓国の子たちが考えていたことを知ることができて安心しました。もしその言葉がなかったら、準備の間、「韓国の子たちがもし発表について面倒くさいか思っていたらどうしよう」などと不安になって、仕事を任せるのを躊躇してしまったり、本音の話し合いはできなかつたかもしれません。素直に思っていることを伝えることは、少し恥ずかしいかもしれないけど、表面上だけの付き合いではなく心を通じ合い本音で話し合える関係になるために必須のことであり、韓国人にとってはそれが普通のこと、習慣づいていることが、彼女らが「情に熱い」と言われる理由なのではないかと考えました。また反対に、日本人にはあまり習慣づいておらず足りないところだと思います。だから、ただ「そういう違いがあるのだな」と実感して終わるのではなく、私も心の中で思っていることを察してもらおうとせず実際に言葉にして伝えて彼女たちの思いに応えなければと思い、今までなら口にしないようなことも伝えるよう心がけました。同じグループの先輩が、韓国の人々に対して、「私たちの日本語が聞き取れなかったときは何回でも聞き返してもいいし、スピードを下げてもう一度話すときにもしかして怒っているように聞こえてしまうこともあるかもしれないけれどそれはもちろん怒っているわけではないから本当に気にしないでね。日本語がわからないまま議論を進めてしまうと意見を言えなくなってしまうから、いつでも気にせず聞いてね。」と韓国の子たちに言っていたのを聞いて、この言葉で韓国の子はすごく安心しただろうし、異なる国の学生が共に協力してひとつの発表を作り上げるのにおいて欠かせない配慮だと思いました。日本人同士でさえ、お互いの誤解や思いのすれ違いは起こってしまうのに、異なる国の人と交流するときはなおさらです。異文化の人と交流するときが一番重要なことを韓国の子、そして先輩から学び取ることができました。



# 交流から読み取れる日韓の共通点と相違点

永野友梨

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

今回の実習において、私は報道グループで活動した。報道グループは日韓の報道の差を比較することで、考え方の違いやこれから両国に求められる報道とは何かについて考えた。まず、テレビ、新聞などのメディアを取り上げ、その歴史的背景や思想をふまえたうえで、橋下現大阪市長の慰安婦問題に対する発言における日韓の捉え方の違いを明確にした。その上で、日韓の歴史問題の象徴として頻繁にメディアで取り上げられる靖国神社を訪問し、その感想をもとに日韓両学生全体でディスカッションを行い、これからの両国の報道のあり方を探った。その中でも、特にディスカッションでは、それまではっきりとわからなかった日韓の靖国神社に対する考え方の差、歴史の受け取り方の差を強く感じた。また、一週間のグループでの共同生活においては、日韓両国の流行や遊び、ファッション、食文化などについて話し、非常に貴重な体験をしたように思う。

### 1.2 私の学び

報道における日本と韓国の違いは、その意見をふまえた報道を行うかどうかであった。日本の場合は報道自体に意見は含まれておらず、事実のみを伝え、韓国の場合は日本に対して否定的な内容の報道をしていることが分かった。しかし、日本はテレビであったらキャスターが、新聞であったら社説や市民の意見などのコーナーで盛んにその会社の意見を示しているため、実際の違いはあまりないように思えた。これらを調べるなかで私が特に考えたのは、日本人としての一方的な感覚で調査結果を受け取らないようにすることであった。報道の違いはあっても、その国によって事実の捉え方は異なるため一概にどちらかの国の報道を否定することは誤りであろう。しかし、そのことを意識して調査・まとめを行っても、最後の発表の際には韓国側に対して否定的な内容になっているという指摘を同徳側の学生から受けたのは、とても重要な反省点であり、最大の学びだったように思う。私は、自分自身が韓国という国には悪いイメージはあまり持っていないと考えていたため、偏見はないと思っていたが、改めて、外の世界の文化を理解する姿勢が欠けていることに気づかされた。これから先、韓国だけでなく様々な国の人や文化と接する機会があると思う。その中で、日本人としての凝り固まった視点からそれらを見ることのないように、相手を理解する姿勢を持つように心がけることが必要だと分かった。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

今回、私が特に感じた日韓の文化の違いの一つとして人と人との距離感、関係が挙げられる。最初に驚いたのは先輩に対する呼び方である。日本の場合、年上の先輩を呼ぶときは、〇〇先輩、もしくは大学生などの場合は、〇〇さんということがほとんどである。しかし、韓国では、親しい先輩に対しては、本来、お兄さん・お姉さんという意味である오빠(オッパ)・언니(オンニ)という呼び方を用いる。今回のセミナーの参加者は全員が女子なので오빠(オッパ)という単語をきくことはなかったが、ほとんどの学生が先輩のことを언니(オンニ)と呼んでおり、日本人学生同士の関係より近い関係のように感じた。

また、ものの貸し借りなどにおいても、日本人同士では抵抗がある携帯電話などでも普通に貸し借りしており、文化的な対人関係に対する考え方の違いがあると思った。ただ、事前学習であったように、ペットボトルやストローなどの共同利用に関しては、個人差はあったが抵抗を見せる人もおり、同じものに口をつけることに関して、同性間ではあまり抵抗感を持つ人の少ない日本人と比べると、若干の違いが見受けられた。

## 2.2 私の学び

日韓の人と人との距離感、関係については、日本より韓国のほうが近く、親近感があり、日本人として多少の違和感があった。これは、個人的にうらやましいこととも感じられた。日本文化における人間関係の捉え方や考え方の表現として、「ウチとソト」という言葉がある。日本人にとって、自分の周りにある身近な人とその他はまったく異なるものであり、仲のいい友達と言ってもある程度の感覚的壁は存在している。この「ウチとソト」と同じような概念が韓国にもあるといわれるが、日本のように自他を隔絶するものではない。他人との距離が近いからいいというわけではないが、韓国人のもつ人懐っこさや情の文化は、日本人が随分前に失くしたものだと思う。日韓の人と人との関係の違いは、これからの日韓の問題を考える上でも大切なものになるだろう。今回の交流を通して、韓国における、近い、対人関係を実際に見て感じたことは、日韓の文化的違いを理解していくなかで最も大きな学びであったと思う。

# 日韓セミナーで学んだこと

徳嶽沙紀

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

実習で靖国神社に行き、またその前後のディスカッションをしたこと、またその中で考えたこと、自分自身が靖国神社に行き、感じたことが今回のグループ活動の中で一番の学びであったと思う。

### 1.2 私の学び

今回、日韓問題の報道をするにあたり、どんな点に注意をし、またどのような報道をすることが正しいのだろうかということを考える一例として、靖国神社をあげ、訪問し、ディスカッションをした。

私は、靖国神社にはお祭りとお花見で行ったことがあったが、今回、韓国の学生と訪問した際には、とても違った雰囲気を感じた。まずはじめの鳥居で感じたことは、イベント時に参道の左右に連なっていた屋台がなく、本当に広いなということと、普段はそこまで人が多くなく静かな神社なのだということである。訪問前の印象として、韓国の学生が行くのが少し怖い、と言っていたことも印象的であったが、訪問中、私も日本人ながら、少しの怖さと不安と感じていた。なぜなら靖国神社という特殊な神社であるから、参拝する人の中には、もしかしたら、一緒にいる韓国の学生を傷つけるようなことを言う人がいるかもしれないと思ったからである。また、日本人は神社に行ったら、どんな神社であっても基本的に参拝すると思うが、今回この神社で、彼女達に参拝しようと言うのも変であるような気がするし、一緒にいる私たちもなんとなく参拝する気持ちにはなれず、参拝するのをやめた。一番奥の鳥居の前に、おいてあった、「報道関係者各位」という立て看板からも、なんとなくそこがただの神社ではないのだと言うことを感じ取れた。

日本の学生、韓国の学生が抱き、考えている靖国神社のイメージと報道との関係が会話の中でみえてきた。政治家の靖国神社訪問の報道が多くなされる日本においては、普段（つまりイベントなど関係なく行き）、靖国神社に参拝する人は右翼かもしれないと思っていた。また、韓国における靖国神社の報道は、ネガティブなものが多いため、韓国の学生は、靖国神社と言う場所は、理由はわからないけれど、怖いところであるとの印象を持っていたのである。しかし、実際の靖国神社は、私たちのような学習目的の人や、観光目的の人が多く、外国人も多く見られる場所であった。訪問前後のイメージの変化は個人それぞれであったが、もともと、固定的なイメージを抱いていたのは、報道に原因があるのではないだろうかと話合っていて感じた。

わたしたちは、この経験をふまえて、日韓問題を報道するときには、歴史や実情などの知識を提供し、また様々な考え方の視点を提案し、人々が自分の意見を持てるような報道をするべきだという結論に至った。また、そうしたことのために、今回わたしたちが、行った、訪問、そして前後のディスカッションを、ドキュメンタリーのようにして報道することも、面白い試みだという意見も出た。

今回、わたしたちはディスカッションをし、意見を出し合うことに重点をおいていたが、学びの多いとても有意義な話し合いができたと思う。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

「大丈夫、なんとかなる。」遅刻しそうなとき、スケジュールについて話をしたとき、なかなかすまない発表準備中、そして発表直前、何度も何度も耳にしたこの言葉から、日本人とは異なる考え方を感じた。

### 2.2 私の学び

今回の合宿において、違和感を感じたり違いを感じたりした経験はあまり多くなかったが、韓国の学生が細かいスケジュールはおろか、大まかなスケジュールと宿泊先についてもほとんど知らずに日本に来ていたということには、ほんとうに驚いた。日本の学生は、自国開催されるものであるが、今回のセミナーについてのスケジュールを授業内で何度も確認していたし、質問をしたり、各自でメモをしたりして、配布された日程表を持ち歩き、またはある程度日程を記憶して活動を行っていた。しかし、韓国の学生は、ほとんどスケジュールを知らず、また、私のグループでは日程表は誰も持っていなかった。日本の学生が同様の海外研修を行うとしたら、ほぼスケジュールがわからないままに出国することはないように思う。大まかにでもスケジュールを覚えたり、メモしたりするだろうし、もし、知らされていなければ先生等に質問して教えてもらおうとするだろう。

海外に行くのにスケジュールが不安に感じなかったのかと疑問に思い、質問すると、韓国の学生が「何とかなると思って来た。」「行ったら大丈夫だと思って。」と笑顔で答えていたのを見て、なんて楽観的なのだろうと、驚き、その後のことがすこし不安に思った。これは、初日に感じたことであった。

セミナーの前半においては、この「なんとかなる。」「大丈夫。」という考え方の楽観的な考え方が信じられずいたが、しかし、後半の発表準備では、この考え方にとても救われた。私たちのグループは他のグループに比べると事前調査があまりできていなかった。また、報道というテーマのため、テレビ局や新聞社などへ調査を希望していたが、実際に調査に行くことはできず、かなり準備が難航していた。なかなか進まない準備と、せまってくる発表本番にいらだちを感じ、切羽詰まっていたとき、韓国の学生がまた、「大丈夫だよ、なんとかなるよ。がんばろう。」と笑顔でいいながら作業していて、またそのような声をかけてもらったとき、本当に救われた気持ちだった。韓国の学生達の楽観的すぎるようにと感じられた考え方であったが、困難なことに出会ったり、不安に思ったりしたとき、この考え方はとても心強かった。おそらく、この考え方は韓国人の「ケンチャナヨ精神」とよばれるものであると思う。私はいままでこの言葉をあまり肯定的な意味で耳にしたことはなかったが、これは、韓国人の心の広さと他人のことを許す、素敵な考え方だなと実感した。

異なる文化の人と交わるとき、このように疑問を感じるような考え方や言動に出会うことは多いだろう。しかし、場面によっては、逆にそのような差に、救われたり、それから学んだりすることもあるのだ、ということ学べたように思う。

# 「日本」「韓国」の文化とは

伊藤ほのか

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

事前調査に関して。TV局において、資金調達の方法など経営形態の違いが報道の方法に大きく影響を与えると考察。日韓でなじみがある代表的な放送局であるNHKとBBSの経営形態を各々調査した。さらに、橋下徹氏の通称「慰安婦発言」に関する一連の報道の仕様について調査。対象機関は、新聞社部門からは読売新聞、毎日新聞、朝日新聞、ハンギョレ、朝鮮日報。TV局部門からはKBSを取り扱った。調査内容に関して、慰安婦発言に関する報道の繰り返しの頻度、ニュースのなかで使用される言葉の選択、ニュースに添えられるコメントを分析した。同徳女子大学に以前TV局に勤務していた教授がいらっしやるとのことで、韓国側に限りインタビューを実施。韓国における慰安婦発言に関する報道について専門家の見解を入手した。

実習中に関して。互いに事前調査の結果を報告、比較。比較の結果を踏まえ、日韓不仲の象徴である靖国神社を訪問した。当初韓国メンバーが靖国神社に対し抱いていた印象と、訪問した後の感想を比較。新聞社やTV局はどのような言葉、そして映像を用い、靖国神社を報道しているのか、また実際はどのような場所だったかについて意見交換。その結果からよりよい報道の在り方を議論し具体的な報道コンテンツを考案した。

### 1.2 私の学び

報道について調査、発表した際の学びを、①日本の報道について②報道が与える日韓関係についての2点から報告する。初めに①日本の報道について。事前調査や実習を通して、思想と報道機関の繋がりが思った以上に深いという印象を受けた。普段一つの事件について複数の紙面の内容を比較する機会がないので気が付かなかったが、事件を一面に大きく報知する新聞がある一方で、四面の片隅に小さく掲載する新聞もある。どちらも日本の新聞であるのに、まるで別の国の報道のようだ。調査の結果から、新聞を読む国民は、印象形成を余儀なくされており、国民に事実を届けるという視点では非常に危険なものであるという感想を持った。しかしながら、思想と紙面の結びつきを解消することは困難である。さらに、事件や出来事をありのままに伝えようと努めても、どうしても一部分の切り取りになることは避けられない。ここで問われるのが、国民のリテラシーである。購読している新聞が全ての世界ではなく、一つの見方に過ぎないことを理解しなければならない。紙面を読み比べたり、クリティカルに考察したりすることで、自分の意見を構築するべきである。さらに、インターネットが普及しSNSを利用し誰でも簡単に情報を送受信できる現代。摂取する情報の取捨選択はもちろん、自分が誤った情報を拡散する立場になり得ることも頭に入れなければならない。そこで浮上するのが、個人のリテラシー向上のためには一体どうしたらいいのかという問題である。私は教養を高めることだと考察する。小学校から高校まで、何のために勉強するのかと一度は疑問に思う学問や芸術、例えば数学やアジア史などを学ぶ理由の一つは、教養を磨き、個人のリテラシー向上させることであると思う。日本でも韓国でも同じことが言えるが、個人のリテラシーが向上し、報道を鵜呑みにせず自己の意見を構築することができる国民が増えた場合、それは良好な日韓関係に大きく貢献すると思う。

次に日韓関係に対する報道の影響に関して述べる。先に「新聞社ごとの思想の偏りを正すより国民のリテラシーを高めるほうが優先」と書いたが、今回の実習では「よりよい報道の探求」をテーマに討論したので、報道の在り方に関して述べる。最初に、私のよりよい報道の定義は「煽動家にならないこと」である。裏がとれているなど、質の高いニュースは国民の関心を引き付けても暴動を焚きつけることはしない。事前調査や討論を通して、日韓ともに現在のニュース報道は中立を保っていないうえにコンテンツ性に乏しいのではないかという結論に至った。日韓の関係をニュースにすると、報道内容が世論に傾いたり自国目線の報道になったりすることは避けたいが、グローバル世界において世論もグローバル化しつつあるなかで、報道だけがドメスティックであることはよくない。一体どのような報道なら、国民を煽動することなく日韓のしこりに切り込むことができるだろうか。根拠をもとにした史実や日韓の大学生の討論、専門家の見解など、よりよい関係を築けそうな、それでいて関係悪化の本質を突いていない友好、例えば日本ではK-POPが流行しているといったようなものではないコンテンツがいくつか挙げられた。報道の本質は社会の出来事を広く知らせることである。さらに掘り下げると、日韓関係の円滑化において報道は、個人が意見を構築するとかかりになるべきだと思う。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

食事作法や身だしなみなど、風習に因るところが大きい違いはもちろん見受けられた。しかし、日本は協調性を最優先するとか、韓国はもてなし方が厚いといった、事前に何度も聞いていた違いを経験することはなかった。言語行動や考え方に関してはむしろ、日本のメンバーとの差異のほうが目についたように思う。グループワークにおいて、ある日本人メンバーはグループの調和を重視しやかに円満な雰囲気ワークを進めるかに注力していた一方で、別のメンバーは合理性と即時性に重きを置いていた。この場合どちらのメンバーの行動が正しいのか分からないし、おそらく正解はないのであろうが、日本人の間でもこれだけ違うという事実は実感できた。

### 2.2 私の学び

韓国メンバーとの違いというよりむしろ日本メンバーとの違いのほうが目についた点に関して、いくつか理由が挙げられる。韓国メンバーとの差異は生じて当然という意識があり気にとめていなかったために記憶にない、韓国メンバーは母国語を使用しない慣れない環境で討論したり生活をしたりしたため普段の調子ではなかった、短期間の実習をなごやかに成功させようという気持ちが強く互いに気を遣っていたなど。これらの理由は考えられるが、しかしながら私は今回の実習を通し、文化を国ごとに区切ることは無意味なのではないかと感じた。伝統、因習が重んじられてきた過去ですら、その文化は地域的なものである。グローバル化の進行が著しく、ただでさえ「あなたは何人ですか？」との問いに答えるのが難しい現代において、韓国の文化、日本の文化という言い回しはナンセンスだ。ここで、「日本にいる者同士が分かりあえないから韓国に住む人とも分かりあえない」のではなく、「日本にいる者同士が分かりあえないが韓国に住む人とは分かりあえるかもしれない」というロジックを強調したい。国が違うから差異が生まれるのではない。人が違うから差異が生まれるのである。実際に接することは、対面する二人から国という縛りを解き人という段階に落とし込む重要な機会だと思う。しかしながら、それには言語や距離など困難はつきものである。その困難をどう解決していくかが、日韓友好の鍵の一つなのではないかと思う。

# 幸せに共生するには

横川和花

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私は5つあるグループのうち「共生」グループにいた。私はその活動の中でも、アンケートと、インタビューを行ったことが印象に残っている。アンケートは10代、20代の若者に行った。韓国の場合は日本について、日本の場合は韓国についてどれくらい知っているか、どのように相手国のことを考えているかについて聞いた。日本側が先にアンケートを作り、それを韓国側に韓国語に訳してもらい、両国で同じ内容のアンケートを実施した。韓国側は目標だった回答者100人を超え、107人の方から回答を得た。日本側は100人には届かなかったが、100人近くの92人の方に回答していただいた。アンケート以外にも、私たちのグループはインタビューを行った。韓国の生徒は日本に来る前に「日本文化院」へインタビューを行った。日本文化院とは1971年のオープン後、40年以上にわたり韓国で日本文化や日本の最新情報を発信し続けてきた日本国大使館の一部である。そこで日本国大使館の外交官の方にインタビューをした。日本文化院では日本を紹介するために日本人形の展示や日韓交流おまつりを行っている。日本側のインタビューは実習中に行った。日本の生徒と韓国の生徒と一緒に在日コリアン青年連合代表のリャンヨンソンさんに話をうかがった。インタビューの中でリャンさんは今までの生活とそのとき思ったことや、韓国と日本の関係話を話してくださった。彼は小中高の12年間朝鮮学校に通っていて、大学生になり初めて日本人と一緒にの学校に通うようになった。

### 1.2 私の学び

今回のアンケートとインタビューでわかったことは「個人が大切だ」ということだ。リャンさんへのインタビューをまとめて行く中で、「個人」という存在が大きいと気づいた。在日コリアンの方は日本人口の100人に1人であり、マイノリティーである。しかし、在日コリアンの中でも朝鮮学校に通う人や通わない人、両親のバックグラウンドの違い、韓国語が話せる人や話せない人など、多様性がある。しかし、日本の中では在日コリアンをひとくくりで考えることが多い。在日コリアンとしてまとめるのではなく、個人を見ていくことが大切なのではないか。個人として付き合うことにより、それぞれの人は違う考えを持っていると気づく。そうすることにより、在日コリアンに対するステレオタイプはなくなると思う。また、日本は多民族国家という意識がかけられていると考えられる。そのためヘイトスピーチが行われるようになってしまうとリャンさんから聞いた。日本の国内法では差別禁止法が制定されていないために、ヘイトスピーチは事実上許されてしまう。この国内法も多民族国家という意識が薄いために私たちは不自然さを感じないのではないかと考えた。私は日本が単一民族国家だとは思わない。なぜかという、日本は多くの面で外国の人に支えてもらっているからだ。例えば、ALTだ。日本では英語を学ぼうとしている人が増えている。このとき英語が母語の人に頼ることが多い。また、今は看護師不足が問題となっていて、インドネシアやマレーシアから来る人に頼っている。日本人は自分がやりたくない、できない仕事を外国人に任せることがある。それには外国人に日本で暮らしてもらうことになる。そうなると日本は単一民族国家だとは考えられないのではないかと。私たちは日本人以外を他者として排除している。これを解決するにはメディアからの情報



をうのみするのではなく、自分の力で判断することが必要になる。これには個人の正しい認識が大切だ。このようにリャンさんの話しをまとめて行くと「個人」というものがとても大切な働きをしていると思った。アンケートではこのことをサポートするような結果が出た。「友人関係と相手国に対する印象の相関関係」では、相手国に親しい友人がいると答えた人ほど相手国に良い印象を持っているということがわかった。特に韓国ではこの結果は顕著に表れた。韓国では親しい友人がいるのといないのでは日本に対する良い印象の割合は 30%も違った。日本はそれに対して大きな差はなかったが、親しい友人がいる方が韓国に対して良い印象を持っている割合が少しだけ高かった。インタビューとアンケートから、うまく共生していくには個人の考え、他の人を個人として認識する、など「個人」が大切だと学べる。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

日韓の違いで最も感じたことは、韓国の人は日本と比べると人と人との距離が近いということだ。はじめはどうすれば良いかわからなかったが、事前学習で韓国では人と人の距離が近いと聞いていたので、「こういうことか」と思い、すぐに慣れてしまった。小さな饅頭を 5 人くらいで分けていたときはとても驚いたが、同時に「いいな」とも思った。他にもジュースやアイスクリームも分けた。食べ物や飲み物を買っても自分が食べる前にみんなに分けていた。食べ物や飲み物を分けた方が、会話が弾み、楽しかった。みんなで色々な味の食べ物を食べ比べたときはどっちがおいしいかで話しが盛り上がり、いっぱい笑ったのを覚えている。ものをシェアすること以外にも、写真をとるとき肩に手を回し、久しぶりに会えばハグをした。腕を組んで歩くことも良くした。どれも韓国の生徒が自然とやっていたことだったので、一週間を過ごしているうちに私も自然にやるようになっていた。最終日はみんなでハグをして別れを惜しみ、肩に手をまわし写真を撮った。私はこのとき驚くことはなく、自分からも自然とやっていた。日本では写真を撮るときみんなピースをしていて肩に手をまわすこともなければ、ハグや腕を組むこともあまりないので、今では何となく寂しい気持ちがある。みんなとシェアしたり、スキンシップをとったりすることができることはうらやましい。

### 2.2 私の学び

私は人と人との距離が近いことによって、すぐに韓国の生徒と仲良くなることができた。初日は夜ご飯を一緒に食べたただけだったのですごく仲良くなったとは言えなかった。しかし、次の日の日本文化体験で浴衣とチマチョゴリを着たときから一気に仲良くなった。着付けのときみんなで写真を撮った。そのときから写真を撮るときに肩に手をまわすようになった。私は会って二日目だったのではじめは驚いた。私はいつもだと会って二日目では話すことすら緊張してしまう。しかし、私は韓国の生徒に受け入れてもらえたような気がしてうれしくなった。その日の夜はみんなで冗談を言っていた。私はそのとき韓国には先輩や後輩という考え方があるのか気になった。韓国には先輩と後輩という考え方はあると言っていたが、私のグループはみんな同じ学年のように仲が良かった。お互い冗談をいっぱい言っていた。私はグループで話し合いをするとき、先輩と後輩の仲が良い方が良い話し合いができると思った。また、私のグループ内では先輩と後輩だけではなく、日本人と韓国人どうしも仲良くなれたので、話し合いをするとき考えていることが言いやすかった。私のグループでは「どう共生するか」という答えを見つけるのが大変そうなテーマだった。しかし私は今回の実習を通して共生するには相手を知ることが大切であり、相手を知るのは仲良くなるのが一番だと思った。私と韓国の生徒が仲良くなったのは、韓国人のひととの

接し方によってではないかと思う。日本でもシェアやスキンシップをもっととるようにすれば私たちのグループである共生は実現されるのではないかと思う。もっとオープンになることを学んだ。

#### **参考文献**

在大韓民国日本国大使館公報文化院

[http://www.konest.com/contents/spot\\_mise\\_detail.html?id=2036](http://www.konest.com/contents/spot_mise_detail.html?id=2036) (2013年8月6日)

# 共通性の中にある異文化

新井佑理

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私にとって特に学びが多かった活動は、草津で行った発表会準備です。まず、日韓両国で行ったアンケートを分析し、日本人と韓国人それぞれの相手国へ対する感情とその背景、友人関係やメディアが日韓関係に与える影響についてまとめました。次に、韓国側が行った日本文化院での聞き取りの中から、主に日本への関心を高める活動について共有しました。東京で行った在日コリアン青年連合の代表の方へのインタビューについては、お話を基に在日コリアンの方々が抱える問題をまとめた上で、国籍とは何か、国籍を越えた人間関係を構築するには、など深く考える時間を持ちました。

その後、事前学習とセミナー中の学びから、日韓のより良い共生を実現するために何が重要なのか考察し、結論を導きました。

### 1.2 私の学び

「共生」というテーマには答えがなく、簡潔に解決策をまとめられるような問題ではありませんでした。そのため私たちは発表直前まで準備に追われました。

そうした中で私が良かったと思う点は、メンバーの皆が、きれいな言葉を並べるだけの発表よりも、自分たち自身で考え抜くことを優先した点です。最後までまとめには苦労しましたが、共生について考えていく過程が自らを高めてくれたと考えています。準備の始めの段階では日本側と韓国側に距離があり、発表に対する温度差を感じていましたが、困難な状況の中で、次第に一人一人ができることを精一杯やろうという雰囲気が変わり始めました。皆で悩んだこと、焦ったこと、気遣いあったこと、そして準備中にふざけ合って和んだことなども含め、共有できた感情は忘れられないものとなりました。

同時に、言語の違いを乗り越えることの難しさを強く感じました。日本側中心の話し合いになり、こちらがある程度まとめてから韓国側に聞いてもらう、という流れが多かったことが反省点です。韓国側の学生が日本語学習者だということは考慮していたものの、話しやすい環境を作るというよりこちらが代わりに話してあげるということに気持ちが向かっていたのだと思います。深く話し合っただけでパワーポイントにまとめるには時間不足だったことや、ホスト側としてリードしようとしたことも背景にはありますが、答えのないテーマであるからこそ、一人一人が意見を出すことが大切だったのではないかと考えます。韓国側の「しっかり考えているのにうまく表せない」というもやもやした感情もよくわかりました。学習中の日本語で話すのは、本当に考えていることとニュアンスが微妙に異なってしまうということも理解していたため、彼女達の言いたいことを推測するような形でこちらから話すことが多かったのだと思います。しかし、振り返ってみれば、それは私が考えた内容であって、私の言葉以外の何物でもありませんでした。日常の何気ない会話では気付くことのできなかつた、言語の違いを越えて深く語り合うことの難しさを実感しました。

こうした状況を克服するためには、個々が持っている考えをそのまま言葉にして伝えるよう努力すること、聞き手はその言葉そのものを受け止めて理解すること、そして何よりも、そのような過程を安心して共に進むことができるような環境を作ることが大切だと考

えます。その基盤となるのが、今回私たちが経験したような異文化理解であり、国を越えた交流なのだと思います。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

韓国からの学生との生活を通して感じた日韓の違いは、人と人との関わりについてです。私が接した韓国側の学生は皆フレンドリーで、日本人と比べて他人への関心が高かった印象があります。特に、それぞれの個性を皆が受け入れているためか、自分らしくマイペースに行動していることが多いと感じました。食べ物を共有したり、年上下関係なく親しくしたりする雰囲気も新鮮でした。たとえ小さなお菓子でも何人にも回してみんなで分け合ったり、自分が何か飲む場合には必ず他の人にも勧めたりしていました。

### 2.2 私の学び

セミナー前から森山先生がおっしゃっていた韓国人の温かさというものを肌で感じ、彼女達のおかげですぐにグループが打ち解けられました。そうした温かな気持ちに接することのできたセミナーだったため、草津から帰宅後には何か大切なものをなくしたような寂しさを感じました。

前述の通り、韓国側の学生たちはとてもマイペースだったという印象があります。日本側が焦っているときにも冗談を言ったり、移動の時に皆で歩いてたつもりが振り返ると姿が見えなくなっていたりということが多々ありました。周りに縛られることなく今を楽しもうとしている彼女達と接する中で、多くの楽しい思い出を作ることができ、私自身もいつも以上に自分らしくいられたような気がしています。一方、他人に合わせ空気を読んで行動する傾向にある日本人の私にとっては、そのマイペースさに時にはもどかしさも感じました。特に発表準備ではなかなか全員で集中してスタートすることができず、気持ちがまとまるまで時間がかかりました。つまりこの文化差は、良い点もありながら克服すべき課題も持ち合わせていたと言えます。そのような課題に直面した時、私がとった行動は、まず自分が正しいと思っている行動をとるというものです。例えば、夜部屋に戻ってからも、何人かが談笑している中パソコンで発表のまとめを続ける、というように、自分のすべきことを考えてしていました。彼女達には彼女達なりの進め方や文化があり、日本人である私の型にはめることはふさわしくないと考えたためです。そうしているうちに、グループ全員が協力的になって準備に専念するようになり、皆がまとまり始めました。楽しむときは楽しみやるときはやる、というメリハリのついたグループになったと思います。私のとった行動が正しかったのかどうかは明確にはわかりません。しかし、互いのやり方を尊重しつつ、グループ活動を良い方向に持っていくことができたと考えています。このように、行動様式という目に見えるものは異なっている、目指しているものや抱く感情といった心の中にあるものは共有することができ、そうした内面の共通性を理解することで互いをわかり合い、協働が実現するということを実感しました。また、人としての共通性を前提として文化を理解することで、その文化本来の姿がバイアスにかけられることなく見えてくるのではないかと考えました。

ものを共有する文化はとても素敵だと感じ、日本側にもすぐに浸透していきました。ホスト側が異文化に影響されることは少ないと思っていたのですが、日本側の学生がその良さを感じ、自然と行動に出るようになったのだと考えます。日本側と韓国側の間だけではなく、日本側同士で共有する場面も増え、事前学習の段階ではそれほど親密とは言えなかった日本側の学生の距離が一気に近づいたように感じられました。異文化を理解し受け入れるのはもちろんですが、自らに取り入れてみることに様々な可能性が含まれていると

気付きました。

同時に、こうした文化差は、日韓という違いだけでなく個人の性格の違いでもあるのではないかと考え始めています。例えば、日本人でもマイペースで気楽で、韓国側の学生のように他人をよく気遣う人もいます。それらをもすべてまとめて「文化の違い」としてしまうことには抵抗を感じます。加えて、それらをあたかもその地域のすべての人に共通する文化として定義づけてしまうことは、ある種のステレオタイプを生み出す可能性があると考えます。そういった点から見れば、今回の交流は異文化間というよりも、自分とは違う性格をもつ人々との交流に過ぎなかったとも言えるのではないのでしょうか。このように、文化と個人の性格とは密接につながるものであって分離して考えることは難しいと気づき、私たちが理解しようとしている異「文化」とは何か、根本的に考え直す機会となりました。

# 共生から日韓の相互理解へ

井上佳苗

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私の所属する「共生」グループでは、事前のテレビ会議と Facebook 上での話し合いの結果、「共生」の意味を「日本人と韓国人がある場所ないし地域に共存し、更には良好な関係を築くこと」と捉え、研究目的を「日本人と韓国人が共生するために、その妨げとなっている問題を明らかにして解決策を見つける」と設定した。そして、国家関係の悪化や偏った報道が個人の相手国に対する偏見や負の感情を助長するのではないかという仮説を立て、その現状を把握するために「日韓の双方に対する認識調査アンケート」を日本の大学生 92 人、韓国の大学生 107 人に実施した。セミナー中の実習では、在日韓国人の青年団体の代表である梁英聖さんに「在日コリアンの現状と歴史から「日韓関係」を考える」というテーマで話を伺った。

### 1.2 私の学び

私が「共生」グループの活動を通して学んだことは「国から人を見るのではなく、人から国を見る」ということである。本レポートでは、そう思うに至った経緯をアンケート調査とインタビューの考察から記したい。その前に、私は私事によりグループ活動の中で肝心の「韓国側との討論・発表」に参加することができなかった。レポートを書きながら自分が韓国を本当に理解できた気がしないのは、韓国の学生たちと腹を割って議論をしなかったせいだと考えている。このことが私に「面と向かって対話をする」ことがどれほど大事かを逆説的に教えてくれた。

アンケート調査から韓国人の意識を知ることができたのは大きな経験であった。衝撃的だったのは、日本人の韓国に対する見方と、韓国人の日本に対する見方に違いがあったことである。というのは、日本の学生の 60%が韓国に対して「良い」または「どちらかといえば良い」印象を持っているのに対し（「どちらともいえない」が 20%、「良くない」または「どちらかといえば良くない」も 20%）、韓国の学生の 59%は日本に対して「良くない」印象を持っているという結果だったのだ（「良い」が 25%、「どちらともいえない」が 16%）。この印象の差の原因は、日韓の相手国に関する情報源が大きく関係していると考えられる。日韓ともにその情報源は自国のニュースメディアが一番多く、日本では 8 割ほど、韓国では 7 割ほどに上る。次いで日本では自国のテレビ番組、韓国では自国の教科書を含む書籍でおよそ 4 割だ。韓国の学生で日本人の友人・知り合いがいない人が 65%であったことを考慮すると「日本に対する良くない印象」は日本人自身ではなくメディアに映る「日本」のイメージや教科書等の書籍に反映される国のイデオロギーに依拠していると考えた。一方、日本の学生で「韓国に良い印象を持つ」理由のほとんどが「韓国人は良い人、韓国人の友人がいる、文化が好き」と人を見ることで得られる印象であり、「良くない印象を持つ」理由には「反日感情、歴史認識、民族イメージ、ニュース」という、メディアを介して得たであろう情報が上がった。よって、「人と接すること」はその国のイメージの改善につながると考えられる。

しかしながら、歴史認識の差も見逃すことはできない。もしかすると韓国人の日本に対する「良くない」印象はここから来ているのかもしれない。アンケートの結果から日本人・

韓国人ともにその近代の歴史において「日本が加害者、韓国が被害者」という共通の歴史認識を持っていることが確認できたが、気になるのは韓国の学生の98%が「日本の歴史認識は正しくない」と回答していることである。思うに、日本人はその歴史問題を知っているが、知っているだけに留まっており、日本としても国益が故に自国を貶めるようなことはできない。一方、被害者として未だに問題を内包する韓国を拠り所とする韓国人は、日本のそのような姿勢を「正しくない」と指摘している。このすれ違いがある限り日韓の問題は解決しないと考えるが、日本人も韓国人も「国」という色眼鏡をかけているから隔たりがなくならないのではないだろうか。これは、決して歴史を忘れてよいという意味ではなく、人を知れば情が生まれ、問題解決に一步近づくのではないかという私の思いである。

青年コリアン連合部の代表である梁さんの話からも、人を国などの属性によってではなく個人として見るのが重要であることを学ぶことができた。まず、梁さんは「日本人・韓国人とは誰か」という質問を私たちに投げかけた。「共生」グループの皆で出生地や母語、文化などその根拠となるものを探っていたが、結局は「〇〇人」が根拠を持たない概念であることが明らかになった。これまで「共生」を考えると「日本人」「韓国人」というカテゴリーを使って考えてきたが、ひょっとしたらこの分類が「共生」を妨げる原因なのかもしれないと気づいたのがこのときである。それは、在日コリアンの境遇を見れば明らかである。梁さん自身の経験によれば、在日コリアン2, 3世は流れる血が韓国人であるために日本からは「韓国人」と見なされ、生まれも育ちも日本、母語も日本語であるために韓国からは「日本人」と見なされる。それゆえどちらにもつけずに疎外感を味わい、自分が何者なのか悩む。そして、日韓関係が悪いほどその間に板挟みにされる。また、梁さんは日本人の友人に「梁はすっかり日本人だね」と言われて傷ついたそうだ。なぜなら、自分の韓国人としてのルーツが不可視化された上、日本がかつて韓国人を強制連行した歴史があるために今の在日としての梁さんがいるという事実を友人が理解していなかったからだ。

私が「国から人を見るのではなく、人から国を見ろ」と提案する理由は、これまで見てきたように「国」という枠組みにとらわれる限り、他者を不確かな先入観を持ってしか見ることができないからである。しかし、人と対話することで「接して見れば良い人だ」と実感でき、メディアや国家のイデオロギーに左右されることなく国家関係や歴史を正しく理解しようという姿勢にもつながる。この研究は「共生を妨げるものが国家関係の悪化とそれに基づく個人の偏見」という仮説を立てて行われたが、むしろ私は「共生」が国家関係を動かし、多民族共生に寛容な国を作ることができるのではないかと考えるに至った。人と出会って友人になる。お隣さんになって理解を深める。そうすることで生まれた絆が、自分たちの背後にある国と国の関係を良くしようという思いにつながり、国家関係を改善させる原動力になるだろう。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

まず、日韓の文化の違いを述べる前に、私が韓国の学生との交流を通して「日韓の違い」という考えに関して感じたことを記したい。たとえば留学生や外国人のような出自の異なる人と接するとき、大概は事前に相手の言語行動や文化を学ぶということはせずに接するうちに相手のことを知っていく。そして、その過程で予測不可能な言動や文化を目の当たりにし、それによってショックを受けたり誤解が生じたりする。これが私のイメージする異文化接触である。しかし、今回のセミナーは多文化交流という目的があった上に、事前に韓国の文化についてある程度学んだために、韓国の学生と接する心構えがあった。きっとそれは韓国側も同じである。よって、日本側も韓国側も互いに思いやりと妥協があった



と考えられる。だから、私が「韓国の文化に違いない」と感じたことは、ある種の先入観—これによって誤解や衝突を避けることができたため肯定的なもの—に則っているのではないだろうか。私がこのようなことを言うのは、自分が「韓国の文化だ」と思ったことに自信を持たなくなったからである。というのは、あとあと冷静に考え直して、実は韓国人でも当てはまらない人がいて、日本人でも当てはまる人がいることがわかったからだ。しかし、それはある一定期間、近い距離で日本と韓国の学生が接することで、「日韓の文化の違い」を実感した上で一人一人を見つめることができ、その内部の多様性を自覚することができたという成果だと考えている。

私がセミナー中に特に感じた日韓の文化の違いは、韓国人は日本人に比べてスキンシップが多く、親しみやすい性格であるということである。事前学習で、韓国の女の子たちは手を繋いで歩くほど対人距離が近く、「親しき仲には迷惑あり」というほど遠慮なく付き合えるという話を聞いていたが、きっと日本人ならこんなに仲良くはなれなかっただろうと思うほど、会ってまもなく近しくなれた。まず、彼女たちはとてもオープンでフレンドリーだった。話しているときに体を寄せて腕に触れてきたり、隣に座っているときに肩に頭を乗せて寄りかかってきたりして、存在を受け入れられている気がした。別れるときには抱き合うこともしたし、ベッドが一つ足りなかったために二人で一つのベッドで寝てもいた。本当に、家族のようだった。また、親しみやすかった理由として、彼女たちの顔の表情やジェスチャーが豊かでわかりやすかったことも考えられる。だから、私は「事前学習で学んだとおり、人と人の距離が近くてスキンシップが多いのが韓国の文化。それと比べると日本は距離を置くのが礼儀だ」と感じたのである。

## 2.2 私の学び

私は日韓の文化の違いそのものから学びを得たというより、私の中の日韓の文化の違いというものが、韓国の学生と1週間ほど生活を共にしたことによってある程度中和されたことに大きな意味があると感じた。一般に、日本は親しい仲であっても一定の距離を置き、スキンシップも少ないことはよく知られている。一方、韓国は親しい仲では家族のように距離が近く、接触行動も多い。しかし、今回のセミナーで私はこれらの観念に自信が持たなくなった。まず、自分でも驚いたのだが、セミナーの後に高校時代の親友と会った際、話しているときにふと腕に寄りかかろうとして思い留まった。そのときに「おっと、相手は日本人」という考えが頭をかすめたのである。

私は日本人の中でも極端に非接触文化に生きてきた人間である自信がある。自分でも疑うが、つい最近まで家族にさえ体に触れられることが嫌だったし、飲み物や食べ物を共有するなどもってのほかだった。今その態度を友人たちに見せたら嫌われること間違いなしだが、高校を卒業するあたりまでは人から差し出された食べかけを嫌々ながら食べ、相手が嬉しいことがあってハグしてくるのを、どうしたら良いやらとただ腕を回して気まずそうな顔をしていたに違いない。大学に入ってからさほど気にはならなくなったが、それでも気を使っていた。日韓セミナーの事前学習で「韓国人はスキンシップが日本人より多い」と聞いたときは、自分が嫌な顔をせずに韓国の学生と接することができるだろうかと不安になった。しかし、私は「まあ、異文化交流だからある程度は妥協しよう」という見解を持っており、自分も相手に合わせるように努めようと考えていた。実際、韓国の学生と会ったばかりの頃は少々遠慮して一定の距離をとっていたのだが、彼女たちとの共同生活が始まると韓国人のオープンな態度が楽しく感じられ、会ってまもなくずっと友達であったかのような関係になった。日本語は片言だったが彼女たちは自分の感情を表情やノリを通して素直に表現する。そのオーバーとも言える表現やスキンシップの多さが寛容的で私を受け入れてくれていると感じ、私も彼女たちのノリに合わせるようにした。そのこと

によって、これまで「日本人らしく」接してきた日本人同士も距離が近くなったように感じた。

「〇〇人だからこうだ」という知識は、相手を理解する物差しとして必要である。しかし、異文化の人と接するうちにいつの間にか自分が変わっている。そして、相手も変わるに違いない。もちろんその過程で違いに驚いたり理解できなかつたりすることもあるのだが、違いに興味を持って真似したり楽しんでいるうちに相手の文化が心地良くなってくる。ひょっとしたら韓国の学生たちは私の態度を「距離があって冷たい」と感じていたかもしれないし、もしかすると私に合わせてちょうど良い対人距離を保っていたのかもしれない。しかし、文化の違いを乗り越えて接するということは、このように相手を思いやり、妥協することだろう。文化が違うことは当たり前。だから、誤解を恐れず対話することを楽しめばよい。楽観的かもしれないが、自分の文化が相手に通用しないと悩み、相手の文化が気に食わないとなつては、衝突するばかりで何も解決しないのだから。

# 日韓共生と民族意識

ストルスマン リリアン

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私は共生グループに所属しており、日韓の共生についてその現状とこれからの可能性を探るため、アンケートやインタビュー等の調査を行いました。その一環として、新大久保にて在日コリアン青年連合代表のリャンヨンソンさんにお会いし、日本における在日コリアンの人々のおかれる現状や歴史、また「日韓関係」の与える彼らへの影響について伺いました。

### 1.2 私の学び

リャンさんへのインタビューを通して、日韓、また在日コリアンとのよりよい共生を形作るためには、①「日本側の民族意識の希薄さ」、②「消費財としての文化」という現代日本社会に内在する二つの壁を認知し、解決策を見出していくことが肝要だと感じました。

まず一つ目に、リャンさんとお話は、日本人として生きる私たちがいかに曖昧な日本人観、民族観を持ち、それが漠然とした根拠の上に成り立っているかを浮き彫りにしました。日本人である根拠として、代表的なものは国籍、血統、文化、言語などがあげられると思いますが、在日コリアンがその最たる例としてあげられるように、そのような特性を共有しても、“日本人”という枠に収まらない人々がたくさん存在しています。このような一種の「単一民族神話」が人々の意識に息づいていることは、大衆のステレオタイプを映すきらいがあるメディアのことばの選択などからも読み取ることができます。どうしてこのようなステレオタイプが再生産され、盲目的に信じられているのか、その構造についてはここでは触れませんが、一般的に日本は民族的同一性が高く、それ故に日本人か、そうでないか、という二項対立的な分類意識を持ちやすく、在日コリアンのような境界に位置づけられるマイノリティに対して不寛容な傾向があります。

また同時に、自分の所属する民族集団内の多様性に疎いばかりに、マイノリティ内の多様性に対しても鈍感になってしまいます。これは、在日コリアンという画一的なステレオタイプを伴って、潜在的な差別の助長にもなります。実際に、現時点での日本における共生は、在日コリアン側による通名の使用や帰化など、いじめ、就職、結婚など人生の様々なステージにおける差別を避け生きていくため自らの民族的背景を押し隠すことによって成り立っている側面がおおいにあり、これは彼らのアイデンティティからの乖離を引き起こし、葛藤を生み出すことにもなります。

それから、日本における在日コリアンとの共生を考えるにあたって熟慮すべき点として、政治的・文化的な日韓関係が、在日コリアンに対する日本人の世論や扱いに細やかに影響しているということをお伺いしました。その例として、連日メディアで報道されている領土問題や歴史認識などで対立する日韓の様子が、在日コリアンの人々の風当たりを強くしている傾向にあるといいます。もちろん、在日コリアンは韓国を代表するわけではなく、日韓関係がメディア報道やネット等を通して上で述べたような二項対立的意識を強化し、その構図の中に在日コリアンを取り込んでしまわないように留意しなくてはなりません。究極的にはリャンさんは、日本と朝鮮半島が対立している限り、在日コリアンは分裂する狭間にいることになる、とおっしゃっていました。

二つ目にリャンさんは「共生」がおおいに現代社会の構造的問題をはらんでおり、資本主義が介在することによってその真の意味が実現されていないことを指摘しました。その具体的な例としての新大久保は、メディアが表わすイメージとは異なりその実態は真のコリアンタウンではないといいます。確かに街中には韓国的イメージが溢れていますが、逆に言えばそれが一方的に消費されるだけの場であり、決して相互理解を含む異文化の交流を促進しているわけではありません。また、このような流動的な資本による文化の商品化とも言える現象の拡大には、行政もその一端を担っています。新大久保のある新宿区は“多文化共生”を命題に掲げる一方で、その共生の意味するところはさらなる文化の更なる観光資源化であり、共生の主体であるべき居住者の人々の存在が透けて見えることはありません。もちろん、興味を持ったり、より理解を深める足掛かりとして文化産業は有用であることは否定できませんが、無批判な消費に終始し、対話のない一方的な関係を築くことのないよう留意することが大切だと感じました。

「共生」には色々な形があります。必ずしも相互理解、異文化理解を伴わなくとも、精神的、物理的距離を保つことで共生できることがあります。しかし一方で、そのような共生の形は、噂や扇動によって軋轢が生まれやすく、脆いという一面があります。そのような共生の実態は、世界中を見渡せば枚挙に暇がありませんが、現代の日本もそのような側面を持っているのではないのでしょうか。昨今新大久保で見られる（在日）コリアンに向けたヘイトスピーチは、一例として挙げられると思います。対立や差別の根底には、「得体のしれなさ」があります。しかし相手の本質を知らないということは、裏を返せば、自分の本質も知らないということになります。この違和感に気づき、草の根の交流をもってよりよい共生を実現していくことが大切だと感じました。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

セミナーを通して、多少言語の問題も関わってくるのですが、特に目立って異文化の違いを感じたことはありませんでした。むしろ、ちょっとした感情表現や所作において、日本との文化的な近さを感じることが多かったです。また、言葉の選び方や考え方についても、接した韓国の方全員に共通の文化的背景のある傾向というのは見つからず、個人の性格の域を出ないと感じました。

一方で、人付き合いに関しては、日本人と比べて、概して人と人との距離が精神的にも物理的にも近く、このような習慣においては文化的差異が認められると感じました。

### 2.2 私の学び

もともと、セミナーが始まる前から、韓国の方に対して、“異文化”を持った人である、という概念を持っていませんでした。しかし、私たちの前に、友達と手を繋いで現れたチームメイトを見て、おや、と思ったことに始まり、私たちに対しても話す時の立ち位置が近く、どんなに小さなお菓子でも食べかけをシェアする、一方で飲みかけのペットボトルには絶対に口をつけない…などなど、彼らの独特な間合いに、文化の違いを感じるようになりました。

人付き合いにおいて、特に初対面では、相手との距離の取り方に戸惑うことが多々あります。そこで、日本人なら無意識のうちにシャイになったり、相手の出方を伺って距離を取るところを、彼らはスッとパーソナルスペースに入ってきて、親しげにスキンシップをし、こちらを気遣う目を向けてくれます。そのような仕草に、サービス化の一途を辿るような人間関係が置き去りにしてしまった、心地よい遠慮なさを感じることができ、はっとさせられたように思います。

# 向き合ってわかること

佐藤文香

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

- ・教科書内容の比較（日韓お互いの高校の教科書を用いて、主に1900年頃の日清戦争から日本の韓国に体する植民地化政策の辺りの記述内容、方法を比較する。
- ・明治神宮・靖国神社及び靖国神社内の歴史資料館の遊就館訪問
- ・高校の社会科教師訪問、インタビュー

### 1.2 私の学び

靖国神社訪問では、終始無言だった。日本人側の学生は参拝したが、韓国側の学生は本殿の前で少し困った顔をしながら立っていた。私はそれに対して、困るのは当然だろう、と思った。参拝しないことに対して、もちろん不満や憤りは感じなかった。立場や今まで国から受けた教育を考えたなら参拝しないのは当然のことだと思うし、もし私とその立場にいたら、神社の中にすら入れないかもしれない。お互いの立場を理解して、受け入れる。この姿勢が本当のお互いの共生に向けて必要なのだ、と実感した。今回のセミナーの中で、韓国側が靖国神社に対して反感を持っている理由を、初めて具体的に聞いた。その理由は私が聞いても靖国神社に対して反感を持たざるを得ないような内容だった。教科書内容の比較に関しても、日本と韓国では記述内容及び記述量の差が歴然だった。どちらが正しい、より事実を忠実に記述している、などは言えないが、韓国の教科書が日本に対して反感を持たざるを得ないような記述方法で書かれていて、日本の教科書は韓国との歴史に関する記述量が少ないことは明らかだった。教科書内容を比較して実感したのは、過去を遡っても何の答えも出ないということ。お互いの記述内容やその方法は異なり、争いの種になるだけだ。必要なのはこれからお互いがどう共生に向けて動き出すか、ということだと感じた。

昂高校の社会科の先生の所に伺って、竹島問題についての講義を受けた後、日本の歴史教育についてインタビューをした。印象に残ったのは、「何故歴史を学ぶか」というお話だった。歴史を学ぶ事は、考える力を養い、自己のアイデンティティーを確立すること、国際社会の中で生きる力を養うことにつながる。自分は今まで受験のためだけの知識詰め込み型の勉強しかしてこなかった。今回の実習の中でグループ発表の準備をする際も、韓国の学生は自分の国の歴史についての知識を持っていた。それに比べて私はしっかり自分の国の歴史について話す事が出来ず、恥ずかしかった。私はこれから出来る限り海外に出て、グローバルな人間になりたい。一人の日本人として外国人へ行って、自分の国の歴史をきちんと認識していなかったら恥ずかしい。歴史について学び直そう、日本の歴史をきちんと話せるようになろうと強く思った。また、もう一つ印象的だったのは、韓国には選択制ではあるが「東アジア史」という教科があるということ。自分の国の歴史だけを学んでも、狭い歴史認識しか生まれえない。多くの国の歴史を学ぶ事で、「日本人」ではなく、「東アジア人」、あわよくば「グローバル人」が生まれるのだろう。グローバル化が進む今、これからの若い世代にこそ「東アジア史」という教科を学んでほしい。そして私も学びたい。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

韓国と日本の中で、特に目につくような文化の違いは感じられなかった。

あえていうならば、自分のペースを皆がそれぞれ持っているように思えた。特に気になったのは、歩く速度がみんな遅いことや、入浴・化粧などに時間をかけること。

### 2.2 私の学び

今回の実習で、自分の韓国人に対するイメージが全て覆された。韓国人はせっかちだと聞いていたが、今回の実習の中では私達日本人の方がせっかちだった。また、韓国の人は日本のお風呂の風習を積極的に受け入れないと聞いていた。実際、初日の夜は、お風呂が嫌だと言ってシャワーへ入る学生が何人かいた。皆でお風呂へ入る事が出来るだろうか、と不安に考えていた。しかし、次の日から続々と皆がお風呂に入るようになり、最終的には草津の大きな温泉に皆で入る事が出来た。「温泉、気持ちいいね」と笑顔で言われたときは本当に嬉しかった。韓国の皆は積極的なコミュニケーションが多いと聞いたが特に気づかなかつたし、せっかち、怒りやすいという特徴も感じられなかった。今回の実習で、いかに自分はナショナリズム的のものを考えていたか、固定観念を持っていたかという事に気づいた。そもそも「〇〇人といったら～～だよね」と考えること自体が間違っているし、正しいことでない。国というまとまりでその国民の性格や特徴を定めることは出来ない。日本の人だってせっかちな人もいればのんびりした人もいるし、謙虚さを持った人もいれば傲慢な人だっている。それは韓国の人だって同じだ。国というかたまりで物事を考えることから脱却しなければならない、と今回の実習をする中で気づいた。この気づきによって、皆を冷静に受け入れる事ができた。また、実習の中でもう一つ考えた事がある。私は、韓国の皆が自分「日本人に似ている」事に親近感を覚えていることに気づいた。自分は無意識に、韓国の皆に同化を強要しているのではないか、「似ている」ことに親近感を覚えるのか、逆に言えば、「似ていない（全く違う）」なら、親近感は覚ええないのか。グローバル化の流れの中で、これから私は自分と全く「違う」人に出会うだろう。自分との類似度を、親近感を持つ基準にしていたら、グローバル世界における共存は不可能になってしまう。まずは国単位でイメージを植え付けるのはやめること、その上で国関わらず一人一人と向きあうことが必要なのだということを学んだ。韓国と日本の歴史や、靖国神社の問題に関して、どうして問題が起きているのか、向き合って学ぶ機会がこれまで無かった。韓国の学生や先生にそれらの問題に関して、具体的な話を聞く事が出来たのはとても貴重な経験となった。今回のセミナーが無ければ、ただメディアや国の流れに合わせて、当たり前の事のように「竹島は日本の領土だ、靖国神社を参拝するのは当然だ、韓国人は皆感情的すぎる」というように考えていたと思う。向き合わなければ、直接話し合わなければ、何もわからない。ナショナリズムや大多数の流れに合わせて自分の考えを決め、述べるのは、このグローバル化が進む現在の世界ではもう時代遅れである。今必要なのは国籍・人種問わず一人一人が問題に向き合い、取り組むことだと今回のセミナーを通じて実感した。

# 日韓セミナーでの学び

加藤紗妃

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私たち歴史グループの活動のテーマは、「正しい歴史認識とは」というものであった。このことについて議論するための資料として、お互いの歴史の教科書を持ち寄り、歴史上の同じ事件の取り上げられ方を比較していったことが私たちのグループの特筆すべき点である。日本側は山川書店の日本史の教科書を、韓国側は近現代史の教科書を用いた。具体的に取り上げた内容は 3.1 独立運動、関東大震災時における朝鮮人の虐殺について、皇民化政策、強制労働・従軍慰安婦問題などである。それぞれについての記述の量や内容について比較し、提示した。

### 1.2 私の学び

教科書の記述を見ていくと、予想通り、または予想以上の結果を得ることができた。分量に関していえば、日本史のなかで取り上げられる朝鮮・韓国の枠はとて狭い。上に挙げた具体的事例でも、例えば 3.1 独立運動について韓国の教科書は 7 ページにもわたり書いてあるが、日本の教科書では 3 行のみの記述にとどまっていた。もちろん単純に記述の長さの比較はできない。言語も違う上にそもそもその教科書 1 冊で取り扱う歴史の長さにも差があるからである。しかしこの差は歴然としており、視点が違えば同じ事件でも見方が全く変わってくるという事実に衝撃を受けた。内容に関しては、日本の教科書は思っていたよりは「公平な」記述であったように感じた。もちろん日本にとって都合の悪い書き方や悪い印象を与えるような言葉は用いていなかったが、淡々と事実を述べている、という印象であった。それに対して韓国の教科書では日本軍に対して（同じグループの韓国人学生の日本語訳によると）「邪悪な日帝」のような反日感情が全面的に押し出されているような言葉を用いていた。日本人から考えてみると、子供たちにとって一番身近な公的な教育資料である教科書にそのような感情的な文言を用いるのは「正しい」歴史認識に偏った先入観を与えてしまうのではないかと感じるのである。しかし韓国側の学生はあっさりとした日本の教科書の記述に対して「日本はもっと責任を感じるべきなのではないか」とも主張していた。立場が違えば考え方も違う。私たち歴史グループが「正しい歴史認識とはなにか」に対して出した結論は、「それぞれの主張する「正しい歴史」があることを理解し、そのそれぞれの内容を正確に知ること」である。例えば日本が朝鮮を侵略したという事実はあっても、その犠牲者の具体的な数字や実際に行われていた一部始終すべてを記録したものは残っていないため、これが正しいといえる絶対的な証拠は存在しない。それを理解し、お互いの立場を知ることが重要なのではないだろうか。その上でどのような考えを持つかは個人の自由である。以上が今回の発表を通して私が考えたことである。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

日韓の文化の違いといえはやはり目上の人に対する態度がきちんとしているということが挙げられるのではないかと思います。1つ上の人にもオンニと呼びかけたり、敬語の種類がたくさんあることを教えてもらったりしたときに、普段の生活に基づく韓国人の礼儀正しさ



や真面目さを感じた。せっかくの機会だったので、私も真似をして年上のメンバーにはオンニと呼びかけたりしたことも文化交流の 1 つだったのではないかと思う。とはいうものの、日韓の文化についてさほど違いを感じなかったというのがセミナーを通しての私の印象である。確かに全く同じだとは思わなかったが、それは日韓の違いというよりは個人個人の習慣の違いであって、韓国人だから、日本人だから、というような違いはあまり感じず、ストレスにも全く感じなかった。

## 2.2 私の学び

文化の違いを感じた、というわけではないのだが、少し考えさせられる出来事もあった。草津に宿泊しているとき、2, 3 時間前にトイレに行ったときにはきれいにそろえてあったはずのスリッパがいろいろな方向に脱ぎ捨てられていたことがあったのだ。正直に言うと、韓国人学生が使ったのかな、と瞬時に考えてしまったのである。その時に自分でも気づかないうちに日本人なら次に使う人のことを考えてきれいにそろえて置くはず、という先入観や固定概念にとらわれていたと思い、少し反省した、ということがあった。そういった考えというのは無意識のうちに浮かんでしまうものであるため、固定概念をすべて捨てるというのはかなり難しいことである。しかし自分のそういった行動を自分自身で監視し気づくことができれば、そのことを意識することで多少は自分を固定概念から離し、自分で考えて判断することがしやすくなるのではないか、というのがこの出来事を通して私が考察したことである。また、文化に関連して言語のことについてもいろいろ考えさせられた。今回のセミナーはほとんど日本語で行われ、ごくたまに意思の疎通がはかれないときに英語を用いた。よく言われることでもあり、今回私が体験したことでもあるのだが、コミュニケーションをとる上で、言葉がつかないなどということはあまり障害にはならない。ネイティブは相手が話してくれるのを待つこともでき、言わんとすることを察することもでき、辞書を使うこともできる。しかし話す内容がないと仲良くなるのは無理な事実だ。特に、一緒に思い出して笑うことが出来る出来事といったお決まりの笑いを共有することが非常に重要である。一緒に笑う時間が増えれば親近感もわき、距離も縮まる。今回のセミナーに参加した韓国人学生のほとんどは日本語学科に所属しており、日本に興味をもっている学生がほとんどだった。その点話題の基盤となる部分に日本人学生との共通点が数多くあったため仲良くなるのにあまり時間を必要としなかったのではないだろうかと考える。もしあまり共通点がない人と仲良くなる場合はもう少し時間が必要である。出会ってからお互いの共通点を増やしていくことで理解が深まっていくのではないかと思う。

今回のこの経験は今後の私の人生にいくつかの指針を残してくれた。歴史認識のことはもちろん、自分をもつ固定概念のこと、相手と楽しい時を共有する重要さなどをこのセミナーを通して学んだ。今回の日韓セミナーは楽しいだけではなくいろいろ考えさせられたこともあり、とても有意義なものであった。

# 歴史は生かせるか

笠智遥

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

- ・ 事前調査
  - 高校の歴史教科書調査…19世紀後半から20世紀前半、日本と韓国の近代化、植民地化の過程、独立運動などに関する記述の抜粋と日韓の教科書比較・分析
  - 日韓のイメージ、靖国神社、旭日旗に関するインタビュー…対象：特に親しい人（親、兄弟、親友等）
- ・ 課外活動…明治神宮、靖国神社、遊就館、高校訪問（領土問題、歴史教育に関する講義）
- ・ 日韓の歴史認識と提言をまとめ、グループ発表（パワーポイント）

### 1.2 私の学び

近年、日韓関係における歴史認識の問題が注目されている。今回は特に、どのような歴史の記述や認識が日韓の対立を生んでいるのか、また両国の歴史教育（教科書）はどのように個々の歴史認識形成に関わっているのかということ念頭において実習に臨んだ。事前学習を通して、日韓の歴史教科書を比較分析したが、歴史の教科書が多分に国家のイデオロギーを含んだものであると感じた。もちろんすべての出来事を記述することはできないが、何を含めるか／含めないかという取捨選択やその出来事をどの視点からどのように記述するのかというところに両国の政治的な歴史認識を垣間見ることができた。たとえば、三・一独立運動を、日本では武断統治から文化統治への転換点として肯定的に描写しているが、韓国では日本が武力といった直接的な支配から思想や文化といった内部にその影響力を及ぼす（洗脳する）契機になった出来事として、より悲劇的に捉えていた。よって、同じ歴史的事件でも、日本人は植民地時代の一出来事として、韓国人は先祖が民族の尊厳や誇りを侵される一大事件として捉えるようになり、こうした認識が多少なりとも日韓関係に影響を与えるのは納得できる。また、教科書の記述や遊就館訪問を通して、日本の歴史認識、とりわけ世界大戦や植民地政策について、自らが受けた被害や亡くなった日本人、日本兵への共感や被害者的な意識は強く示されているが、同時に日帝時代の政策によって、また日本が海外で引き起こした戦争・侵略などによって、被害を与えた人々やその痛み、苦しさについての意識や配慮が驚くほど欠如していると感じた。グループ発表の前日夜、日本の植民地時代の朝鮮半島内の様子について、その時そこに住んでいた人々がどのように感じていたかを韓国の友達から聞くことで、恥ずかしながら初めて日本が被害を与えた側であることを強く意識し、被害を受けた側の葛藤や苛立ち、悲しみに気付くことができた。これまで、日本人の戦時中の生活の苦しさ、戦争のむごさについては祖父母や語り部の人たちから話を聞くことでそれらが具体的なイメージとして記憶に残っていたが、たとえば戦時中に日本によって被害を受けた韓国や中国、その他アジアの国々の人々の声を聴く機会は皆無であった。現在、日本に求められる歴史認識とは、日本だけでなく他の国、地域における過去の様々な痛みや苦しみに共感し、それらが繰り返されないようにすることではないだろうか。これまでは歴史が日韓の葛藤の原因であったが、歴史は今回の実習が示すように日韓のよりよい友好関係構築に生かすこともできる。日本史、韓国史といった国ごとの分類を越えて、アジア史、日韓史を共同で作ってみるのも一つの手段だろう。

これからは、歴史を生かした国の協働、関係が築かれることを心から願う。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

- ・言語行動…友達同士の会話と議論や発表時の積極性

### 2.2 私の学び

様々な場面に対する言語選択、態度の違いが印象に残っている。事前の遠隔交流では各グループとも日本語でしっかりと自分たちの意見を発表していたので、こちらもしっかりと準備しなければと毎回構えていたのだが、実際に講義や発表、議論の際には大変静かであり自分の意見を主張しなかったことにとても驚いた。もちろん彼女たちが自分の意見を持っているということは、個人的に話す中でよく分かったが、もっと積極的で感情的に自分の意見を主張するイメージがあったので、尚更不思議に感じた。こうした態度は、日本の大学生にもよく見られることなので、文化の違いであり、類似点でもあるといえる。今回は発表や議論をする言語が日本語であったので、その制約が大きかったのかもしれない。こうしたことを除いては、特に強く文化の違いは感じなかった。言葉や社会規範は異なっているが、おいしいものを食べておいしいといい、きれいなものを見て美しいと感じるなど、人間として多くのことを共有していることを再確認した。日本語という制約の中で苦労も多かっただろうが、とても楽しく過ごすことができた。ただ、昨年このセミナーに参加した日本人から、韓国人のホスピタリティの高さと素晴らしさを聞いていたので、今回、私たち日本人のおもてなしが十分であったかは不安が残る点である。迎え入れる気持ちは十分にあったのだが、なかなかそれを態度や言葉で示すことができなかったことが悔やまれる。特に、課外活動で訪問した高校では、テーマとは少々離れた講義があり、かなり専門的で難解な日本語が多用されていたので、事前の打ち合わせをもう少し詳しくしておくべきだったと反省している。私たちのグループがどのような目的で訪問し、どういうことを期待しているのか、そして日本語の配慮を希望していることなど、日本側がもっと準備しておくがあった。おもてなしの気持ちは、迎え入れるときだけでなく、こうした事前準備にこそ反映されるべきであった。反省点は多く残るものの、現在でもLINEやfacebookなどのSNSを通して、日韓の交流が続いていることから、今回のセミナーは有意義であったといえよう。

# 葛藤と共に知ること

小山奈月

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私たちの発表テーマである「歴史」に関して、以下の活動を行った。

まず事前学習として、各自で日本の教科書と韓国の教科書を読み比べた。

セミナー合宿3日目の自由時間の際には、靖国神社と、併設されている資料館『遊就館』を見学した。その後、千葉県立市川昂高校で教鞭を取っていらっしゃる吉井先生の元を訪ねた。吉井先生は日韓の歴史研究をなさっているそうで、その伝で、大学で歴史を教えている先生を紹介して頂き、特に「竹島の領土問題」について日韓の歴史認識がどのようなものであるか、お話しいただいた。その後、先生方に質問を行った。

発表準備段階では、個々人が事前学習や見学を行ってどのように感じたのか、意見を述べ合いながらまとめていった。

### 1.2 私の学び

様々な活動を行ったが、その中で特に私にとって学ぶべきことが多かったのはやはり、発表準備の時のまとめだ。私が担当したのは、日韓の教科書における戦前の出来事についての記述の差を探し、まとめることだった。このように言葉にしてみると単純な作業のように見えるが、実際に行ってみると、終始悩み、躊躇いながらの作業であった。

教科書の記述の仕方がまるで違うことに戸惑った。発表でも述べたが、日本の教科書が淡々と客観的に事実を記述するに留まるのに対し、韓国の教科書はどこか感情的で、主観的だ。故に、日本の教科書では戦争体験の悲惨といったものは伝わりにくいと批判することも出来よう。例えば、関東大震災に関して、在日の韓国人に対する虐殺が民衆によって行われたが、日本の教科書ではどこもなく冷めていて、「パニックに陥った民衆が朝鮮人を殺すこともあった」とあっさりとしている。片や韓国の教科書では、韓国人が何故その時代に日本にいたのかという、徴用制の話から記述し、そして残虐で非道な日帝は、韓国人を保護するばかりか殺したのだ、と日本の何倍もの記述量で詳細に述べる。このような記述が悪いとは思わない。けれど私がこの教科書を読んで一番に考えたのは、だから韓国人は、戦前・戦時中の日本の行いが悪いと断言出来るのだ、日本人を嫌ってしまうのだ、ということだった。韓国の教科書は、少なくとも私が目にしたのは、日韓の間で起きた様々の出来事を、政策を、事細かに記述している。しかも教科書なのだから当然なのだが、とても理解しやすく、すんなりと頭に入るものだった。私にとっては、日本の教科書は、それ単体ではとてもじゃないが歴史の前後関係が分からない代物だ。授業で先生が噛み砕いて話すことで初めて、実際に起こった出来事として受け取れる、というレジュメのようなものだ。けれど韓国の教科書はそれを読めばすぐに歴史がわかるというほどに分かりやすい。日本人は、歴史認識、などと言われると自分の学んだ日本史を思い出し、なんだかよく思い出せない、よく分からないと思ってしまうことが多いようだ。けれどこれだけはっきりと記述されている教科書を読んでおけば、どれほど時間が経っても、記憶が多少曖昧であっても、韓国の人々は少なくとも「日帝が悪いことをした」ことだけは忘れないだろう。日本に対するネガティブキャンペーンのようにも感じられなくもない韓国の教科書を前に、私は戸惑った。

私がここで書いたようなことを、安易に口にしていいいのだろうか。それは、韓国への批判、ひいてはすっかり仲良くなってしまったグループの面々を傷付けてしまうのではないだろうか。そもそも、私の考えたことは、間違っていないのだろうか。

語句一つ尋ねることさえ躊躇った。日帝、という言葉から、私は戦時中の大日本帝国に対する無言の嫌悪を感じ取ってしまっていた。別に大日本帝国は私ではないのに、なんだか私の属性をけなされたような気がしてさえた。けれどもこれは、後に私がうっかり発表中に多用した「朝鮮」という言葉と同じで、悪意はまるで無いのに、呼ばれた対象がそれを好まないという、扱いの難しい呼称の問題であったようだ。

ここが違っている、と指摘することもつらかった。相手は韓国そのものではない。韓国から来た留学生だ。けれど、私が韓国の教科書の言葉に違和感を持つことで、そしてそれを伝えることで、彼女は私に否定されたように感じてしまわないだろうか。理性で分かっている、どこかで傷ついたりはしないだろうか。

これほどに気を遣い、悶々としながら発表課題をまとめたことはなかった。相手とは十分親しくなっていたのに、だからこそ、相手を傷付けたくはなかった。けれども、この機会を逃してしまえば歴史の話在韩国の人と直接する機会なんて無いと、気付いたことは全て言った。

結局、発表は単に記述の違いを述べるだけに留まった。もう一つ踏み込んで、感じたこと、考えたことを述べられれば良かったが、私にはまだ、荷が重すぎた。それよりも、私はこの葛藤の記憶を大事にしたいと思う。この葛藤は、相手に対する情が無ければ存在しなかったと思うからだ。そしてそれは決して不必要なものではない。寧ろ、とても大切なものだ。

私の学びは、異文化交流はこのような葛藤をもたらすものでもあるということだ。この葛藤の向こうはまだ見えなかったが、いつか無くなるようなものでもないのだと思う。

相手への思いやりと、それでも知ろうとする意志を持たねば、異文化交流は成しえない。日本と韓国とは遠い国と表現されることが多いが、それはあまりに互いを忌避し過ぎていたが為ではないだろうか。私たちはこれから、深い葛藤や、痛みを感じながらも相手を知ろうとしなければならない。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

文化の違いになるのかどうか分からないが、「親日派」という言葉の使い方にギャップを感じた。

グループの韓国側の彼女曰く、韓国における親日派とは、戦時中に日本にあった人々で、それにより富を築いたり、権力を得た人々を指すという。そして、親日派でありながら韓国内で豊かな生活を送っている様子を、醜いとか、問題だと感じるという。

私は親日派、という言葉を知った時は、政治的に日本に有利になるようなことをする人間であったり、日本の文化を好む人々のことを言うのかと思っていた。例えば日本で言えば、自民党は親米派と言えるし、デーブ・スペクターは親日派芸能人だろうか。いずれにしても、醜い、という言葉で表すことはあまりしないように思う。ここから、韓国の人々は愛国心が強いのではないかと感じた。

### 2.2 私の学び

普段ことさらに日本人であることを意識しない私にとっては、日本の教科書が自国を指す時に「日本は～」と述べるのに対し、韓国の教科書が「われわれは～」と表すことさえ強い違和感となっていた。そこに親日派は醜い、というコメント。そして、他の授業の課

題で取り上げる為に調べた「韓国的キリスト教」の在り方が思い起こされる。韓国的キリスト教は、日本による侵略の進む最中に流行したという背景の為に、シオニズムにおけるユダヤ人の在り方と韓国人とを同一視するような、レジスタンス精神や愛国精神を盛り上げるような要素を持つという。このようなバイアスにより、韓国人は自国を愛しすぎている。時に他者批判的になり過ぎる。と否定的に考えてしまった。

けれども、この私の考えこそが偏見というものだったのではないかと、セミナーが終わってからであったが気付かされた。きっかけは単に、教科書の主語が「我々」であることについて両国の先生にお尋ねしたところ、「そういう文化なんじゃないの？」と事も無げに言われたことであつた。

私は今まで、相手の文化を受け入れることを目指してきた。それがどんなにめちゃくちゃに感じられても、否定するのではなく、理解したいと思っていた。けれど、現実には理解の及ばないことの方が多い。時に、理解も何も、そもそも特に考えずに習慣として行っているだけのこともある。全てを理解できると思っていたこと自体が浅はかだったのだと、その時実際に体験して、漸く気付かされたのだった。

親日派、というものを韓国の彼女が醜いと思うのなら、それはそういう風に彼女は思うのだらうと思つてしまえばいい。教科書が「われわれは～」と言うのなら、へえ、日本と違うのね、でいい。違いをただそこにあるものとして認識してしまうのがいいのではないだらうか。そして、どうしても受け入れられないと感じるならば、忌憚なく話し合つてみるのもいいのだらうと思う。とはいえ、話し合うことが出来るのは、相手と親密になつてからではあろうが。

# 異文化交流の醍醐味

梨本夏菜子

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私の所属は教育グループである。私たち教育グループは日韓それぞれにおける教育の問題点を調べ、それに対する改善策を日韓両国の長所なども参考にした上で探っていくことを目的に研究を進めた。ただし一口に教育といっても扱う範囲が非常に広がってしまうので、以下の三点に範囲と題材を絞ることにした。まず小学校における英語教育。次に大学受験勉強について。最後に大学生の学習意欲の実態についてだ。この三点だけでも十分に範囲が広く感じられるかもしれないが、日韓それぞれで焦点の当てたい問題にかなりの差異がありながらも、それらを尊重し、話し合っている程度妥協し合った結果なので許していただきたいと思う。そしてこのなかで個人的に学びが多かったと感じるテーマは日韓の大学受験についてである。調査活動はだいたい次のように行った。まず日本・韓国のメンバー全員に今まで自分がどのような教育を受けてきたのか（何歳から習い事や塾を始めたなど）について各々まとめ、提示しあった後、気になる点についてはより詳しく話してもらったり、インターネットを通じてそれに関するデータを調べたりした。またセミナー中の実習では、東大のキャンパスに場所を借りて、様々な大学に在籍している日本人大学生を集め、自らが受けてきた教育とその問題点などについて思うところを各々に語っていただく場を設けた。ここにおいて韓国の子たちは事前に内容を考えてもらっていたインタビューを行ったりして、比較学習を深めていった。

### 1.2 私の学び

大学受験の問題に関しては、韓国の受験競争の厳しさはよく知られるところなので、日韓で大きく違いが比較できる分野だろうと考えていた。実際に韓国の子たちにインタビューしていくと、高校1年生の時から強制的な夜間学習があったり、部活動がほとんどなかったりと、私が経験してきた高校時代とはかなりかけ離れているものだった。しかしよく調べていくうちに、日本と似通った問題も起きていることに気が付いた。例えば私費負担の重さの話が韓国側から出たが、それは日本でも問題になっている。奨学金滞納問題も深刻になっていることも耳にしたことがあった。また韓国では進学する大学によって将来が決定してしまうというが、日本でもまだ大学のネームバリューの力関係は根強く存在する。受験制度を見てみると、日本の大学受験も韓国の大学受験も一発勝負的な性格を持つ。さらに塾や予備校、教育熱心な親や進学高からの大学進学への圧力が辛いといった問題は、程度の差があれど、日本の進学校出身の学生からも同じような声を多く聞いた。以上のように予想していたよりも非常に多く、日韓で似通った問題点が大学受験の分野で浮上したのは驚きであったし、たいした問題点は挙げられないのではないかと浅く考えていた日本の大学受験に対して客観的・批判的な視点を養うことができた。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

七日間共同生活を行ってきたなかで実際に見たり感じたり、また韓国側の子たちとの会話の中で、「日本ではこうだけど、韓国ではこうなんだよね」というように教え合ったりし

た結果、発見した文化の違いはそれなりにある。例えば韓国側の子たちの声が少し大きく感じたり、食事の礼儀作法において違いがあったり、言葉が直接的だったりすることだ。そのような文化の違いをそこそこ感じはしたが、正直に言って、実際の共同生活の中でより多く感じとったのは「違うこと」よりも「同じであること」だった。それはおそらく、事前に韓国側の子たちが日本の礼儀作法や言動の特徴を踏まえて、いわゆる「郷に入れば郷に従え」の精神で気を使ってくれたことに起因する部分も少なからずあるであろうし、私たちが事前に韓国の文化の特徴についておおまかにでも学んでいたことも要因のひとつであると思うが。ただし文化の違いによって困ったことが全くなかったわけでもない。韓国では日本で常識とされる「空気を読む」というような文化はあまりない。だから私たち日本人からしたら、「そこは何も言わずともこうするべきだろう」と思うような時でも、私たちがそのまま何も言わなければ、韓国の子たちは自分たちの思うようにそれぞれ行動を起こしてしまう。それによって私たちは後手に韓国側の希望にそうように対応をはかった場面が少しだけだけがあった。また事前のテレビ会議や facebook でのやりとりにおいては、日韓で焦点を当てたい問題にすれ違いがあったり、言語的問題から相手の意図が上手くくみ取れなかったりして、全く話し合いが進まないようなこともよくあったので、実際に会って話し合いを進めるまでは本当に発表まで漕ぎ着けられるのかという不安はかなり大きかった。

## 2.2 私の学び

上で挙げたような文化の差異による問題や不安を乗り越える、というか気にしなくなったことに大きく寄与したのは、先ほども言及したが、私たちは「同じ」だと感じることであった。韓国の子たちと打ち解けていけばいくほど、そう感じる機会がどんどん増えていったように思う。例えばユーモアの感覚が同じだったり、夜に恋愛の話になると物凄く一緒に盛り上がるのができたり、韓国語で韓国の子たち同士で話していても、なんとなくではあるが雰囲気では何の話をしているのかが想像できたりすることもあった。そのように、私たちは日韓関係なく「同じ」なんだと感じられる場面に出会ったときの方が、ちょっとした文化の違いを感じるような場面に出会ったときよりも何倍も感動し、嬉しく思った。文化の差異を発見し、その原因や由来を学び理解することも無論重要なことであるが、それに加えて、お互いの共通点を見つけて「私たちは同じだ」と感じることも非常に大切なことであると私は実感したのだ。つまり「差異」を興味や関心のきっかけにして、その後理解を進めていく過程で「同じところ」「共通点」に気が付き、親近感を覚え、より仲良くなっていくというプロセスが異文化交流の醍醐味のひとつではないかというのが、私が今回の日韓交流を通じて得た学びだ。このプロセスは日韓に限らず様々な異文化交流の場で当てはまることも多いと考えるが、すべての人がそのように上手くいくわけでもないだろう。例えば「差異」や「違い」を知ることで興味を持ち、もっと知りたい理解したいと思ってそこに楽しさを覚える人もいるが、「差異」を知ることで恐れや拒絶を覚える人もなかにはいるだろう。また先ほど言ったプロセスの順番がひっくり返り、「共通点」を見つけ興味を覚えて交流を進めるなかで、やはり「違い」の方が多く感じられて、気持ちが離れていってしまうような場合もあるだろう。しかしこの日韓セミナーにおいて私は、最終的に貴重な友人関係を築き上げて先ほど述べたような醍醐味を味わうことができた。この経験はこれからも様々な価値観や文化に接するような場において役立つだろう。だからこの醍醐味を少しでも多くの人に味わってほしいと思うし、その楽しさを多くの人に伝えていきたいと考えている。またそのためにも、この日韓セミナーのさらなる発展に期待したいと思う。



# セミナーを通じて

柿平恵理

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

今回私たち教育グループは、日韓の教育比較からより良い教育を探る、ということテーマに活動してきた。英語教育、大学受験、大学における学習意欲の三点を軸に研究したが、自分にとっては特に英語教育研究において学びが大きかった。事前学習では、日韓の英語教育に関して様々な文献やインターネットを用いて情報収集に努めたが、セミナー中に行った実習や韓国学生たちとのディスカッションで多くの気づきを得た。実習では、東京大学駒場キャンパスで様々な大学から現役大学生を招いてインタビュー及びディスカッションを行った。英語教育に興味関心を持つ学生たちも多く、日韓英語教育の違いや日本の英語教育はどうあるべきなのか、様々な意見を聞くことができた。また、韓国学生たちに自らの受けてきた英語教育についてインタビューすることで、文献などでは得られないような、学生たちの身近な韓国英語教育に対する意見を聞くことができた。

### 1.2 私の学び

もちろん、何より強く実感したのは、互いの受けてきた英語教育の違いである。以前は互いに似通った英語教育を行ってきたはずの二国だが、今や韓国は日本の十年、二十年先をいっていると言っても過言ではないほど日本を引き離れた。日韓両国の英語教育を比較したとき、見つかる最も明らかな違いは小学校における英語義務教育の有無である。日本は2011年によりやく小学校の英語教育を必修化させたが、韓国ではそれが既に1997年から始められていた。加えて、日本では英語教育が必修とされるのは五年生からである一方で、韓国では三年生からである。しかしこれも現在では一年生からに拡大されている。こうした英語教育の違いにより、両国の学生の英語力には大きな差が生じていることが多くの調査によって明らかにされてきた。小学校英語が必修化されていなかった当時、私が中学入学後に学び始めた基礎を、韓国の学生たちは既に小学生のうちに習得していたのであるから、両者に差が生まれるのは無理もない。こうして見てくると、明らかに日本の英語教育が後進的に思われるし、その先進的な韓国の英語教育を私自身羨望のまなざしで見えてきた。しかし、今回気付かされたのは、その英語教育にもメリットと同時にデメリットが孕んでおり、完璧な教育など存在しないということである。今回のセミナーを通じて韓国側を悩ます韓国英語教育の影も見えてきたのである。一つ挙げられるのは、子どもの早期教育によるギロギアッパ(기러기아빠)問題であろう。これは、子どもを英語圏へ早期留学させる際、妻と子どものみが海外へ渡り、韓国に残された父親は経済面での負担を強いられるため精神を病む等の、韓国英語教育の過熱が生んだ社会問題である。日本ではこうした社会現象は一般的では無く、ここに、韓国における英語教育への過度とも言える熱意とそこに潜む影が認められるであろう。このように、私たち日本側から見れば、一見理想的とも言える韓国の進んだ英語教育には、メリットと同時にデメリットも隠されているのである。教育は、その国の基礎である。教育は、その国のあり方を大きく左右する。しかし、どの国にも、どのような教育にも、完璧な正解など存在しないのではないだろうか。未だ正解に辿り着くことができないからこそ、常に新たな教育を模索し続け、改善していく必要があるのである。韓国の教育に見習うべき点、改善点の両者が存在するように、ま

た日本の教育にも長所と短所が存在する。私たちがより良い教育を目指すために必要なのは、他国の教育をただ賞賛し自国を卑下することでもなければ、他国をただひたすら非難し自国を賞賛することでもない。私たちに何よりもまず求められるのは、相手をよく理解することである。他をよく理解し、そこでの気付きを自らの教育に活かさなければならない。相手の教育を理解してこそ、自国の教育は良くなり得るのである。このセミナーにおける実習や調べ、対話を通じて私は、論文や資料に見えるものだけではない、より身近で意外な両国の教育の持つ長所と短所にも気付くことが出来た。両国の教育はもちろん完璧ではない。だからこそ、今回得た、どんな教育にも光と影が存在する、という学びがより良い教育を目指すその一歩になるのではないかと思う。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

日韓の間にどのような違いを感じたか、実のところ、私はこの質問にははっきりと答えることができない。なぜなら、私はこのセミナーを通じて、本当は私たちの間に大きな差などないのではないかと、ということに気付かされたからである。もちろん、日韓の間のどこにも違いなどない、というのではない。必ず何か違いを述べなさいと言われてれば、韓国人は接触行動が多い、自分の意見をはっきりと言う、美意識が高い、とでも答えるであろう。日本人一般に比べれば、韓国の女子学生たちは接触行動・スキンシップが多く、その対人距離の近さから親密さを感じられるし、一週間という短い期間でありながら、スキンシップを図ったり何でも話し合える仲になったりしたことは、やはり彼女たちの積極的なコミュニケーションスタイルによるものだろうと思う。しかし、これらの違いは私にとってさほど重要なことではない。私が本当に強く実感したのは、「同じ」ということなのである。

### 2.2 私の学び

私はこれまで、熱狂的で、自己表現が明確で、接触行動が多く、「ウリ」文化の浸透、「親しき仲にも迷惑あり」、といった、韓国文化の一部ではあるが日本とは異なるその言語行動や習慣の違いを学んできた。韓国文化にさほど馴染みの無かった私にとっては、その価値観の違いに驚かされることも多く、これらの知識は私の中で「韓国人」像を形成した。韓国に行ったことがあるのでも無ければ、韓国人の友達が多くいるのでも無いのに、私は一方的に「韓国人」を分かったような気になり、私たち日本人とは大きく違う韓国人、という日本人との差異ばかりが強調された「韓国人」像が私の中に出来上がっていった。しかし、この日韓セミナーによって私のその韓国に対するイメージは大きく塗り替えられた。これまで私が抱いていた「韓国人」像はステレオタイプに過ぎなかったのではないかと、ということに気付かされたのである。私が克服しなければならなかったのは、日韓の文化の違いではなく、むしろ、私の持っていた「韓国人」像を韓国の学生全員に当てはめようとし、その差異を前提として韓国の皆と接しようとして身構えていた、自分の柔軟性に欠けたその意識であった。もちろん、先ほども述べた通り、日韓の間に何も差異が認められない、と断言すれば嘘になる。彼女たちの人懐っこくもあるが物怖じしない姿勢は、日本人にはあまり見られない韓国人の持つ積極性としてとても印象的であったし、教育や言語、環境の差から来る価値観の違いは確かにそこにあった。日韓双方の意見を尊重しながら、計画を練ったり、発表の準備を進めたりすることは、言語の問題もあり、もちろん簡単ではなかった。しかし、だからといってそのことは、日本と韓国はこんなにも違うのだ、と私に強く感じさせるものではなかった。むしろ、協働できた喜びや、多少の困難に直面してもそれを乗り越えることができた、という達成感の方が大きく、私たちは分かり合える、私たちは「同じ」なのではないか、という思いの方が私の中に強く残った。

多様なはずの個性を「韓国人」と一つに括って捉えることは、異文化と接触する際には確かに簡単で便利であるが、時にそのステレオタイプが異文化交流の妨げになることも有り得る。まして、そこに否定的な感情が加わりバイアスがかかったものへと変化すれば、それは非常に危険なことである。残念ながら、韓国、韓国人に対してそういったバイアスを持っている日本人は少なくない。そのような中で、私はこのような韓国の皆と直接触れ合い共に生活する貴重な機会を得、自分の持つステレオタイプに気付き、そしてそれを塗り替えることが出来たのは、非常に幸せな経験であったように思う。私たち日本人と韓国人は、同じように学び、遊び、食事し、笑い合い、泣き合い、協力し合い、共に生活することができる。私たちは「同じ」であり、分かり合える。そのことに気付いた今、私は韓国の皆を「韓国人」としてではなく、一人ひとりの個性ある存在として見ることができる。共通点、を見つける事よりも、違い・相違点を見つけることの方がずっと簡単であると思う。違いは目立つばかりでなく、人々に違和感を覚えさせるからである。しかし、大切なのはその共通点に気付くことなのではないか、と私は思う。実際に会って、話して、共に生活して初めて気付く「同じ」ということこそ、協働するために重要なことなのではないだろうか。このセミナーを通じて私は、日韓の違いのみならず共通点に気付くことができ、この貴重な学びの経験が今後、自分の異文化交流体験において有意義なものになれば良いな、と感じている。

# 他人を知り、自分を知る

牛留早亜彩

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

今回、私たちの班は「日韓の教育」というテーマを土台にグループ活動を行った。まずは、「教育」というテーマでは大きすぎるので、教育の中でも何について考えて行きたいのかということの日韓各自で話し合い、それをもちよった。この結果、韓国は大学受験やキャリアについて、日本側は英語教育についてという全く違うテーマがあがったが、お互いに共通するものとして「自国の教育で自分が納得していない、問題と考えること」がテーマにあがっていることから、お互いの国の教育について比較することによって出てくる長所・短所を用いて、お互いの国の問題点を解決する策を考えるという方針になった。

その方針が決まってからは、まずは自国の教育について、お互いが出し合った受験、キャリア、英語教育について重点的に調べ、それを持ち寄り比較して解決策を練り、さらに日本での実習として、実際に現在の日本の大学生に教育について質問をして、日本の学生の現状を把握し、それらをもとに日韓でディスカッションを行って解決策を考えた。

### 1.2 私の学び

「教育」という今回のグループ活動のテーマにおける学びはもちろんたくさんあるが、何よりも今回私がこのグループ活動を通して学んだことは、自分の思っていることを、母語の違う相手に伝える難しさである。これは外国語を勉強していれば必ず突き当たる、当たり前前のごとくのように聞こえるが、今回は普通とは状況が少し違った。大抵、「言葉、自分の思っていることが通じない」という感情は、基本的にネイティブスピーカーに対して、ノンネイティブの自分の語彙力やスピーキング力が足りないことによって生じるものである。しかし、今回の場合は、それとは 180 度違い、逆にネイティブの自分が、ノンネイティブの相手に明確に伝えることができないというジレンマであった。例えば、「学習習熟度」について韓国の学生とディスカッションしているときに、日韓の中での「学習習熟度」の意味の理解の仕方が違って、ディスカッションをしているうちに何について話しているのか分からなくなって、混乱してしまったり、難しい言葉の簡単な言い方が分からなかったりだとか、言い回し方がくどくて、真意が伝わりにくいことがあったりなど多くの困難にぶつかり、またこれらを私はなかなか克服することができなかった。今まで、「世界にでていこう」という気持ちが自分の中に強かったこともあって、今まで母語の違う人々とふれあうときは、自分がノンネイティブで、相手がネイティブであることばかりであり、この逆の状況に立つことがなかなかできなかったのである。

しかし、森山先生が去年の参加者の感想文を見せてくださったとき、ある 1 つの感想文の一文に目が止まった。それは「相手が理解しているかどうかを毎回しっかり確かめる」というものだった。確かに、今まで自分たちは、とりあえず自分の言いたいことをすべて言ってから確認するというスタンスを取っていた。しかしこれでは途中で分からないことがあっても、最後まで行くうちにその分からないことを忘れてしまい、結局は分からないままで終わってしまう。それが後々積み重なって、話にずれが生じてしまうのだ。私自身が留学でマイアミやマンチェスターに行ったときのことを考えてみるとそれがよくわかった。マイアミでのホストファミリーや、マンチェスターでの先生は、ことあるごとに分か

ったか聞いてきたり、大丈夫か確認していた。少しでも私の顔に疑問の色が浮かぶとすぐに言い換えるなどの措置をとってくれていたことを思い出した。そのことに気づいて、顔色をうかがったり、質問を短いスパンで受けるようにしてからは相互の理解度がぐっと深まり、またそれが日常会話にも影響して、韓国側の学生が日常生活や日本語のことなど多くの質問をしてくれるようになり、会話がはずむようになった。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

日本と違い、韓国はやはり言い方がストレートなことや、そのためか最初から距離感が近い。また、それとは逆に距離感が近いのにも関わらず上下関係はしっかりしている。

### 2.2 私の学び

ものの言い方がストレートなのは、英語でも同じなのであまり気にはならなかったが、最初から距離感が少し近く、日本では初対面とか、会って1週間とかで聞かないような内容の質問を聞かれたときは戸惑ってしまった。しかし、彼女たちが悪気がないことは分かっているし、会話を続けようとしてくれているのだなと考えることで克服した。またこのように距離が近かったからこそ、分かれるときにたった1週間だったのにあんなにも寂しかったのだと思う。

また、その距離感の近さのわりに、上下関係がしっかりしていて、年下の子は必ず上の子を呼ぶときに敬称をつけたりするので、最初年上の3人をどう呼べばいいか、また最初の自己紹介でニックネームをつけたのだが本当にそのニックネームで呼んでいいのか戸惑い、最初は呼びづらかった。しかし、結局はニックネームも彼女たち自身が納得してつけたものであるし、あちらがいやがっている様子もなかったので名前の呼び方について気にすることはなくなった。またそのこともあってか、あまり年下年上気にすることなくなかよくできたように感じる。

# 2013 年度日韓交流セミナー報告

片山華花

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

#### 【発表に至るまでのミーティング作業】

今回の日韓交流実習で一番学びが多かったと感じるのは各打合わせ作業行程であった。事前学習と実際の実習に分けて説明したいと思う。

#### ・事前学習期間 (5～7月中旬)

会議場所：テレビ会議、Facebook、LINE

私の所属していた教育グループでは、「教育」という大きなテーマを選択したが為に、そこから教育の何に焦点を当てて調査していくかというテーマ決めの段階でまず壁に当たった。テーマ会議は両国の教育事情の実態調査と並行する形で進められ、主に Facebook を利用して行われたが頻度は少なかった。

#### ・現地実習期間 (7月25日～31日)

会議場所：ミーティングタイム、部屋での打ち合わせ、インタビュー実習

発表に向けてスライドにまとめるため、正規のミーティングタイムでは主に資料内容や現地実習で日本の大学生にインタビューして得られた内容をまとめる作業を行い、日中や夕食後の自由時間ではよりくつろいだ形での話し合いが取れることも手伝って発表内容のすり合わせを進めていった。

### 1.2 私の学び

「教育」という大きなテーマを調査し、問題提起をし、更には解決策まで考えていくというのは非常に重たいものである。そして、文化や習慣のように明確な違いや問題が二国間の問題として既出しているわけではないというポイントにより、簡単に出来ない作業であるからこそ話し合いお互いの意見を交換していくことの重要性や、異なる文化の人間同士でミーティングすることの課題をととても実感した。

まず、テーマや内容の面である。先述したとおり、文化や習慣・思想など解り易い対比物ではないということが、両者の認識の誤解を生み出し理解を阻んでいた。教育、というテーマについて考えると、私たちは自分たちの一般概念に基づいて思考するし、その思考の過程に使われる用語も「一般概念」だと思っている。しかし実際には日韓という国の違いが大きく、教育そのものに対する意識の違いが見られた。

例えば、テーマを設定する際に「学習成熟度」について調査したいと韓国側が言ってきたとき、私達日本側の学生は「学習成熟度」とは具体的にどのような概念なのだろうか？などと言語・認識的な面で悩み、グループで共有理解することが難しかった。そもそも日本では学習成熟度、というものが具体的にどのようなものをさせばいいか分からなかったり、どう測ればいいのかという点が特に班員の頭を悩ませているようだった。

このようなことを事前学習の段階で議論するとなると、短いテレビ会議の時間ではなかなか難しく、Facebook でも文字だけの押収 (しかも翻訳を通して) になってしまうために、

ミーティング作業が難航し、同じ用語を使用しているにもかかわらず受取り方が異なるため、用語認識の相互確認というものが異文化交流においては非常に大切だと学んだ。

また、実際に対面してスライドを作りあげていく中で特に感じたことだが、まとめ作業をする際に日本側と韓国側とでの乖離が割と多かったように思われる。

スライド自体を日本語で作成するため、作業を日本人の方が進めていった方が早いというのは勿論だが、全体的に日本人が色々と発表内容の形式から何かからまとめを作っていく、たまに韓国側に2、3質問を投げかけて、最後に出来上がった原稿をチェックしてもらうというような流れだった。

そのため韓国側としては手持ち無沙汰だったのではないかと、また発表内容が日本よりのものになってしまっていないかと少し不安である。

特に、発表内容に関する意見を日本と韓国と合同でじっくり話し合う機会が少なかったように思う。互いの意見自体は恐らく交換できたものの、質問や意見の応酬がある「話し合う」といった雰囲気よりは、たまに「質問しあう」といった感じであった。恐らくこれは異国同士ということによる言葉の壁と、学生の実習であり韓国側は初めての日本渡航ということもあって異国者同士の協調というものをどうしても意識に置かざるを得ないために意見などの応酬を続けることに対しての若干の遠慮のようなものが互いにあったのかもしれない。また、日本側の学生はやはり、韓国側に比べて仲間内だけで話し合うことを好むため、韓国側に自ら掛け合って引き込んでいく力が足りないようにも感じた。

PPTを作成している間も作成作業をする日本側と手持ち無沙汰な韓国側、というような構図になってしまかなかに共同進行の難しさを実感したので、今後の参考にしていきたい。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

日韓交流実習で実際に対面して共同生活を行っていく中で一番日本と韓国との間の差異を感じたことに、美容に関する習慣や行動の違いがあった。

女子学生ということで、大学生にもなれば美容のためのケアや身だしなみに心を配ることは常識のようになっていく。けれどもそれに対する行動が、日本と韓国の学生の間で大きく異なることがあったので述べていきたいと思う。

まず、朝晩のケアでは両国とも違いはとくに感じられなかった。韓国の学生も日本の学生も入浴の後には肌の手入れをはじめ美容に気を遣う姿が見受けられた。使用しているものの種類はほぼ変わらず、日本の化粧品メーカーのものは韓国で割と愛用されているということもわかった。日本では韓国コスメブームがあり韓国の学生は韓国製の物を愛用しているのだとばかり思っていたので意外であった。(それからこれは余談だが、今回の合宿ではとくに分からなかったが、日本には入浴文化が栄えているために、入浴による美容法が多いだろう。)

違いがあったのは、街中での化粧行為である。日本では公共の場所での化粧直しはマナー違反とされておりなるべく人目が少ないところで化粧をチェックし直す、というのが一般的である。

しかし韓国の学生は、電車の乗り換え時や電車内でもマイペースに身だしなみをチェックし直している姿を見かけた。恐らくこれは完全に習慣や意識の違いだと思われる。

### 2.2 私の学び

韓国の学生が、公共の場で日本人に比べて身だしなみを気にしていたところに、日本と

韓国との間では美容に関する意識の違いは私たちが思っている以上に大きいのではないだろうかと感じた。

日本では電車内等公共での化粧直しは、「みっともない」という意識がまず働く。日本でも電車内で化粧をしているも居るには居るが一般に好ましくない行為だとされているため数は少ない。なぜバッドマナーなのかという理由を説明しようとするのが難しいが、化粧を他人の前でする、という行為は恥ずかしいことであるという意識が多くの日本人の共通認識としてある。歩行しながらの化粧直しに関しては、人とぶつかって他人の服を汚してしまったり、または自分が怪我をしてしまうというおそれもあるため日本では皆無に近い行為だ。

このようにデリケートな問題なので、なんとなく日本人の側である私からこの違いについて韓国の学生に言うのは、マナー違反を注意しているような感じになってしまい申し訳ないし言いにくいという気持ちが働いてなかなか言えなかった。(しいて言うなら、一度だけ駅を歩いている時に、「怪我するかもしれないから危ないよ～」と声を軽くかけたくらいである)

日本では、韓国の美容に対する意識は非常に高い、というのをよく聞くので、そのような行為と美容意識との関係が気になったが、上記のような理由で韓国の学生に直接話を聞くことはできなかったため理解は困難であったが、「何かを良くしよう」というプラスの行いが国が違えばマイナスに働いてしまう可能性もある、そんな一例を学ぶことが出来た。



# 日韓の違いと共通点

南奈那

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

日韓の教育の違いを明確にするため、お互いの教育について話し合う。まず、お互いのスタディーヒストリーをかき、比較し、アンケートなどでより明確にした。スタディーヒストリーにより、日韓の教育において大きく違っていた「受験制度」「英語教育」「大学の授業に対する意識」の3つについてとりあげた。

### 1.2 私の学び

受験については、韓国ではかなり早くから備えるようだが、高校以降のプロセスは日本との共通点もみられた。部活動をしている人がとても少ないということに驚いた。韓国側としては、もう少し部活動を活発にし、そこでの努力も受験に組み込めるようにしてほしいということだ。そういった点では、日本の内申制度を真似すると、韓国の受験制度はよりよいものになるかもしれない。

英語教育については、韓国では早期教育・早期留学が盛んだという。日本でも早期教育が始まっているが、以前からこういった教育に取り組む韓国から学ぶべきことは多い。事実、韓国では「ギロギアッパ」や母語習得の妨げになるといった問題も英語の早期教育においてでてきている。韓国の英語教育を全体的に見てみると、英語教育を始めるのが早すぎてもいけないということがわかる。そういった点を踏まえて日本は英語教育の内容・時期についてしっかりと吟味する必要がある。

大学の授業については、韓国では就職のために高い意識で取り組んでいるのに対し、日本では教員、生徒、会社のあいだで起こっている負のサイクルにより、意識が低くなり、学校の成績の重要度も低下している。しかし、韓国側は大学の授業の目的が就職のみになっ

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

起床時間、恋愛事情。

### 2.2 私の学び

韓国の人たちはみんな起床時間がとても早いように感じた。1週間過ごして班員のなかで寝坊をした人は一人もいなかった上に、むしろ日本人よりもいつも早く起きていた。大体みんな自分が起きる時間よりも30分は早く起きていたように感じる。時にはもっと寝ていたいのに物音がするということもあったが、そのおかげで自分も寝坊をすることはなかった。早く起きて何をしているのか見てみたところ、身だしなみに時間をかけている人が多いように思われた。

恋愛事情について一番驚いたのは、兵役という日本にはない障壁だ。男性が兵役の際、交際をやめてしまうケースが多いという。日本にはない事情だったのでとても新鮮だった。兵役の際には、メールか文通のみしかほとんどできず、電話はできないという。途中で休暇のため帰ってくることはあるが、ほんの数日のみのため、またすぐに戻ってしまうという。

しかし、兵役から戻った時には、多くの男性が筋肉をつけて帰ってくるので楽しみだとも話していた。文化の班の発表でも取り上げられていたが、「肉食系男子」が韓国で人気があるという背景にはこういった事情があるのかもしれない。

その他、あまり韓国との違いというのは感じられなかった。むしろ、似たような考え方、感性を持っているように感じた。日本人同士で話しているような感覚で韓国の友達と話していた。そのことがとても驚きであった。

# 日韓交流を終えて

山本梨紗

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私たちのグループは、ドラマや映画などのメディアで描かれる「家族関係」と「男女関係」に注目し、日韓でどのような差があるのか、またなぜ違うのかについて調べた。「家族関係」では嫁姑問題とマザコン・ママボーイを、「男女関係」では草食男子と肉食男子をそれぞれ扱った。事前学習でのやりとりや資料の共有は主に Line と facebook で行い、現地実習では、日本の草食男子が描かれているとして『箱入り息子の恋』を池袋の映画館で鑑賞した。

### 1.2 私の学び

現地実習の移動中、「日本語では『〇〇する方がいい』よりも『〇〇した方がいい』という言い回しをよく使う。でも『〇〇しない方がいい』とは言っても、『〇〇しなかった方がいい』とは言わない。それはなぜか」と質問された。普段考えもしない内容で、頭を抱えると同時に、こちらのことを知ろうとしてくれていることがとても嬉しかった。同じようにこちらでも韓国語について質問しようとしても、恥ずかしながらこちらは韓国語がほとんど話せない。セミナーでの使用言語は私たちの母国語である日本語で、言語の上で歩み寄ってもらっているのは事実だ。言語的に優位にたたせてもらってしまっている私たちにできることは何だろう。そう考えた時私が思い出したのが、今年のセミナーの発表中の韓国の生徒の様子だった。「全然頭に入ってこない」とつらそうにしていた子がいたのが心のしこりとして残っていたのだ。私たちにとっては母国語でも、彼女たちにとっては第 2 外国語での発表で、その負担は半端なものではない。そこで、スライドや原稿に理解しづらい言葉遣い、単語や言い回しがないかどうか、ひとつひとつ確認し、同じ内容でも少しでも伝わりやすいように心を配るようにした。私たちのグループの発表内容は、他のグループに比べると意見の衝突の起きにくい題材だった。比較的早い段階で発表内容をまとめられたので、例えば、「執着」などのスライドの読みにくい言葉にはルビを振り、「景気低迷」より「不景気」の方がピンとくるということだったので書き直し、「嫁姑」という単語が初見では分かりにくいという指摘があれば口頭で韓国語の注釈を入れるなどの工夫をした。最終的には韓国語の注釈のある個所の発表担当ではなくなったのだが、発音のへたくそな私に合わせて、分かりやすいようゆっくりと発音してくれたり、根気よく練習に付き合ってくれたりした。今年のセミナーではそこまで気を回す余裕がなかったので、個人的にステップアップできた部分かなと思っている。お互いがより理解し合おうという気遣いがあったことが、無事発表を終えられたことにつながったのではないかなと思う。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

「ちょっとしたこと、例えば扉を開けて待ってくれた時や人にぶつかってしまった時に、日本のみんなは、ありがとうとごめんねを言うね」と同じ班の韓国人の人たちが指摘してくれた。特に意識していたわけではなかったのだが、確かに無意識的に口をつけて出てきていた。

## 2.2 私の学び

私は昨年もこの日韓セミナーに参加したが、昨年以上に「日本人だから」「韓国人だから」といった差は感じなかった。グループでの事前交流が昨年は Google+ でテレビ会議形式が中心だったのに対して、今年の事前交流が主に文面のやりとりだったということや、今年は開催地が日本であり、生活様式が自文化だったことも大きな要因であったと思う。そういう意味では、昨年のセミナーの方が人との距離感の違いや食事などの生活様式、習慣の違いを強く感じた。今年はおそらく韓国人側の方たちのほうが「文化の違い」を感じたのではないだろうか。2.1 で挙げた日韓の違いも、私が感じたことというよりは韓国人の人たちが口にしてくれたおかげで「言われてみればそうだな」と認識したことだ。

私はむしろ、どういう人が韓国人で日本人なのか分からなくなった。一般的に言われるような「日本人と韓国人の違い」を感じるというよりは、あくまで個人の範囲内だと感じた。韓国人も控えめな人は控えめだったし（ただ、それが元の性格なのか、言語的な不自由さからくる控えめさなのかは微妙なところですが）、日本人でも積極的で押しの強い人は強い。特に私は「日本人っぽくない」「こういう（韓国的な）環境の方が合うんじゃないですか」などと言われるので、そういう私の性格も関係しているかもしれない。もちろん生活様式はこちらに合わせてもらっているし、使用言語の上でハンディがないという前提がそう感じさせるのかもしれない。

韓国の文化習慣に入っていれば自分の中の「日本人」が浮き彫りになりやすかったが、今回のような自文化の文化習慣の中では見えにくかった。少なくとも昨年の方が驚きは大きかったように思う。今回のセミナー中の交流において感じたちょっとした差は、お互いの気遣いがあれば乗り越えられる程度の差であるように感じた。

セミナーを通じてとても良い友人を得ることができたので、昨年同様、これからも交流を続けていきたいと思う。

# 日韓交流セミナーを通して

池田亜枝

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

文化グループは「メディアから見る日韓の文化」を発表のテーマとした。日韓どちらのグループもメディアを通じた大衆文化という馴染みやすいものから、文化の差異または共通点を見つけ相手を理解するヒントを見つけることを目標とした。特に自分たちが女性であること、女子大学に通っていることを活かしてドラマや映画の中で表象される女性像の違いに目を向け、自分たちとその将来を見つめなおすきっかけとなることを目指した。

発表は大きく「家族・嫁姑関係」と「恋愛観」の項目に分け、私は「日本における嫁姑関係のイメージと現実とのギャップ」について担当した。

### 1.2 私の学び

「嫁姑とは対立しているものである」というイメージは確かに私の中にあっただが、それと同時に実際の自分の家庭を鑑みても決してそのようなことはないの、自分の中には2つの相反する嫁姑観が共存していた。そしてこれは多くの日本人に言えることなのではないかと考えた。

調査してみると、発表した通り日本での嫁姑関係は悪くないようである。姑と同居している20代から50代の嫁にアンケートをとったところによると若い世代を中心に姑との関係は良好であると答えた人が過半数を超えていた。また思ったより姑に気を遣わなくても良かったと答えた人が90%を超えていた。これは「嫁姑関係は悪い」というイメージを持っていたが実際にはそうでもなかったというギャップがあることを意味している。メディアの影響による嫁姑関係に対するステレオタイプ的なイメージが先行していることや、時代の変化により女性の立場や年功序列の意識が変化していることが考えられる。

しかし嫁姑関係に悪いイメージを持っている人が多いにも関わらず実際にそのようなドラマや映画を探してみると、なかなか見つけることができなかった。確かに「渡る世間は鬼ばかり」という代表的かつ有名な作品はあるが、橋本壽賀子脚本以外のものをみつけるのは容易ではなかった。つまりドラマや映画はこのステレオタイプの形成にさほど関わっていないかもしれないのである。

では、どのようにこのステレオタイプが形成されたのだろうか。考えられるのは①韓国にもあるようなバラエティ番組の影響②視覚的なメディア以外(雑誌や新聞)の影響である。

②の新聞は、私も中日新聞の「ねえねえちょっと」という投稿欄で嫁姑についての愚痴をよく見かける。ただしほとんど年配者からの投稿で、このようなメディアからイメージが先行した若い世代で、実際とのギャップが引き起こされているのではないかと。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

私たちのグループは事前の遠隔交流に主にFacebookとLINEも用いた。資料・原稿や参考サイトの共有にはFacebookを用い、テーマについての話し合いやその他の交流はLINEで行った。

LINEでの交流の際、韓国側から実際に会う前に名前と顔を一致させるためにLINE

のアイコンを顔写真にして名前を実名にする提案が出された。その時私はアイコンも自身の写真ではなく名前も自分の名前が連想できないようなものであった。韓国側の提案が有用であることは容易に納得できるし、実際韓国側は全員そのようにしてくれた。しかし私には抵抗があり、結局名前は本名と同じものにしたがアイコンを変えることはなかった。日本人の他のメンバーはそのように変えたメンバーもいるし変えなかったメンバーもいる。また変えたメンバーも抵抗があったと言っているメンバーがいた。

## 2.2 私の学び

授業で事前に学習した通り、日本には「内と外」という意識があるために抵抗を感じるのではないかと考えた。LINEは電話番号からも簡単に検索できてしまう開けたツールなので、知られたくない相手、つまり外の間人からも自分が特定されてしまう可能性がある。

実習で実際に寝食を共にする期間は限られているので、事前に発表内容だけでなく親密さを増しておくことも極めて重要な事である。顔と名前の一致は最低限のことであるし、では私たちは韓国側の提案を受け入れたほうが良かったのだろうか。

この問題を考える上で①韓国と日本のSNSに対する意識の違いと②韓国という日本とは異なる文化を持った人間からの提案に対する対処の2つについて考える。

①に関しては上で述べた通り日本の「内と外」の意識が関係していると考えられる。では②に関してはどうかであろうか。今回日本人側が韓国側からの提案に戸惑ったことは確かである。日本人がLINEのアイコンに自分の顔写真を使うことに抵抗を感じることは明白であり、例え交流のために良いと思いついたとしても提案することははばかれる。今回私が自身でこの提案を受け入れるために「韓国という自分とは違う文化圏の人からの提案である」ということを利用した。そう考えなければ「配慮が足りない人だ」と思ったかもしれないし、「情報教育を受けているのか」と疑問に思ったかもしれない。このようにお互いが異なる文化背景の中で育ってきたということを知っているか、意識できるかということは異文化間の交流において大切なことであると考えられる。

2つの文化があればその中に差異があることも、予想していたよりも似通っているということも、交流を進めれば進めるほど多く体験する。私が今まで様々な異文化交流を経験してきたと感じることは、まず初めにその差異に目が行き、次に共通点に目が行く。世界のどこ都市へ旅行に行ったとしても同じように見えたり、アジア圏であれば似た環境や歴史を持っているのでその共通点の多さに驚くことになる。さらにグローバル化が進み、インターネットの整備が進み、世界のどこにいても日本と同じような生活をするができる、という感覚を持っている現代人は多いのではないだろうか。しかし私は更にその先に進むと、また改めて差異を体験すると考えている。「差異が目についたが思ったよりも共通点が多かった。しかし更に交流をはかると細かい差異が再び立ち現れてくる。」という感覚である。文化背景が異なるということはやはり異なる感覚を持っているということなのである。今回の交流セミナーで、私たちは日本・韓国という近い国、また全員女性であり、大学生であり、立場はとても近い者同士が交流したと考えている。だからこそその共通点に目が行き、「こんなに似ているのだからもっと仲良く出来るのではないか」という安易な考えに陥ってしまう考えがある。そう考えてしまうと、今回の韓国側の提案の受け取り方もネガティブなものに変わってしまった危険性がある。

私は普段から国際交流に興味があり、留学生や外国人と接する機会も多い。国際交流・異文化交流を続けるということは発見の連続である。新しい人と出会う度に私の中の国や文化に対するイメージは再構築されて行く。それは楽しいだけではなく、知識や知見の広がりや意義を意味する。今回の交流でも私はそういう面で成長したと思うし、これからもこうい

った交流を続けて行きたいと感じることができた。

日本経済新聞 [http://www.nikkei.com/article/DGXNASFK0500E\\_V00C13A2000000/](http://www.nikkei.com/article/DGXNASFK0500E_V00C13A2000000/) (2013  
年 8 月 27 日)

# 日韓の文化の違い

酒井佑果

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

人間関係における日本と韓国の文化の違いを、各国のメディアを通じて研究し、発表した。

### 1.2 私の学び

私たちの班は、日韓のドラマや映画で描かれる人間関係について比較研究した上で、文化の違いについて発表した。その中で学んだことは、例えドラマや映画という架空の世界であっても、きっちり日本と韓国の文化の違いは反映されているということだ。例えば、日本人は、家族同士であろうが、恋人同士であろうが、韓国人と比べると、相手との距離が遠く、それに対し、韓国人は非常に人と人の距離が近い。これは、ドラマにおいても現実の世界においても言えることだ。

「どの韓国ドラマにも不可欠なシーンについて。それはずばり『家族愛』を描いた場面である。恋愛もの、サスペンス、時代劇など……どのジャンルのドラマであっても、韓国ドラマでは親子や兄弟姉妹の強い絆が色濃く描かれている。比較的ドライな人間関係を好む日本人にとって、韓国人の濃厚すぎる家族愛はときには理解しがたいものだが、韓国では当然のことであり、そうすることが道徳的に正しいとされている。」

『口げんかのシーン』。どんなドラマを見ても、かならず一話に一回は出てくるお決まりのシーンである。些細なことが原因で激しく言い争う姿に「なんでそんなに怒るの？」と首をかしげてしまう人も多いただろうが、思ったことや不満を言わずにはおられない韓国人の国民性を反映しているもので、これも韓国ドラマに必須のエッセンスといえよう。」

これらは、本田恵子という韓国ドラマの字幕翻訳を手がけている人物の韓国ドラマに対する分析である。同様のことを私たちが調べた発表の中でも感じた。例えば、日本の「マザコン」に関する認識についてだが、マザコンは決して日本で好意的に捉えられていないが、韓国では親との距離が近いことは当然のこととされ、日本ではあまりに人と人の距離が近いと照れくさかったり、恥ずかしいことだとされたりする傾向があるが、韓国ではそのような強い絆で結ばれた親子関係はごく普通のことであるらしい。そのような文化の違いが、濃厚な家族関係が扱われることが多いという、韓国ドラマに表れている。また、「思ったことや不満を言わずにはおられない韓国人の国民性」も然りだ。私たちの発表の後に、ある一人の韓国人の学生が、「日本では『本音と建前』という文化があるから、不満があっても口に出さないため、ドラマで嫁姑の対立があまり描かれないのではないか」という感想を述べていたが、そのような点においても、日本古来の文化が表現されていると感じた。次の「日韓の文化の違いと学び」の項目でも述べるが、いさかきを好まず、「和」を乱さないことを心がけ、比較的あっさりとした人間関係を好む日本人に対して、韓国人は自分の意見をはっきり述べ、言い争いも当たり前だが、その流れを通じて人と人の距離が近い人間関係を作り上げる。きっと韓国人は日本ドラマのような、激しい言い争いは登場せず、微妙で繊細な心の動きを描いたドラマでは物足りなく感じることもあるだろうし、日本人は韓国ドラマのような、激しい口調で勢いよく言い争うシーンが多いドラマに驚いてしまうだろう。このように、文化の違いがよく反映されたドラマや映画は、単なる娯楽として



だけではなく、異文化を学ぶことのできる重要な手段でもあったと感じた。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

日本人は周りの意見を尊重し、自分の意見を控えめに述べるのに対して、韓国人は自分の意見を積極的にはっきりと述べるという違いを感じた。

### 2.2 私の学び

私がこのセミナーを通じて感じたのは、日韓の自分の意見を主張する際の姿勢の違いだ。例えば、発表の準備をしている過程で、グループ内ではとことん話し合ったが、そのときにも韓国の学生はとても積極的に意見を述べていた。海外でのホームステイをした経験などから、自分の母語でない言語で自分の考えを表現することの難しさは十分知っていたが、文化グループの韓国の学生は、実習で見た映画に対する感想についても、パワーポイントのレイアウト一つをとっても、皆よりよい発表にするために一生懸命考え、例え片言の日本語であっても物怖じせずに自分の思ったことは率直に述べていて、その積極性に驚いた。一方で、これが「日本人の傾向」だとステレオタイプ的に述べることはできないが、日本人である私は自分の意見は控えめに述べ、相手の意見を尊重し、ひたすら話し合いが円滑に進むことばかりを最優先してしまう傾向があるということ、セミナー中常々感じていた。

このことから得た学びは、自分の意見を積極的に述べる事の大切さだ。今回同じグループだった韓国人達は、相手が自分と違う意見を述べたら、納得する結論が出るまでとことん議論していた。なんとなく妥協して、相手の意見を通すという事が決まっていなかった。この姿勢は、大勢で共同の作業をする際にとっても重要なことだと感じた。例え議論の中で衝突する事があっても、それを乗り越えていいものを作ろうとする、そのような態度が新鮮で、発表の準備のためのたくさんの話し合いも苦ではなかった。もちろん、日本のように和やかな空気のなかで良いものを作ろうと意見を述べ合うという姿勢も私は好きだ。しかし、韓国という、意見を主張する姿勢に関して日本と正反対の国の文化に触れて、お互いに思ったことを率直に述べ合う潔さも重要だと感じるようになった。文化の違いは優劣をつけることはできないが、違う文化に触れてみて自分の文化を省みることができた、貴重な経験になった。

### 参考文献

館野 哲 (2012) 「韓国の暮らしと文化を知るための 70 章」 明石書店

# 日韓セミナーを終えて

吉村茜

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

文化グループは「メディアから見る日韓文化研究」というタイトルで、日韓ドラマから見た家族文化と男女関係を題材として扱った。両トピックともに共通して、「女性」を軸に調査・考察を進めていった。家族文化では嫁姑問題を、男女関係では巷で話題に上る「草食系男子・肉食系男子」を取り上げた。普段お茶の間から流れる身近な存在であるメディアから、家族や男女関係といった女子大生の興味を持ちやすいトピック、かつ、日韓に共通点や相違点を見出しやすい素材であると考えたからである。

実習先は映画館を選び、『箱入り息子の恋』を鑑賞した。それまでのあいだに原宿の竹下通りや明治神宮を観光し、夜は隅田川花火大会へと繰り出した。実習期間中は送別会の出し物であった、K A R A の Pretty Girl ダンス練習にも励んだ。

### 1.2 私の学び

私が担当したのは、男女関係についてである。日本人男性の草食化の原因をたどり、不景気による未来不確実性によるもの大きいという結論に至った。ということは、韓国の景気低迷がささやかれる現在、このような現象は日本のみならず将来の韓国にも当てはまるものであろう。また、肉食系男子が韓国で人気がある理由は兵役が関係しているのではないか、という話が出た。韓国では、兵役を終えた男子こそが真の男性となると考えられているようだ。よって、兵役で培った肉体や国や家族を守る精神を持ち合わせた男性が女性から人気を集めるらしい。韓国特有の話題であるだけにとっても興味深く聞いたものだった。ドラマに出演するキャストの体型やキャラクターの性格は、視聴者の願望もだいぶ含まれてはいる一方で、きちんとその時代の社会背景や実態を映し出しているということがわかった。一視聴者として日本のドラマと韓国ドラマの両方を見ているとき、日韓のドラマのキャラクターやストーリー性の違いが気になることがある。今回、日韓ドラマを比較することで初めてその理由やコンテキストについて深く考えることができた。

実習日に原宿を訪れ、プリクラを撮ったときに韓国人の学生たちが現在使われている日本のプリクラの機種が数年後に韓国にもたらされていることを教えてくれた。日本がプリクラ先進国であることを実感した瞬間であった。また、ソウルでは花火大会が毎年1度しか開催されないと聞いた。日本では花火は夏の風物詩というイメージの下、津々浦々で花火大会が例年執り行われていることを思えば、少し不思議な感じがした。普段人に着付けをしたり、和菓子を作ったりする機会には恵まれていなかったので、いかに自分が日本文化に触れていない事実を否応なく突きつけられた気がした。

「歌は国境を越える」とよく聞く。ダンスも然り。この言葉を身を以て体験することができた。年齢も違い、国籍も違う。にもかかわらず、ひとつの目標に向かって努力するうちにコミュニケーションを自然にとることができた。プレゼンテーション準備の間にも曲が流れては勝手にからだ動きだす。日本人の間だけでなく、韓国人の間でも起こった現象である。うまくいかないもどかしさや、失敗と成功から起こる笑いもダンスを通して共有することができた。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

セミナー参加中に「日本人だから」「韓国人だから」といった理由で困難を感じる場面はなかった。習慣・言語行動がそれほど違うとも思わなかった。強いて挙げるのならば、日本と韓国では人付き合いにおいて、距離感のつめ方が違うという点であろうか。最も印象に残っているのはため口 (Banmal) である。日本人は「相手と仲良くなってきたなあ」と感じたら徐々に敬語からため口 (に近いもの) へと変えていくようになる。決してすぐに変えられるものではなく、ゆっくりとである。ナチュラルにため口で話すには幾ばくか時間を要する。しかし、韓国では目上の方が「ため口にしましょうか」と言ってきたらその瞬間からため口の関係になるらしい。あくまで個人の経験に基づく見解ではあるが、日本では「ため口でいいよ」といくら言われたとしても、ため口で話すことはためられてしまいがちである。

### 2.2 私の学び

例えば、韓国人の一人がメロンパンを買ったとする。そのメロンパンがとても美味しかったので、彼女はグループの面々に分けた。グループのメンバーたちは、そのメロンパンをちぎるのではなく、そのままかじった。パンをちぎらないことがマナー違反だとか、ここではそういった話をするつもりはない。仲の良い友達同士でしか口を付けて食べ物をシェアすることがないかと思っていたので、ずいぶんと距離感が近いものだと感じた。しかし、距離感をつめてくれることは1週間しかないセミナーをより親密に、楽しく過ごすことができるようにするためにはありがたかった。日本人にも距離感が近い人はいるので、このような体験が韓国人とだから起こったものだと決して断言できるものではない。

日本人と韓国人も同じ人間である。人間である以上、多種多様な性格が存在する。マイペースな人、自己中心的な人、一匹狼のような人、常に自分を抑えて直接的な物言いを避ける人。何人だからといってすべての人がそのステレオタイプなイメージに当てはまるような性格をしているわけではない。普遍的なものは大多数の人に当てはまるということではしかない。もともと韓国人に対する特定のイメージがなかったゆえに、自分の中でのイメージと実際に会った韓国人との間にギャップを感じることもなかった。いろいろな人がいるのが当たり前だからだ。国家間の関係は歴史認識等が複雑に絡んでいるために、そう簡単には溝を埋めることはできないかもしれない。しかし性格や趣味が合うのならば、または相手に適応できるのならば、個人的な付き合いは可能だ。このようなことを気付かせてくれる友人に出会うことができた点において、今セミナーはとても有意義なものだったと言える。

# 本でなく直接経験して感じた日本

金榮珠

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

報道のグループは「韓日報道の差」をテーマに4月から、遠隔交流とfacebook、kakaotalkを通じてお互いの意見を交わし、セミナーで直接会って意見を総合する時間を持った。韓国側は韓国を代表する放送KBS9時のニュースと韓国の代表新聞、朝鮮日報とハンギョレを、日本側は朝日・毎日・読売を5.13～5.31までの両国に対する報道の差（両国の代表放送の比較、橋下発言に対する繰り返しの程度と深層性の程度）を調査した。

両国の報道の代表的な違いは、言論報道の性格の違いにある。つまり、韓国は「言論機関」で、日本は「報道機関」なので、韓国マスコミは事実報道と論評が入るが、日本報道は論評がなく、事実報道に焦点を置くという違いを持っている。資料を調査しながら、最近の韓国は過去に比べて日本に対する報道態度は客観的で穏健な形に変わっていることを知ることができた。しかし、まだ視聴者たちに日本に対する認識を否定的にとられる報道をしたりもしていた。

韓国の代表放送KBSの5月13日のニュースを見ると「進撃の日本…右翼」という刺激的な発言をして日本視聴者の関心を集め、日本より比較的誇張された報道をしていることを知ることができた。また、慰安婦についての橋下の発言が、まるで日本全体を代表するように報道した。報道は媒体が伝達してあげる情報が即時的に解釈され、その事実そのまま受け入れられている特徴があるので、このような刺激的な報道は、視聴者にとって日本に対する否定的な認識をもたらすかも知れないと考えた。

### 1.2 私の学び

最近、国家を超えた交流が拡大、深化する中、韓日間でも社会文化交流が急増している。が、韓国と日本は他の国家間の関係とは異なり、歴史的に被害者と加害者の立場にあったため、両国の橋下の慰安婦発言に対する報道の違いを見せた。韓国言論は橋下の発言について「妄言」という単語をたくさん使用したが、これは被害者の立場にあった韓国言論にとってはできる報道だと思った。物足りない点としては、最近韓国言論は感情よりは事実に基づいた報道が増加しているが、まだ刺激的で誇張された報道が多く残されていると考えた。また、橋下の発言に焦点を合わせて反復的に報じたりもした。橋下の発言だけに焦点を合わせるのではなく、歴史的な問題、橋下の発言に対する日本市民たちの反応などさまざまな視点から報道が行われれば、視聴者たちが日本についてもっと客観的で自発的に見られると考えられる。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

今回のセミナーを通じて感じた日本は韓国より相対的に個人を重視していて、このような差が人々の関係においても影響を与える可能性があると考えた。日本人の友達と一緒に生活してきた宿所にはベッドにカーテンがあつて個人の空間を作れるようになっていた。この宿所で一緒に生活する間、日本人の友達は折々、カーテンを弾きながら個人の空間を作って休憩を取った。もちろん、共にセミナーの意見をかわしたり、遊ぶ時はカーテンを

あけて一緒だったが、友達とベッドで寝るなどほとんどの時間を一緒に遊ぶ韓国の文化とは差があって、不思議で驚いた。また、セミナー生活と東京の自由旅行をしながら、日本人たちは食事をする時、自分が食べる量だけ取って食べたり食堂でも一人で食べる人をよく見ることができ、「やはり韓国よりは個人的な時間を持つことに慣れていて」と思った。こうした日本の個人を重視する文化は人の間の関係にも影響を及ぼすと思った。今回のセミナーで新しく知った事実は日本人たちは友達とスキンシップをしないということだった。これに対して普通の韓国人たちは家族、友達、恋人などとスキンシップを取るのが自然な方だ。日本人たちはスキンシップをする時、相手の気持ちを考慮するために韓国よりはスキンシップが少ないのではないかと思った。個人を重視して、相手に対する配慮に慣れた日本人と韓国人の人に対する態度は差があるため、韓日の対人関係にも差があると思う。

## 2.2 私の学び

セミナーを通じて日本は韓国より個人を重視して、対人関係において差を見せたと思った。しかし、文化においてどんな文化が良いか悪いかを区分することは意味がないと思う。セミナーの準備過程を思い返せば facebook でも会って意見をかわす時にも最大限に相手の気持ちを悪くしないように言葉を本当にきれいにするように考えた。さらに発表が終わった後の質問をする時、その発表のどんな点がいいのか言った後に質問する日本人の友達が本当に印象的だった。そして私も韓国に帰ったら友達、家族などの人に対することがあったら、相手の気持ちを察して気配りする人になりたいと思うようになった。また、お互いの文化から学ぶ点があれば習ってもっと良い方向に進むことがいいと思った。

# 協調性と責任感

徐多寅

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

### 1.2 私の学び

今回日本の学生たちと一緒にグループ活動をして一番初めに学んだことは責任感だった。日本の友達は韓国の友達よりも責任感が強かったようだった。グループ活動は他の人と一緒に一つの作業をするので、協調性が重要であると考えた。しかし、日本の友達はそれよりも自分が引き受けたことを完璧にしようとする責任感が強く感じられた。日本の友達を見て、一緒に頑張るのも協調性だが、それぞれ分担した部分を責任感を持って完璧にして他のチーム員に迷惑にならないようにするのも協調性の一つだと思うようになった。

私たちのチームが担当したテーマは“報道”であった。橋下の発言という一つの事件について韓国と日本の報道の違いを調べて公営放送局であるKBSとNHKの違いや共通点を調べて比較した。グループの中でまた二つのチームに分かれ、橋下の発言について日韓報道を比較したチームと公営放送局を比較するチームに分かれた。PPTの作業もそれぞれ調査したチームが作成して貼り付けるようにした。最後にはPPTを合わせて発表の準備をしたが、その時に発表の分量が多いメンバーが少ないメンバーに発表の量をあげたりした。また実習地として靖国神社を訪問したが、それについて感じた点と訪問前に知っていた部分との違いも比較して発表をしました。

日本の友達は小さな決定をする際にもいつもチームメンバーと相談して決定した。多くの対話を通じて決定するのが基本だった。PPTを作成する前に会議を通じてメンバーの意見や感じたことを集めて全体的に発表の方向性を決定した。韓国ではリーダーを決めてリーダーは主体的にリードして、メンバーは同意するというグループ活動が多いのに対し、日本の友達はチームメンバーの意見を集めて決定する方式であった。そのために進行速度はやや遅かったが、皆が満足する結果をもたらすことが出来たので、日本の友達から私が知っていた協調性とちょっと違う協調性を学ぶことが出来た。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

### 2.2 私の学び

今回の交流を通じて感じたことは、思ったより韓国人と日本人の行動に大きな差がないということだった。思ったより日本人の異なる文化は大きく目立たず、例えば、食堂に行ったら他のメンバーの食べ物が出てくるまで食べず待っていて皆の料理が全部出てきたら、その時に一緒に食べ始めるなど、韓国よりも他人と一緒に行動する感じを受けた。しかし、また違うことは私のものと他人のものを区別することであった。そのような面で韓国と日本の普段の習慣に違いがあることを発見した。

例えば、私は普段食べ物を少なく食べる方なので、1人分を頼んでも常に残るため、お腹があまりすいていない友達と一緒に1人分の食べ物を注文して分けて食べる習慣があった。あと、子供の頃から他人と一緒にするのを嫌がっていなかったため、私は使っているスプーンや箸で友達に食べ物を食べさせたり、親友のものを一緒に使うように他人と私を区別しない生活に慣れていた。しかし、日本の友達は私と正反対の習慣を持っていた。食堂で

は当然一人分の食べ物を頼み、もし物を借りる時があれば頼んだり注意しながら聞いて借りたりした。このような些細な生活習慣の違いを感じたが、全体的に別々な行動は感じられなかった。

最初は平気に一緒に食べたり物を使ったりする私たちを見てどんな考えをするか、またはどのように受け入れて上げるかと心配した。しかしすぐ日本の友達が大丈夫だ、と、あまり気にしなくてもいい、と言ってくれて安心した。もし親友と食べ物を分けて食べる時は了解を求めたり小さな皿に減らして食べたりして日本の友達が気にしないようにした。日本の友達も私たちが気にしないように自分たちも食べてもいいと言ってくれてありがたかった。また、物を借りたり食べ物を一口食べてみる時、慎重に了解を求めることを見て私のことを守るためではなく、他人のことを守ってくれるためのものであることが分かった。大きく感じられる差はなかったが、些細な差を合わせながら日本の友達ともっと深い友情を作ることができ、有益な交流になったと思う。

# 意味のあるセミナーを終えてから

白京沃

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

### 1.2 私の学び

今回のセミナー活動の中で発表を準備する過程が私にとって一番大きな教えになりました。

発表前日未明までお茶の水女子大学の学生たちと一緒に発表する内容を考えて、PPTを作りました。夜遅くまで、寮で事前に調査してきた資料を踏まえてPPTの発表準備をしました。発表準備をしながら、日本人の友達にたくさんのことを学ぶことができました。その一つは責任感です。韓国で数人がチームになって、発表準備をするときには、PPTを作る人、台本を書く人、発表する人と役割を分けることが一般的です。しかし、お茶の水女子大学の学生たちは自分が発表する部分のPPTを自分が作って自分が発表しました。このように自分が作ったPPTを発表したら内容について正確な理解を通じて発表することができます。こんな風に自分の受け持った部分をしっかり準備して発表するお茶の水女子大学の学生たちを見ながら責任感を学びました。

責任感だけでなく、協同心も学ぶことができました。お茶の水女子大学の学生たちと同徳女子大学の学生たちが自分の担当した部分を準備しながらの中で、絶えずお互いの意見を聞いて些細なことさえ全部一緒に話を交わしながら発表準備をしました。また、お茶の水女子大学の学生たちは韓国人留学生らが台本の練習をするときに分からない単語とか見分けがつかないイントネーションがあれば親切に教えていました。韓国人の学生たちも韓国で調査してきた資料を日本人の友達に親切に教えていました。このように互いに足りない部分を聞きながら協同心を育てることができました。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

### 2.2 私の学び

日本人の友達と会話しながら、韓国と日本文化の差を感じることができました。韓国では友達と話をする時、お互いの目を見ながら話をします。それは互いの話を聞いているという表示です。しかし、日本人の友達は目を合わせないで話をしました。最初は日本人の友達たちと目が合わなくて、私の話をあまり聞いてくれないのかと考えました。そのため、あとで目を合わさず日本人の友達が会話をする時、なぜ目を合わせないのだと聞きました。日本人の友達は、恥ずかしいので、日本人たちは会話をする時お互いの目を合わせないと答えてくれました。日本人の友達は会話をする時、相手が目を正面から見たら恥ずかしいかと思っていますと言いました。それでその後から、わたしも日本人友達と会話をする時はなるべく目を正面から見つめず会話をしようとして努力しました。相手の目を見ないで話をしたら相手によく聞いているという信号を送るために私も知らずに相槌を打ち始めました。相槌を打ちながらその間気になってきた疑問が解けました。日本のドラマや映画を見るとき、俳優たちが相手の言葉が終わる前に「はい」とか「そうです」を言うのを見てなぜあんなに相手の言葉になんども答えているのか、相手の言葉を途中で止めるのではないかと感じていました。しかし、日本人の友達と会話をしながら、相槌は相手の言葉を遮る不要な言



葉なのではなく相手の言葉を聞いているという信号だったことを理解するようになりました。

このような経験を通じて、他の文化を理解するにおいて最も重要なのは、易地思之（立場の態度）だということがわかりました。はじめは日本人がずっと相槌をしてくれるのを見ておかしいと思ったが、直接日本人と話して、日本人の立場になってみたら彼らの行動が理解できるようになりました

これからは日本語科の学生として、日本の文化を眺めるときには私の立場ではなく、相手の立場で眺めなければと思いました。

# 思いやりの精神

任孝静

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私たち報道グループは、遠隔交流を通じて日本の報道と韓国の報道の差について扱うことにしました。私たちは「橋下発言」というテーマを中心に両国の報道の差について新聞、テレビ番組をもとに資料を集めました。そして、facebook とカカオトークを通じてお互いの資料調査の状況と内容を共有し、徐々にセミナーの形を整えることができました。

私達は、韓日間でも最近では社会文化の交流が急増しているのに韓国と日本のように加害者と被害者であった国は、接触の頻度の高さにも関わらずなお誤解が深くなり、偏見が固定化されているのではないかと思って、これに対し韓日の報道の特徴と違いを比較してどのような影響を与えているのか調査しようと思いました。

### 1.2 私の学び

日本の友達に会う前に私達は十分な資料調査ができませんでした。本格的にセミナーが始まってからずっとそれが心配でした。日本の友達もきっと心配になるはずなのに、心配している私達に大丈夫だと言ってくれて安心させてくれました。日本の友達の思いやりのおかげで楽な気持ちで発表を準備することができました。

セミナーの間、みんな大変で具合が悪いときもあると思いますし、それに引率する立場である日本の友達はきっと私達より大変だったはずなのに、少しも表に出さないで親切にしてくれて本当に驚きました。彼女達の大人さを習いたいと思いました。

また、発表の準備をする時、ただ調査するだけじゃなくてみんなの意見をきいてブレインストーミングのように話し合うところがいいと思いました。

韓国ではあまりそういう経験ができなかったので今回のセミナーでは、これが本物のグループ課題なのだと思います。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

私は昔から本音と建前、迷惑など、日本人の性格に対する色んな先入観がありました。彼らは私達より心を隠すのが得意で、個人主義的だと思っていました。しかし直接会ってみると、みんな親しみやすくよく笑ってくれる友達でした。でもやっぱり自分の感情を表に絶対に出さないところが違うとおもいました。たとえば、私達は宿所でマピアという韓国のゲームをしました。そのゲームは、ゲームに参加している参加者が市民とマピアになり、お互いを疑ってマピアを探すものです。そのゲームを日本の友達と一緒にしましたが、なぜか日本の友達はずっと困っているようで、韓国の友達は変に思いました。なぜ誰も疑わないのだろうと思っていらいらして、猫をかぶっているのかなと思いました。よく考えてみたら、日本人にとってなんの理由もなく相手を疑って、その意見を表に出すのはちょっと苦手なことだったのです。私が当たり前だと思っていたことが彼女達には難しいことだったのです。それに気づいた瞬間、少し恥ずかしくなりました。本や授業で習ったくらいで彼らを全部知っていると思っていたのです。私はもっと大事なことを忘れていました。それは文化相対主義のことでした。

## 2.2 私の学び

マピアゲームの時に感じたのは違う国で、違う環境で、違う言葉を使う私達は当然、文化も違うってことでした。最初は彼女達を理解できなかったけど、一緒に生活してみると、これが彼女達の文化なのだと思います。彼女達もきっと私達の行動が理解できなかったかもしれません。でも彼女達は私達を韓国の社会の立場で理解しようと努力していました。そのような彼女達の注意深さとか、思いやりを見習おうと思いました。彼女たちの言葉と行動は彼女達の文化の一部で、文化の独特な環境と歴史的・社会的状況で理解すべきだと思います。つまり、人類が住んでいる社会は社会ごとに特殊な文化を持っており、様々な文化を正しく理解するためには、その社会の立場で理解しようとする態度が必要だという相対主義を習うことができました。今回のお茶の水女子大学の日本の友達との思い出は大事な経験で、私に色々なことを教えてくれました。これからも外国に行ったり、外国人にあったら文化相対主義の心持ちでいい友達を作りたいです。そしていつか、友達になったお茶の水女子大学のみなさんともっと仲良くなって、思いやりのマピアゲームを試みたいですね。

naver 知識百科

<http://terms.naver.com/entry.nhn?docId=1202256&cid=200000000&categoryId=20000337>  
9 (2013年8月30日)

# セミナーで学んだこと

徐賢珠

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

### 1.2 私の学び

事前に行われた韓日合同発表におけるグループ活動は、最初は順調に行かなかったです。皆のスケジュールを合わせたりすることがなかなか難しかったし、「報道」という範囲の広いテーマだったので、どの部分をどうみたら良いのか判断できないところも少しありました。しかし、日本現地でお茶大の学生さんたちに会ってからは、皆意欲的になりました。ディスカッションなどを通し、韓国の皆も自分の主張したいことをちゃんと日本語で伝えられていました。これは、「交流」という部分において大きな意味を持つと思いました。お茶大の学生さんたちの熱意をみて同徳の皆も勇気付けられ、頑張ることができたと思います。私たちはこの先ずっとこの経験を生かし、日本語の学習を頑張るでしょう。

私はこの報道のグループ活動をしながら、韓国と日本のそれぞれの新聞の特徴や傾向など言論報道のコミュニケーションのギャップを考察することができました。また、マスメディアの影響力がどれだけ大きいのが分かりました。私は「マスメディアの影響力」が印象的だったのでこれをテーマとして取り上げたいと思います。私たち報道班は、報道において一つの手段である新聞の主な例として「橋下の慰安部に関する発言」についてインターネットや新聞を通して資料を集めたりしました。また「靖国神社」に対するお茶側と同徳側のそれぞれのイメージをお互いに話し合いました。

前で述べたように私たちの班は靖国神社についてのイメージについて話し合ったのですが、靖国神社に対する両側のイメージが大分違ったので驚きました。韓国側は否定的で、悪いイメージがほとんどでしたが、日本側はネガティブなイメージは特になく、日本にある数多くのお寺の一つ、ただのお寺といったぐらいでした。韓国側の皆が靖国神社に対して悪い印象ばかりもっているのはきっとマスメディアと関係があるのだと思います。問題として取り上げられる部分は、靖国神社は悪いというイメージをもつことなどではなく、悪いイメージをもったきっかけなど、悪いなら悪い理由がちゃんとあるはずなのに、悪い理由を説明できない部分がいけないのだろうと思います。また、何かに対して批評する記事などを読むとき、そのまま受け入れて誤解することのないように、それは妥当な内容で、説得力のあることを述べているかを重視すべきだと思いました。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

### 2.2 私の学び

数年、日本で滞在していたこともあり、私の頭の中ではいつも「日本人＝親切」という方式が成立されています。しかし、これからは「リアクション」をプラスアルファしたいと思いました。報道班の皆だけでなく、お茶大の皆がすごくリアクションが良いと感じました。例えば、日本の皆にちょっとした韓国と日本の違いを教えてあげると日本の皆は教える側を元気付けるほどすごく良いリアクションをしてくれて一緒に話していると楽しくなります。個人差はあると思いますが、全体的にそうだと思います。

私は時々時間にルーズなのですが、このセミナーで特にそうだったと思います。日本に

は「5分前行動」という言葉があるように、お茶の皆も時間に対してきっちりなひとでした。個人的な意見ですが、「5分」という時間に対して普通のときはそれほど危機感を感じることはあまりありません。受験の日など緊張感が溢れそうなとき、要するに迫られたときに危機感を感じるものなのではないかと思います。しかし、このセミナーを通じて、改めて「5分前行動」の大切さを知りました。集団活動、つまり組織的に行動するときは、短いけれど決して短くない「5分」をどう使うかで状況が変わることも十分にあり得ることが分かりました。

他にもこういうことがありました。班別行動のとき、次の予定が知りたくてお茶大の友達に「このあとは、何するんだっけ。」と聞くと、「スケジュール表あるよ。見る？」「うんうん。見せてくれる？」「韓国の皆はスケジュール表持ってないの？」「うん。持ってないよ。」「えー、じゃあ今までどうしてたの？」「えっと…ふつうにしました。」「うそー！あり得ない！」とお茶の友達をびっくりさせたことがありました。私たちとしてはそれほどびっくりすることのないことでしたが、その友達は結構びっくりした様子でした。多分その友達は私たちがスケジュール表を持っていないことにびっくりしたと言うより次の予定がどうなのか知らないまま行動していたことにびっくりしたのだらうと思います。小さいことながらこれも一つの文化の違いではないかと思います。

私はこのセミナーを通じて日本人の言語行動は、多様性を持っていると感じました。慎むときは慎み、はっきりするときにははっきりします。こういった部分を見習いたいと思いました。日々直すべきところを意識し、行動する練習の必要性を感じます。

韓国と日本、相互理解を深めるためには、お互いの文化を知ることが大事だと思います。またその文化をちゃんと知るためにはやはり直接接触するのが一番でしょう。機会があれば、また日本へ行って色々と学びたいです。

# 10 日間の熱いハーモニー

鄭至恩

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私たち共生グループは、日韓の共生が行われるため、大学生である私たちが何をすべきかどうかを調べるために多くの活動を実施した。活動に先立ってテーマを決定するために Facebook を介して会議を進行した。韓国と日本は地理的に近く、経済的依存度も高いため、共生の必要性があるが、お互いに対する反感が強く共生が難しいという点から出発した。すなわち、共生の必要性は認識しているが、歴史的な理由などでは認識されていないことに注目した。大学生である私たちから共生の取り組みが開始されると考えてテーマを決定するに至った。

まず、両国の青少年を対象にアンケート調査を実施し、相手国に対する認識を調査した。また、韓国側では在韓日本大使館所属日韓文化院に訪問した。文化を伝播することのイメージを改善するのに大きな影響を及ぼすと判断したが、日本政府次元でどのような努力をしているか調べるためだった。

日本では、韓国、日本側と一緒に在日韓国人団体の代表に会ってインタビューする機会があった。在日韓国人は日本が韓国にどのようなイメージを持っているか知ることができると判断したからである。

### 1.2 私の学び

日韓文化院副院長とのインタビューで、日韓の経済交流の状況を客観的に見ることができた。両国の輸出入に大きな比重を占めており、相手国を訪問する両国民のことも評価された。日韓関係が経済的にはすでに離せないほどの結束を持っているということに改めて気づいた。両国民の敵対的な感情とは別に、経済的にはすでに深い共生が行われていた。

また、韓国の学生が日本をどのように考えるかについて実施したアンケート調査で、日本の友達がいるほど、日本に対する認識が良くなっていることを発見することができた。そして、韓国人は日本に対する認識が全般的に良くない一方、日本人は韓国人より、より積極的に韓国を認識していることもわかった。

また、ニュースでしか見たことのない在日韓国人に際会遇到、在日韓国人が成長して経験する差別と苦勞を知った。自分が選択したことには問題がないにもかかわらず、政治的な問題の犠牲になって成長期にアイデンティティの混乱を経験したという点で残念だった。在韓日本人のインタビューは実施しなかったが、在日韓国人と大差ないだろうと思う。私も努力して「韓国人」「日本人」の偏見を取り除こうとするきっかけとなった。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

韓国にもお風呂文化があるが、日本とは違うということを感じた。私たちが泊まったユースホステルにもバスタブがあることが不思議だった。韓国ならたぶんシャワー施設しかなかったと思う。日本の友達がよく言っていた言葉の一つが「お風呂に入りたい」だった。韓国だったら「シャワーしたい」としたのだ。最初は「お風呂」というのが実際に浴槽に入りたいのかまたは、ただシャワーをしたいという意味なのか判断が難しかった。なぜな

ら、韓国では風呂に入ったり、風呂に行くのが毎日の日常的な習慣ではないからである。

また、日本の友達は韓国人である私たちよりも団体行動に長けていたようだった。ご飯を食べ終わった後、食器を整理するとかテーブルを拭くといったことは、韓国で私が育つ中で経験した団体行動とは異なるものだった。それだけではなく、一連の予定の時間を少しでも超えた場合、非常に困っており、なんとかそれを守ろうとするところが私たちとは少し違った。韓国でもだいたい約束の時間を守るが、少し遅れていることは理解している場合が多いからである。

また、夜の文化にも違いがあると感じた。私をはじめ韓国人の友人は、夜にホテルの外でお酒を飲んだり、アイスクリームを買って食べるなどと、何か夜に感じる自由さを感じたいと思っていた。しかし、日本の友達はそのような経験が少ないようだった。私の国では、夜になっても街が明るい方で遅くまでやっているレストランが多いのに、日本はそれに比べては少ないようだった。

## 2.2 私の学び

まず、韓国ではあまり浴槽に入らずシャワーのみであったため、トイレに懐疑的だった。しかし、韓国よりひどい湿度の中で生活してみると浴槽から吹き出す熱気がいっぱいのお風呂場で洗うことが初めて理解がされた。全身の疲労が解けるほど気持ちよかった。日韓の入浴文化の違いが湿度の違いに由来するものと考えたとおもしろかった。日本文化の授業でも学んだが、自然環境が人間の生活の様子を変えるのに多くの影響を及ぼすということを改めて実感するきっかけとなった。

また、私の国に比べて厳密に約束を守り、自然に後片付けをして日本の友達に被害を与えないために、日本の友達と同じようにしようと努力した。相手のマナーの問題であるため、日本だけでなく韓国に帰っても厳密に守らなければならないと考えるようになった。

また、韓国のよりはお店を早く閉めるなどという、日本の環境に適応した私たちは、夜遅く外に出て買って食べるのはあきらめた。代わりにコンビニのように夜遅くまで営業しているお店で食べ物を社宿泊施設の中で食べることを計画しなおした。その際には韓国人同士ではなく、日本の友達も一緒だった。夜遅くまでおしゃべりをし、おいしくおやつを食べた。韓国の夜の文化を日本で成功的に適用したと思う。

## セミナー

南潤暎

2年生になって1年生の時には参加しなかった韓日交流セミナーに申請して出席するようになった。私は「共生」をテーマにしたグループに入った。歴史、教育、報道とは異なり、「共生」というあまり考えたことがなかった不慣れなテーマに、当初はテーマを誤って選択して入ってしまったのかという気もした。いつも韓日関係は良くないと思って来たり、あまり考えてみないテーマだったからだ。難しいと思った。しかし、セミナーの準備をしながら考えが少しずつ変わった。私のグループは韓国では各局の認識についてアンケート調査をして、日本に行ってから、在日韓国人に会って話を聞いてみることにした。アンケート調査は残念なことに否定的だった。やはり歴史問題に感情が悪かった。在日韓国人もまた、幼い頃から暴力やいじめなどを喫して韓国人からも日本人からも認められないまま生きる人たちが多かった。こんなに否定的な結果を見ると、共生は難しいものだと思った。しかし、日本に行って日本の学生たちと過ごす間、私は何の悪感情とか何かぎすぎすとした感じがまったくしなかった。学生は皆、とても優しく、親切で、最初はぎこちなかったけれど、後には宿所で夜におしゃべりするのが一番楽しいと感じられるほどのいい子たちだと思われた。私が韓国で聞いて接した日本人に関する事実の中に一致するものはほとんどなかった。ただ違う言葉を使う学生たちであるというだけだった。そうだとしたら、韓日国民が共生をできない理由は、このような交流をあまりせず、見ていないということではないだろうか。今回のセミナーで「共生」組に入って、本当の共生を直接体験した。それから、やはり社会認識が本当に多くの影響を与えたということを学んだ。私も日本語科にまだ入っていなかった時は日本人と韓国人は本当に合わないものだと思ったからである。

日本の学生にも感銘を受けた。私たちとたくさん遊んでいても、セミナーを準備する時は、誰よりも集中し、在日韓国人に会った時は積極的に質問もして思いを語った。また、多くの日本の学生たちは社会を見て、代表で言うことに対して、人の前に立つことに抵抗がなかった。発表や視線を受ければ、あわてて言葉もでてこない私には非常に新鮮な光景だった。また、1年生の時から大きな会社にインターンをして留学まで準備する学生を見て、一年生の時に遊び、単位もあまり良くなかった私は反省をした。自分の道をよく考えて実践しながら充実した生活を送る日本学生たちを見て私ももうそろそろ未来を考えながら生きていこうと思った。いろいろと多くのことを学んだセミナーだった。

日本に来るとき、日本人と考え方や行動があまりに違ったらどうしようと思っていた。しかし、たったの一週間という期間のせいとか、同じような文化であったのかかわからないが、それほど大きな差を感じなかった。

それでも韓国との違いを挙げるならば、日本人たちは性別に対する役割、アイデンティティのようなものが韓国よりももっと強いようだった。言語において、女性と男性の言語に違いがあるのは両国同じであるが、日本人は韓国人よりもっと女らしかった。性格が大体落ち着いている人は、服装もアクセサリやレースなど、女性性が際立つ服が多かった。また、何かを提案するというよりは、他の人たちが決定するのを待ったりするときもあったが、他の人を配慮する思慮深い行動だと考えられるものがあったりして、イライラすることもあった。もちろん、日本人の中でもおてんばのような性格や男っぽい性格の人もあるし、韓国人の中にも女性らしい性格の人がいるかもしれないが、ほとんどの場合が、



韓国人より日本人が、さらに女性らしかった。

他の人を考えながら行動して物事を言う性格も女性的な特性であり、日本人たちは特に繊細だ。このような点に初めはイライラした。しかし、相手がとても親切で、準備の際に「大丈夫？」と確認しながら心配してくる。だから日本の学生達も私たちがぎこちなくて、考えに壁があるという印象を与えたりもした。変に負担であって親しくなることができるだろうかという心配もたくさんした。しかし仲良くなればという考えで私の本来の性格どおりに接したから、それがそのままその子たちの性格ということを知り、親密になった。このように心配していたが、いつも楽しく日本人たちと過ごす私を見て心配したことなど忘れて、いろんなことを学ぶことが出来た。まず、韓国では何人かの本当にやさしい子たちを除いて荒々しい性格があるが、日本人は異なるということ学んだ。私も知らずに日本人を韓国人の基準で考えて判断した。二つ目には私は人と近くなるには自分を飾らないで、ありのままに見せなければならぬということを改めて学んだ。私が相手を楽にさせてこそ、相手も私を楽に思ってくれる。先に心を開かなければならぬのだ。今考えて見れば、最初は私が先に壁を作っていたようだ。社交性がないため、心配したが今回の機会を通じて友達を作ることについても学んだ。最後に日本人の配慮を学んだ。セミナー期間に一度冗談を言ってみたが、日本人たちの考えにはそれがちょっと友達に言うにはひどいことと思ったようで、びっくりしたことがあった。その時は私が日本の学生たちの反応にびっくりしたが、後で考えてみたら自分が冗談で言った言葉でも相手には冗談ではなく、心の傷になってしまうこともあるということ学んだ。

日本の学生たちと一緒に過ごした一週間は日韓文化の違いについて多くのことを把握するにはちょっと短かった。しかし私が一週間日本で学んだように、日本の子たちも韓国の学生たちから良いものを学んでいたらしいと思う。

## 近さで感じる、嬉しさ

趙桂賢

今回、事前会議を含めた日本での合宿を通して積極的な態度についてよく見るようになりました。日本人はグループ活動をする際に与えられたことをすることだけに留まっているだけで、積極的に参加をしないという話を聞きました。しかし、今回の合宿をしながら日本の友達の積極的な姿を学びました。すべての活動に積極的に取り組んで文句を言ったこともありませんでした。初めて代々木公園で合宿する際に日程がきついと感じました。現場学習も行って、お茶の水女子大学で文化体験もしてあちこちを歩き回っていて体がとても疲れました。暑い天気にはつき疲れ、宿舎でゆっくり休みたいということだけ考えていました。しかし、日本の友達は地下鉄に慣れていない私たちを最初からうまく誘導しながらいつも笑顔で話してくれました。もし日本の友達が韓国に来て様々な活動をしている状況だったら私もそうかと考えてみました。多分私なら友達にそんなに笑顔で親切に案内してあげられなかったと思います。また、草津合宿所でレクリエーションを準備する時も日本の友たちと楽しく準備をしました。初め韓国で準備をするときには何をするか途方にくれ、恥ずかしさもあってやりたくありませんでした。レクリエーションに費やす時間があまり残っていない状況で急いで用意したダンスだったが、友達が笑いながらよく教えてくれて楽しく準備できました。また違ったグループの友達も一緒に出ようという言葉に積極的にかけてくれてありがとうございました。

一度くらいは「やりたくない」と愚痴をこぼすこともあり得ると考えましたが、すべての活動が大変だったにもかかわらず、真剣で積極的な態度で臨む学生たちを見ながらたくさん学んだと思います。したくないこともしなければならぬことが多いですが、グループで活動する様子を見ていたら文句を言ってやるよりは積極的に参加した方がもっと楽しい思い出を作ることができると思います。日本の友達も私のように不満が多くて腹を立てながら活動していたら私の記憶の中に日本人の友達は今のようによく印象が残っていません。公式的な活動はもちろん、宿舎の中でも夜遅くまで話を交わすことにも疲れたのに私たちの言葉に耳を傾けてくれて笑ってくれて本当にありがとうございました。積極的な態度が気持ちいい印象も作ることができるということを感じさせてくれました。

実際、韓日の間で違いを大きく感じることは無かったです。言語がうまく通じなくて多くを話せなかったせいか、日本人たちがどのような価値観を持っているのか授業時間に聞いたことがあるからか生活する時には気づきませんでした。しかし、韓国に帰って来て考えてみたら大きくないが、少しずつ韓国と違いがあったのを感じるようになりました。まず、合宿所でご飯を食べる時、最も大きく感じたようです。韓国では食べたいだけ食べ物を盛っても食べたくなかったら食べ物を残すことがとてもよくあります。ところが日本の友達は毎回、一度も残さず全部食べました。代々木公園でも、草津でもまずいという不満を一度も口にしないで全部きれいに食べました。個人差があるとは思いますが、韓国ではほとんど口に合わなければ残すことが一般的なので不思議でした。食べ物を適当に持ってきて、全部食べるのが習慣となっているようでした。韓国でも食べ物を残さず食べなさいと使いますが、実践する人は多くありません。食べたくない食べ物を無理に食べたほうが良いとは思ってはいませんが、食べる食べ物だけ適当に持ってきて、あまり残さない方がよく見えました。

もう一つの驚くべきことは他人の物にやらないことでした。日本人たちは他の人が失ってしまった物を拾って行く場合はほとんどなく、その場にそのまま置いて持ち主がみつげられるようにするという事実を聞いたことがあります。話だけ聞いただけでなく、温泉に行った時、実際に見ることができました。温泉に入る前に貴重品を入れておく 100 円のロッカーがありました。すべてのロッカーに貴重品を入れておいた後、温泉をしばらく楽しみました。帰ってみたらだれかが 100 円を置いていってしまったようでした。韓国でならば 100 円拾ったと持ち帰って好きに使うのに日本人の友達に 100 円持っていかなかった人いないかと持ち主を探してあげようとしていました。そして持ち主が現れないので 100 円をそのままその場に置いてきました。もし私が先にお金がロッカーに置かれているのを見たらお金を持って行ったでしょう。けれども、日本の友達たちが持ち主を探そうとする行動を見たら、お金を持って行きたいと思ったという事実が恥ずかしかったです。韓国では落とし物を取戻そうと思って行っても、むしろ警察に申告されることもあります。日本ではそんなことがなさそうだと考えました。こうした日本の市民意識が羨ましいと思いました。私たちも幼かったとき、基本的に学ぶはずのことなのに基本を守っていないということをとくさん感じました。このごろ日本の文化を毛嫌いする人が多いなか、このような文化を見ながら学んで、日本に対する好意的な感情を持ったからだと思います。

日本語科に行く前までは日本について関心もなかったが、進学してからこのような機会に日本の友達と会うことができるようになってもっとも良かった時間でした。百聞は一見に如かずという言葉のように実際に生活して日本について習ったことが多いと思います。共生というテーマで発表を準備しながら韓国と日本がどのように共生することができるだろうと悩んできたが、7 日間の韓日の学生たちが争いなしに話交わす姿を見ながら直接顔を合わせて会うのが一番早くて確実な方法だと思いました。一緒に生活して私たちと大きく異なるのは、言語であるだけだということを感じました。両国が互いの姿を理解して尊重してくれるなら私たちが今回のセミナーで楽しかったようにすぐ親しくなることができるのではないかと思います。それで今回のセミナーがさらに有意義であり、今後もさらに活発になったらと思います。そして短期的な出会いがなく、続けていくことができる出会いに発展することを望みます。

# 공생, 삶을 이롭게 하다

## (共生, 生をこのように生きる)

白守丁

### 1. グループ活動報告と学び

#### 1.1 活動内容

韓国で事前調査のために日本文化院を訪問しました。民間交流の現状と日本文化院の活動内容を中心に調べるために訪問しました。韓国にいる日本公報文化院は日本外交部から公式に運営している機関です。したがって毎年さまざまな行事を開催し、主要行事には韓日文化交流フェスティバル、アニソングランプリなどがありました。関係者とのインタビューを通じて韓国と日本の文化交流はますます増える傾向で、年々イベントに参加する人数も増えており、韓国・日本間のお互いの関心が高まっていることを知ることができました。しかしまだ過去にあった歴史問題、政治問題はこれから一緒に解決していく問題で指摘されました。

日本では新大久保を訪問し、在日韓国人とのインタビューを進めました。「～だった」と考えるのは、「何らかの理由になるのか？」という疑問から始まったインタビューは、在日韓国人が持つ多くの問題を感じることができたとし、韓国人ながら日本人という生き方をその方を通じて多くの考えを持つようになりました。

#### 1.2 私の学び

事前調査を通じて最も大きく感じたことを一言で要約すると「当然のことがなかった」という点でした。韓国と日本は地理的にかなり近い、外交的、政治的にも多くの交流が続いています。しかし、「実際に日本人と韓国人は近い仲なのか？」という質問に当然「近い」と言ってきたが、そうでない点を多く発見することができました。韓国と日本は近いために対峙することもあります。外交、政治、歴史的な問題ではお互いに鋭い視線で眺めてきた場面も多いです。自分の国を代表する立場から、韓国人が日本人を見るときの考えは頂けません。特に韓国人と日本人がお互いを眺めるとき国家の立場を代表して眺める場合をよく見ていましたし、私もそうでした。しかし、今回の在日韓国人とのインタビューを通じて、「果たして私がどうやって韓国人になったのか」という問いを自らに投げることで、国家と個人についてももう一度考えるきっかけになりました。韓国人、日本人を越えて、国家をなくせば、私たちは同じ「人」という点です。そして私たちはその間で苦しんでいる在日韓国人を会いました。私たちはお互いを眺めるときどう見なければならぬのか、という質問には国家が介入がしてはなりません。視野をもっと広げて、私たちは他の環境、他の条件を持っている人たちとのコミュニケーションを通じて生きている時、私たちの生活はもっと豊かになって楽しくなりそうです。事前調査を通じてもっと広い視覚で韓国と日本の共生について眺めることができるようになったようです。

### 2. 日韓の文化の違いと学び

#### 2.1 日韓の文化の違い

初めて日本人の友達と会った時、明るく笑いながら荷物を持って案内してくれた姿が思い出されます。日本に滞在する間日本人の友達は笑いを失わず、いつも親切なお姿でいてく

れました。大変でタイトな日程にも全く疲れた気配がみえなかったし、団体生活における基本的な礼節を必ず守ろうとしている姿には感嘆が出るほどでした。また、自身の意見を先に話すよりは相手の意見を先に聞いて対応してくれました。

## 2.2 私の学び

いつも礼儀を守ろうとして親切にしてくれている日本の友達を見ながら「大変じゃないかな？」という気が先にしました。韓国は友達との関係において親くなれば親くなる程さらに楽に接する傾向があります。基本的に相手が私をよく分かっているので理解したい心から出ることだからです。しかし、日本の友達は親しくなるほどもっと礼儀を守って、害を与えないという話を聞きました。これは、相手が私を親しい友達だと思っていてくれるからむしろもっと楽にしないという心だということです。セミナー期間中、日本の友達と同じようにしよう努力しました。大変な点が多かったです。しかし、彼らの共同体文化を徐々に感じて私の友達の行動を理解することができました。

# 韓国人と日本人を越えて世界の人々に

金報恩

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私は、この日韓セミナーで「共生」チームに属して活動しました。私たちは、韓国人と日本人の共生のために、まずどのようなものが共生を妨げるのかを考えてみました。歴史的な問題と、お互いにしっかりと知らずに持っている偏見のためだと思うし、さらに対人の交流で結ばれた関係ではなく、国と国の関係でアクセスしたマスメディアの記事、放送などに触れ、それらを自分の考えを経ているまま受け入れたからだ結論づけた。だから、国と国の間の関係に個人が埋没されて日本への偏見を形成するのではなく、直接日本人と韓国人が会って、民間交流を通じて偏見を克服し、お互いが変わらないものを感じることが共生のために必要なことだと思います。そこで、まず、韓国と日本の人々は相手国にどのような認識を持っているかを正確に調べるために調査をしました。これは論文を参照して調査したが論文で指摘したように韓国は日本に対して否定的に考えている側面が強いのに対し、日本は韓国に対して否定的に考えている面がうかがえました。これらのことは、韓国は日本との歴史的な事件について壬辰倭乱、日韓併合のような、比較的長い時間前にあったことを述べたが、日本は日韓ワールドカップのような比較的近年にあったものを参照することを通じて、異なる各国のイメージを持っているからとわかりました。しかし、韓国の回答者のほとんどは、日本人を直接会ったことがないか、日本人の知人がいない人が大多数でした。もし、実際には両国の人々が交流をするなら、国家的な関係を離れて、お互いの人間としての真の心の交流を通して共生をすることができると結論づけた。

また、仮説で止まるのではなく、実際に日本に住んでいる韓国人、韓国に住んでいる日本人に会って他国での生活と意識がどうか調査しました。私たち韓国の学生は日本公報文化院を直接訪れ、日本大使館で働く方と韓国の学校に通っている方に会うことができました。この方も直接日本人に会わないまま日本人に対する否定的な認識を持っていることを指摘し、お互いの立場になって考えることが共生のための第一歩であることを言いました。日本に住む韓国人は在日韓国人に会った。日本の学生たちと直接在日韓国人に会ったが日本語がよく分からない私としては、多くの内容を理解できませんでした。しかし、日本人でもあり韓国人でもある任意のフレームにもしっかりと挟まれていない在日韓国人の立場からどのようなものが日本人を日本人だと、韓国人を韓国人だと断定できるようにするかどうかを私たちに問いかけられました。このインタビューをもとに韓国人と日本人の垣根を越えて同じ人間として交流することが重要であると考えて発表を準備しました。また、実際に韓国で開催されるアニソングランプリ、日韓文化交流フェスティバルのような日本人と韓国人が互いに交流する事例を調査して発表しました。

### 1.2 私の学び

私は今年の共生についてパネルを展示する活動をしたことがあります。その当時は私の周りの人々を大切にすることから始まる共生に始まり、他人が変わらないものを認識することを重点に活動しました。しかし、今回のセミナーでは、韓国人と日本人が国籍を超えて共生することをテーマにセミナーを準備しました。普段日本に対して関心があったが、

日本人と韓国人は別だという認識が強かった。歴史的な問題もそうであり、あえて日本人について考えることはありませんでした。しかし、今回のセミナーに参加することになり、直接日本の学生たちとあって会話しながら私がまだ認識していなかった私の日本人に対する根拠なかった先入観をたくさん知ることができました。だから韓国人に日本の調査時に受けた回答者がそれらの人々だけの話ではないということを感じることができました。また、前述のアンケート調査をしたときに意外にも日本に対して興味がない友達が多くて驚きました。日本のことをよく知らない調査の難しさを表現している友人を見て、日本をよく知らないまま、日本の良くない認識を持つことは本当に恥ずかしいものと考えられました。

日本で在日韓国人をインタビューしたのも印象深かったです。何が私たちを韓国人なのか、日本人かどうか決定するかどうかを尋ねられたとき、両国の学生は、生まれた国、接した文化などを回答したが、どれも確かに私たちを韓国人、日本人で作ってくれてはいない気がしました。これらの質問により、最終的にどのようなものも韓国人、日本人を区別することができないことを悟りました。そのため、韓国人、日本人であることを越えて、私たち一人一人の地球に住む人類であることを悟り、行動することが重要であると考えています。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

私は昔から日本のドラマ、映画、大衆歌謡など、日本の文化をたくさん接することができました。それらを通して見た日本の文化は他の人に迷惑をかけることを嫌っており、女性は受動的な姿をたくさん見せてくれることなどでした。しかし、日本人の友人に会って私とは別の姿が多く見られました。日本の学生たちは、フェイスブックなどを通じて、まず、積極的に自分の意見を言ってくれたし、発表準備にも積極的に臨んでいました。また、他の組が発表したものの中で日本の女性たちは、自分の好きな男性に先に告白するケースが多いということを知って驚きました。韓国もそのような女性が、男性が告白する方がはるかに多いからです。また、他の人に迷惑をかけることを嫌う姿は、日本の友達が「ごめんね」という言葉を少しだけ間違っても多くのことを通じ、本当の姿であることがわかりました。物を取り出すとき少し擦れても「ごめんね」と言うのが、最初は恥ずかしかったが通常そのような習慣の一つ一つが、相手を尊重する一つの文化というものに触れて私も日本で「ごめん」という言葉を本当に多く使うことができました。他にも箸を横に置くこと、スプーンを使って食べない、左側通行をするということがありました。

### 2.2 私の学び

日本人との友好的な姿がたくさん浮かびました。その中に接した文化コンテンツがそのような日本人の姿を私にたくさん残してきたからです。しかし、そのような姿が心ではなく、加飾と思うような少し不快に感じられることもありました。しかし、ずっと日本の友達と日本人の人々に触れながら、そのようなものはただの飾りではなく、相手を尊重する日本の文化ということを感じることができました。実際に会った日本人は、誰よりも道を親切に説明してくれて、優しく声をかけて真剣に他人の言葉に耳を傾ける人々でした。また、無条件に友好的なものではなくオムハル時は誰よりも厳しく、積極的に自分の意思を表現することを知っている人々でした。結局、日本人も韓国人のような人でした。もちろん、日本では茶道文化や歌舞伎、韓国は韓服やテコンドーなどそれぞれの固有の文化があるが、これはお互いの個性を活かして楽しく交流できるようにしてくれるきっかけでした。今回のセミナーを通じて、私の狭い視野から脱し、より広く世界を眺める人に成長しました。

# 偏見を捨てて見た世界

鄭根姫

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

### 1.2 私の学び

日本に来る前、韓国側のみんなと一緒に西大門刑務所に訪問した。そのあと、わたしの担任だった先生の元を訪れてインタビューをした。それと周りの人たちに韓国と日本、両国についてどんな風を感じているのかをインタビューで簡単に調べてみた。日本に来て日本側のみんなと明治神宮、靖国神社とそこにある博物館を訪問した。千葉県にある高校に行って歴史の先生にインタビューをした。草津でプレゼンを作りながら両国の歴史教科書を比較した。これまで調べて集めた情報を整理してプレゼンを完成させて「歴史認識について」というテーマで発表をした。

事前学習で訪問した西大門刑務所は以前、わたしが中学生だった頃学校で現場実習として行ったことがあった場所だった。だがその時は幼く、歴史についてあまり深刻に考えるような年ではなかったし何より考え方が浅かったこともあって、ただ単に独立運動のために戦っていた人たちがここで無惨に亡くなった、漠然とそう考えていた。

歴史の勉強も視野が狭くて日本人は韓国の歴史をどんな風に考えているのだろう、そんなことはなかなか思いつかなかった。でもこうして国際セミナーで歴史という問題を取り扱って深く勉強してから前より視野が広がった感じがした。

韓国で西大門刑務所に、日本では靖国神社と明治神宮に現場実習をした時各国の利害関係と立場によって歴史の記述がとても違うことにびっくりした。特に靖国神社の隣にある博物館に入って見たものはかなり衝撃的だった。歴史を学んでいたころ先生から日本人は未だに自分たちがどんな間違いをしたのか知らないってよく聞いたけど心のどこかではそれをちょっと疑っていた。

いつもマスコミで歴史の論難があったけどわたしはすべての日本人がそんなはずがないと考えていた。でも展示されているものとその横に書いている看板を見て結構失望した。せめて人間的に考えると自分たちが犯した過ちに少しでも罪悪感を持つのが一般的だろう。

また実習中に千葉県にある高校で学生たちを教えている歴史の先生にインタビューをしながら行った時もなんで罪悪感を持ってくれないかな、そんな考えしかしていなかった。他の国から留学をしにこの学校によく来るとその先生から言われて、ちょっとは中立的な立場で考えてくれないかな、と少し期待していたが予想通りにはいかなかった。

韓国で歴史の先生とインタビューをした時、先生はどんな方にも傾かず中立的な立場で両国がこれからどうするべきかゆっくりその解決策を出してくれた。でも日本の先生はその時と全く違って失望した。これは一時高校生だったころわたしが歴史をこの先生から教わったから言えることじゃない。中立的な立場として見てみるとこんな考えしか出なかった。もちろん自分の国だからそんな考えが出るのも理解できる。だがそのインタビューが終わった時どこかざこちなさを割り切れなかった。

ここで両国間仲良くなるためにはお互い自分たちの間違った歴史認識を正しくすることが一番大切なことだとはっきりわかった。



## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

### 2.2 私の学び

今度の国際セミナーで両国の違いをはっきりと感じた。お互い文化の似ているところは多いのに違うところも結構多くてびっくりしたことがあった。韓国の人たちは対話するとき、あまり大きく反応をしない。例えば「あ、そう？」とかこんな反応が大概だ。その反面、日本人は大きく反応をしている。ドラマやアニメでその反応をよく見かけていたけど、実際で見るのは違うもので、最初は不慣れで多少戸惑ったりした。

それとご飯を食べる時も違うことがあった。食堂でご飯を食べる時、韓国ではおかずは基本的な条件だ。少なくともせめてチキンとサラダぐらいは出ている。だから日本で外食をする時、おかずは全くなくてすかつとした味がなかった。でも思ったよりおかずがない生活にすぐ慣れて大した問題にはならなかった。

温泉とお風呂をする仕方も違った。韓国の温泉は長くいると危険だということは書いてない。だが日本の温泉は10～15分以上上ると危ないと書いてある。

韓国では恥ずかしくて友達と滅多にサウナとか温泉に行かない。その上、家族同士で行くのも今では恥ずかしくて行かないぐらいだ。それに比べて日本のみんなは恥ずかしさを全く気にせず一緒にお風呂に入ってお互いにもっと親しくなるチャンスを作る。そのおかげで、もっと親しくなってわいわいしながらいっぱい笑うことができた。

韓日の文化の違いのために、大学で映像による遠隔交流をする時には本当に仲良くなれるのか心配だった。相手についてよく知らないし、何よりこの人と親しいと言えるほどの間柄ではなかった。その上、このセミナーではなければ知らなかったら韓国側のみんなともあまり親しくなかったから国際セミナーの前日は心配で眠れなかった。でも日本に着いて一緒に過ごしながらかこの心配は本当に無駄だったことをはっきり気づいた。

日本と韓国は似たところが多くても違うところもすごく多い。でも実際日本に行って体験してみると本当に違うのだと感じた。

特に、韓日セミナーのプレゼンが終わったあと、発表の時間とか教育方式が本当に違うのだと感じたことが多かった。中学、高校のころは発表をする機会があまりなかった。ただ先生のおっしゃることを聞いてそれを書き取って単純に暗記して試験を受けた。課題があっても調べて提出することしかなかったし、なおさら積極的な性格ではないわたしには人前で立って堂々と言うことがすごく難しくそのチャンスが来ても自分から進んでしていなかった。

だから大学に入った今でも発表をすることが怖くてかなり苦勞をしている。それであの時何か気になることや質問したいことがあっても自分から進んで発表することが恥ずかしくてできなかった。そのことが今でも気になって少々後悔している。これを直したくて今度の学期は発表が多い講義を聞こうと考えている。

また、歴史の先生のインタビューをしに高校に行った時夏休みなのに部活をするため学校に来て一生懸命に練習をしていることや、代々木オリンピック公園で部活の合宿に来て自分たちがやりたいことに没頭して頑張る姿を見ながら羨ましいな一とずっと思っていた。韓国は入試のことばかりでずっと勉強勉強で、自分がやりたいことは大学に入ってからやりなさいという感じだ。

そのせいか、大学生になったみんなは何をしたいのか確実に決めていない上に夢さえもない状態だ。でも日本では部活などいろいろな活動をしながらか自分がやりたいことを探すチャンスがあり、韓国ではそうではないので羨ましかった。本当に学生の青春ライフを満喫するのだと思った。

韓国も日本のように学生たちに勉強だけを押し付けるのではなく、本当に子供がしたい

ことを自分で見つけさせて、それから勉強をさせるのが本来の教育の目的ではないかと考える。まず学生たちの意思を尊重して本当の夢が見つかるようにこの入試制度を直すべきだと思う。

# 交流を通して学んだこと

金梶 暁

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

歴史グループでは約 2 か月間、韓国と日本、両国間の異なる歴史認識を調べるために両国の歴史教科書を比較・分析した。同時に両親と親しい友達 1 人にインタビューをし、韓国または日本の好き・嫌いなどところと旭日旗・靖国神社へのイメージを調査した。

また両国の歴史の先生を訪れ、韓国の先生からは歴史教科書・授業の限界や問題点のような歴史授業の現場に対する話と、韓国と日本の望ましい未来像に対する話を聞くことができた。日本の先生からは古資料を利用し、独島問題に対する話と東アジアの望ましい未来像に対する話をそれぞれ聞くことができた。

一方、実習として韓国では日帝強占期時代、多くの独立闘士が投獄され、拷問された西大門（ソデムン）刑務所を、日本では明治神宮や靖国神社をそれぞれ訪問した。

### 1.2 私の学び

昨年の今頃に、韓国と日本がしばらく独島問題で騒がしかったことがあった。その時、日本のポータルサイトで同じような記事を探して見たが、あるユーザーが「韓国人たちは洗脳されている」というようなニュアンスのコメントを残したのを見て驚いたことがあった。私が今まで当然だと思っていたことが、相手側から見ると当然なことではなかったのだ。しかし、今回のセミナーでお互いの歴史教科書をみていたら、初めてなぜ韓国と日本が歴史問題で争うかを少し理解するようになった。

私たちは両国の歴史教科書で共通された 5 つの事件、韓日強制併合から 3.1 独立運動、関東大震災、皇国臣民化政策、慰安婦・強制連行までの記述について比較・分析した。両国の教科書はこの事件を説明する分量も、事件を描写する単語も、ニュアンスも全然違っていた。

韓日併合を例に挙げると、日本教科書では韓日併合を 1 ページ半にわたって「保護国化」、「韓国内政改革を指導した」という風に表現したが、韓国教科書では 5 ページにわたって主に「脅威、強行、強要、無慈悲、弾圧、強制的に、鎮圧」という単語を書いて韓日併合を描写していた。

もちろん、教科書にはその国の教育目標・目的に合わせて再構成されて用いられるので、そこまで他の国が関与する権利はないと思う。しかし、教科書で事実を意図的に隠蔽・縮小・美化、あるいは偏見を持たせるような単語を使って教科書を書かれることになれば、それは抑止すべきことだと思う。あくまでも事件の本質を客観的に叙述し、判断は学生らが自主的にするようにならなければならないと思う。

そして歴史を勉強する時に相手を反論するために勉強するのではなく、お互い知るために、また理解するために勉強することが真の学びに繋がるのではないかと思う。この点で、私たちが約 2 か月にわたってした交流は一見すると単なる一つの小さなことにとどまるかもしれない。しかし、私たちが今回の交流を通じてお互いを理解しようと努力したり、話し合ったり、また一緒に経験したことは 10 年・20 年後に他の実践・交流に繋がると信じる。また、これが今後の肯定的な韓日関係の土台になると信じて疑わない。私も今後、今回経験したことを、別の実践・交流に繋がるように努力したいと考えている。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

私は日韓文化の違いで「配慮心」を挙げたい。日本に行ったことは2回しかないが、日本人たちの深い配慮心に驚いたことは一度にとどまらない。たぶん今回のセミナーで初めて日本の友達に感動したのは代々木で名札を渡されたときだと思う。私たちの漢字の名前の上に日本の友達が直接ハングルで一字一字きれいに書いた名前があった。韓国人である私たちのためにそういう風してくれた、その心がとても美しかった。今もその名札を取らなかったのが後悔される。

また、私たちが下手な日本語で話している時、一生懸命に聞いてくれる姿がとてもありがたかった。何か私がいまい面白くないことを言っても皆さんがすぐ笑ってくれるので、私まで本当にたくさん笑ってしまった気がする。

そのうえ、私たちは歴史の問題を扱うのでお互いちょっと敏感だったことがあったと思う。しかし、日本の皆さんが私たちの話をじっと聞いたり、率直に自分なりの意見を言ったりしてくれて私たちが素直に答えてくれることができたと思う。おそらくこのような部分においては日本の皆さんが私達のため、多くの部分を配慮してくれたと思う。

その他にも日本の学生たちの深い配慮行動は数えきれないほどだ。もちろん韓国でも人の事を考えて相手を配慮するが、考えられなかった所で人を本気で思ってくれる心は日本の人がもっと深いと思われる。これが私が日本で感じた韓日文化間の違いの一つである。

### 2.2 私の学び

行動の一つ一つにも本気が、温かさが感じられる日本の学生たちの配慮心を感じてから、私は果して普通、人たちがどうしているかについて思うようになった。私はふつう他人よりは私为中心となって考える傾向が多いと思う。もちろん最近は何(？)できるだけ人に親切で率直に行動しようと思うが、でも、やはり日本の友達みたいにはできないようだ。

さて、ここでちょっと気になることがある。どうして日本の人はこのように配慮心が深いのだろうか。今年の冬、1ヶ月間日本で滞在する機会があった。そのとき一緒に行った友達が共通して言った言葉がある。日本人はとても親切だと。皆がこのように感じるほど日本人の配慮心には韓国と違うところがあると思う。韓国と日本は本当に似ている国だと思うが、異なる部分も確かに存在すると思う。この配慮心に関しても、両国の異なった点が確かに存在すると思うが、一体何がこのように違う結果をもたらすのかよく分からない。日本人は幼い頃から他人に「人に迷惑をかけないようにしなさい」と聞いて育つと聞いたことはあるが、これがこのように違った結果につながるのだろうか。

ところが、韓国でも多くの両親が子供に「なるべく人に迷惑をかけないようにしなさい」と教える。私も幼かった時、「走らないで」、「騒がないで」など、両親にいつも他人を考えて行動するようと言われてきた。もちろん、最近では自分の子供のことしか考えない親もたくさん増えたかもしれないが、ほとんどの両親は私の両親と同じなのだと思う。

いったい何が違うのだろうか。私はたとえ今はこの問題について答えられないとしても、これから日本語を勉強しながらこの問題に対する答えを探したい。ただ、今私がここで確かに言えるのは、こうした日本の友だちの姿から学ぶことが多いということだ。これからも日本の友達のようにもっと他人の立場で、私だけを考えずにその人があるがまま尊重したいと考えている。

短い時間の中、皆さんと早く親しくなることができたのは皆さんの暖かい配慮心のおかげではないかと思う。私たちが皆さんがしてくれたように配慮できるように努力する。セミナーでは本当にありがとうございました。

# 近くて遠い日本

張有鎮

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

### 1.2 私の学び

歴史。歴史については今まで、「難しく複雑なこと」という考えで深く考えていませんでした。セミナーに参加するようになって歴史グループを選択して日本のみなさんと交流を始めるようになり、歴史について知り、これまで無知だった私を反省できる時間になりました。

最初のグループ活動として韓国の友達と西大門刑務所を行きました。過去にも行ったところでしたが、初めてガイドの説明と一緒に長い時間の間たくさん話を聞きました。私たちのつらく大変だった過去、独立のために戦ってくれた誇らしい独立闘士たち。忘れてはいけませんが忘れていた私がとても恥ずかしく情けないで心が痛みました。すべての現在は過去があったからこそ可能なこと。一瞬の気持ちではなく「毎日感謝する気持ちで生きなければ」と思いました。

本格的なグループ活動は、日本で始まりました。グループ活動日、私たちは靖国神社、明治神宮そして日本の歴史の先生のお話を聞きました。実は靖国神社に関しては単に戦犯を祀るところだと聞いていたし「気持ち悪い」ぐらいの認識だったが、実際に行ってそこを見ながら戦犯を美化して侵略戦争を否定する靖国の本質的な問題点について考えてみました。

一番記憶に残った時間は千葉に歴史の先生に会いに行った時でした。個人的に愉快ではない時間でした。独島の関する話を聞くことができ、内心最近独島講演で話題になった保坂祐二教授のような論理と原則的な話を期待しました。しかしそうではありませんでした。ずっとそう思ってきたことを違うように考える人を見た時は本当に不快な気分でした。そして悲しい気分になりました。

過去の韓日の歴史や独島などの問題に関しては日本国民の関心が、一部を除いて大多数が高くないと思います。そのために国民たちは、日本政府の主張や歪曲された事実 naturally 同調する可能性が高く、そのため、韓日関係がさらに悪化していなかったかと思います。間違ったことを正すことが本当に必要だと感じ、そのため、韓国の歴史教育ももっと積極的に進むべきだと思いました。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

### 2.2 私の学び

これまで日本の文化を体験できる機会がなくて今回のセミナーは私にとってたくさんの経験になりました。一番記憶に残るのは時間概念に関するエピソードです。韓国でももちろん時間の約束が重要だが、時間概念がかなりルーズです。このような概念が習慣になって草津で夜に宿所に適時に入ることができず、宿所のおじさんにすごく怒られましたがあの時「あ、日本は本当に時間概念が徹底しているんだね」と感じました。遅れて入った私の過ちもあるが、初めては本当に動揺し、ひどいという考えも聞きましたが今考えてみると本当に勉強になったようです。

日本の友達と一緒に生活しながら感じたのは、日本人たちは本当に誠実ということでした。セミナー準備とか普段の生活する姿をみると、韓国人友達より真面目なところが感じられて「すごいなあ」と感じました。そして、すごく良かったのがほとんど食事を残していないことでした。私は個人的にずいぶん偏食の激しい方ですが、日本の友達の食習慣を見て学ぶところが多いと思いました。

セミナーの中で印象深かったのは日本の友達の積極性でした。韓国の子供たちは幼い時から発表とか前に出て、自分の考えや意見を示す活動をあまり経験しません。私も必ず必要な瞬間以外は前に出て意見を出したり、質問をしたりしません。だから、日本でセミナー中、日本の友達が発表したり前に出て発表したりする姿を見てとても驚きました。これから先の韓国も積極的に自分を堂々と表すことができる教育が必要だと思います。

日本に行ってもっともうらやましいと感じたことは、他人の視線に大きく神経を使わないという点でした。そうでない人ももちろんあるが、日本の街の多様な個性の人々を見て私はそう感じました。例えば、服を着るスタイルとか皆がそれぞれのスタイルがあり、日本で街の人たちを見るだけで本当に目が楽しくなりました。漫画をみたりゲームをする大人たちをみるのも不思議でした。韓国ではもちろん昔ほどではないですが、まだ漫画とかゲームを下級の文化に考える大人もたくさんいて、若者たちの間でも漫画キャラクターなどを好きな友達をあまりよくなく思います。きっとそれは自分の好みで楽しみなのに他の人たちがそんなに評価することは間違ったことだと思います。表現が自由な日本のそういうところはぜひ学ぶべき姿勢だと思います。

短いですが、短くない10日間、国籍も言語も違う友達と過ごしながら普段日本人に対する誤解を持っていたが、いい友達と会って楽しい時間を過ごすことができたので良かったです。忘れられない思い出を残してくれたお茶の水女子大の先生と友達、特に本当に親切だった歴史グループの友達、本当にありがとうございました！

# 私を、そして私たちを振り返る

姜智媛

## 1. グループ活動報告と学び

ソウルではないところで育った私は西大門刑務所をTVを通じて、小学校 5 年生の時初めて知りました。私はその番組を毎週好んで見たために、日本植民地時代に日本が我が国にしたことを理解するようになりました。大韓民国の国民として日本について良い感情を持つことができず、その後も学校の歴史時間に習っている日本、そして独島、歴史教科書歪曲、慰安婦問題などにより、日本のことを良く思うことができませんでした。

事前学習で西大門刑務所を訪れた日は傘に穴が開くほど雨がたくさん降っており、くまなく見回る事は困難でしたが、濡れたままかかっている大型太極旗の姿と、ひやりとした獄舎内部にその当時、不幸だった朝鮮の状況をより現実的に感じる事ができました。

日本で現場実習に行った明治神宮や靖国神社を訪問して「日本は本当に私たちとは違う考えを持っているのだな」という考えをしました。特に靖国神社は、韓国が敏感に反応をする場所だから写真を撮るか迷ったし、友達と冗談ながらも「あの中では絶対韓国語を話さないようにしましょう」と言うほどに気をつけました。神社のわきにある博物館を見学しましたが、やはり日本が受けた被害だけ説明・展示されていることに眉をひそめてしまいました。博物館内にある全ての説明を読んではいませんが、全体的に第 2 次世界大戦当時の日本の行動を美化しようとする感じを受けず、自分たちが被害者という認識を与えるようでした。そして同じ事実について両国の考えにこんなにも差があることに驚かされました。

グループ活動をしながらか最も失望したのは、直接学生たちに歴史を教える日本歴史の先生に会ったことです。実は韓国側は、先生に知りたかった質問をして答えてもらうというインタビュー形式だと思って行ったのですが、独島に対する先生の授業が進んで残念でした。なぜなら、独島は勿論日韓関係に欠かせない事案ではありますが、私のグループのテーマとは距離が遠いからです。そして、先に知っていたら、独島について調査したのに急に行って話を聞くと韓国側の考えを言えなくていららしました。素直に言えば独島に対する先生の考えを私たちに強要するような感じを受けました。

今回のセミナーを通じて今までずっと私が持っていた考えとは全く違う人に会うので頭の中で考えが複雑になり、私が知っていたことは果たして合っているのかという疑問が生まれました。歴史とは果たして客観的だろうか。よく、歴史は勝者によって書かれると聞くので私が知っている歴史が事実でない可能性もあると思いましたし、それぞれ他の国で他の教育を受けて異なった考えを持っていますが、正しい歴史認識とは誰の立場で正しいとするのかという疑問が生まれました。歴史についての私の考えは混沌とし、もっと複雑になりました。これは私の考えが発展したという証拠で、学んだ甲斐がありました。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

遠隔交流をするときは 1 時間に 5 つのグループが会議をしなければならなかったために対話する時間もなく、また、この進行状況について報告をするもので、言いたいことを事前に辞書で調べて、準備することができたので、それほど文化の違いについて大きな差を感じなかったです。

しかし、直接セミナーをしながら韓国学生達とは違う姿を見ることができました。私を含めて韓国の学生たちは発表をしたり質問をしたりすることに恐れをなします。先生が名

指しをしたり、発表をする人にボーナス点をくれたりしなければ自発的に前に出て発言する生徒は、まれです。これは、個々人の考えを表現する教育ではなく、無条件に教科書を暗記して試験を受けて順位を出して刺激する注入式教育の弊害だと思います。反面、日本の学生たちは各グループが発表を終えたら誰か発言しなかったら自ら発表をしてまたその質問が鋭くて、びっくりもしたし、うらやましかったです。

そして教授と学生らの間に上下関係がなく、本当に親しく見えて不思議でした。私たちのグループの友達でご飯を食べる時、前に座っていた森山教授と対話をする姿が教授が苦手な私たちの姿とは大きく違って見えました。韓国のすべての学生がみんなそうとは言えませんが、大抵は教授を煙たがって同じ空間でご飯を食べたとしても、別に食べて講義時間がなければよく訪れたりはいしません。

これを克服するためには、簡単ではないが、自分の意思を明確にすることができるようにする教育が必要です。そして教授に対して不満に思うことは、韓国の伝統的な礼儀作法を重んじるあまり、意見することを無礼とする慣習がある程度残っていることです。風習ももちろん大切ですが、目上の人だからという無条件な上下関係がなく、水平関係で見られる社会的認識が必要だと思います。

もうひとつ、日本の花火を見ながら感じたことは、日本人たちは浴衣や着物をよく着るということです。最初は、花火大会なのにどうして不便で暑くて不快だった浴衣を着るのか?と考えましたが、時間が経つほど伝統的な祝日の時さえ着ない私たちの韓服が浮び上がりました。韓服の不便さを解消した改良韓服があるのに私たちはチマ・チョゴリを不便に思っただけなのに、日本人たちは特別な日があるときいつも浴衣や着物を着る姿に感動しました。

私たちが昔から伝わる韓国の固有文化に対する自負心を持って、継承するための努力をたくさんしなければならぬと感じました。



# お互いの理解

権英芽

## 1. グループ活動報告と学び

セミナーに行く前、韓国で私たち歴史組は西大門刑務所を訪問した。そこは、過去の日帝強占期に日本軍が韓国の独立闘士を拘留するために作った刑務所である。残酷な拷問の場面の模型を作って、実際の刑務所の展示がしてあるのを見ると本当に苦しかった。しかし、死ぬほど苦しい拷問に耐えて生き残った愛国者とその子孫たちは現在、基礎生活受給者として生きていくなど、経済的に都合が良くない。むしろ当時国を日本に売って、日本側についた親日派たちがこの社会の指導者になって生きている。これはいったいどういった構造なのか、と思っても親日の残滓がまだ多く残っており、社会は仕方がないことだ、と黙認する。もちろん、過去に日本が犯したことは拭えない罪である。しかし、この事実を知りながらも知らないふりして、韓国も彼らに罪を犯しているのだと思う。これは本当に残念なことだ。

日本に着いて、私たちは渋谷の明治神宮に行った。宿泊先の代々木センターより明治神宮へ行く道は森の中だった。緑の森の中を歩いていたら爽やかで健康になる感じだった。明治神宮の門は木でできていて本当に日本らしかった。天皇に仕える神氏であるだけに厳粛な雰囲気が漂っていた。内側には大きな太鼓を打つ人と、それに合わせて天皇に祈りをささげる人々がいた。出ると、伝統的な結婚式を挙げる人々を見た。伝統的な服を着た新郎新婦と上品な容姿の賀客たちが行列をなしていた。日本も韓国のようにお金持ちが伝統的な結婚式を挙げるんだなと思った。そして靖国神社に行った。靖国神社は韓国でも有名な神社だ。ここは、第二次世界大戦を主導した戦犯を称えるところであるので、世界的に論難が起こったからである。日本の右翼が軍国主義を尊重し、参拝をすることを、日本人もいい迷惑だと思うのである。もちろん、私も靖国神社に否定的な考えを持っていてこの場所を見学するのが苦しかった。さらに、神社の中には第二次世界大戦の戦犯の記録を展示した博物館がある。報国という言葉を使いながら、戦犯を包装する姿を見てとても気分が良くなかった。そのような感情を後にしたまま、博物館を出て、気持ちが沈んだ。

明治神宮と靖国神社を見学した後に、事前に約束した日本の高校の先生とのインタビューのために千葉県の高校に行った。しばらく待って出会った先生は 2 時間ほど韓国と日本の関係と独島の所有権の問題について授業形式の説明をした。彼の話を経合すると独島の所有権を主張し、戦うことよりも妥協案を見つけて共同所有をすることがよいということだった。私は少しボーッとしながら、日本人と韓国人はあまりにも異なる歴史教育や環境により異なる考えや歴史観を持っていると感じた。私は独島は韓国の領土だと思う。その根拠は、媒体を介して伝えられた。日本人も独島は日本所有の土地だと思う人が多いだろう。彼らの国が根拠を示して所有権を主張しているので当然信じるだろう。だが真実はまだ誰も知らないし、重要なのは我々の態度である。明確な根拠は徐々に出ることでいつか真実は明らかになるだろう。その過程で、韓国と日本は領土を取るための紛争ではなく、真実を明らかにする努力をしなければならない。そのためには、お互いの歴史、文化への深い理解と正しい歴史教育が行われるべきだと思う。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

私は子供の頃から日本の漫画とドラマ、そしてインターネットを通じ、日本文化を間接

的に経験してきた。先進国であり、隣国である日本の文化は韓国にかなり深く位置している。特に日本に関心が深い私は日本語の勉強と間接的文化体験を通じて日本文化を比較的によく知っていると思う。代表的に食事文化の違いがあるが、韓国人は茶碗と汁椀を置き、スプーンと箸をいっしょに使用するのに対し、日本人は茶碗を持って箸だけを使って食べて、汁椀は手に取って飲む。実際日本に行って感じたこととして、レストランに行くとスプーンはあまり出なかった。また、食べ物を注文するとキムチやおかずが一緒に出てくる韓国に比べて日本は、注文した食べ物だけ出てきてははじめは少し驚いた。

韓国と日本は、これらの違いもあるが、共通点も多い。同じ漢字圏だから言葉も似ているし生活様式もとても似ている。特に私と同じ年齢の人々に会って感じたことなのだが、若い人は、自分たちの言葉を作って使用する。例えば、日本人は「やばい」という言葉の意味を拡張させて驚いたり大変な状況、またはおもしろい時などいろんな状況で使う。韓国はそのような言葉が本当に多い。代表的なものに「ハル、デバック」などがある。この言葉は、「やばい」の意味と似ていて韓国の若者が使う言葉だ。そして、日本人でも韓国人でも考えていることはあまり変わらないと感じた。共感を覚えるのが難しくなかったのが不思議だった。ただ日本語がうまくないので時々わからない言葉があれば、いつも辞書を使ったり、日本の友達に聞いて私の言うことを正確に伝えることができた。

日本人は本当に親切で、思いやりが深い。もちろん、性格は千差万別だが、少なくとも私が会った人々は皆、基本的に親切だった。個人主義の日本人は、人に被害を与えることもなく、自分も被害を受けることを嫌がる。だから、配慮することが身についている。そして日本人は、時間の約束をとっても重要だと思っていることがわかった。韓国人は「少し遅れても大丈夫だろう」という考えを持った人が多い。これは、他人に被害を与える行為であり、従って時間約束についての態度は日本人に学ぶべきだと思う。もうひとつ学ぶことは、セミナーの発表をする時に感じたことだが、日本の学生たちは、人々の前で自分の考えを表現し、フィードバックを受けることに不安を持っていなかった。一方、韓国の学生たちは、自分の考えを他人に話すことに不安を持っていて、発表するのに消極的だった。私の考えで最も大きな理由は、韓国の教育の方式である。じっと座って詰め込み教育を受けてきた私たちは、自分の主張を繰り返すことに弱い。学生時代には自分の主張をする機会がほとんどなく、ひたすらテストの勉強だけする韓国の現実である。このような教育方法を変えるべきだと思う。

私は日本人の大きなアクションが好きだ。韓国人は恥ずかしがる人が多くて大きなアクションをあまりしない。なので、私たちにはあまりないその姿がいい。日本人も私たちが羨ましくて学びたい点があると思う。他の環境で育った人々がお互いに友達になるにはまず、お互いの環境と文化を理解することが重要であると思う。今回のセミナーを通じてたくさん感じて、日本についてもたくさん知っていい経験になったと思う。

# 一歩進んで行ける

崔允禎

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

セミナーが始まる何ヵ月前からテレビ会議を通じて‘教育’というテーマにどのような面でアプローチし、韓日両国の教育を比較分析することについて様々な意見を提示して相談をした。韓国と日本の教育が似ていると思ったが、思いのほか違う部分が多いということを感じて中間に細部的な内容を変えるなど困難を経験し、内容を定めた。本セミナーの日程が始まる前にアンケートを作って大学学業成就度や満足度を調査して、大学入試のための準備課程と大学入試制度、英語教育の実体などについての調査を進めた。セミナーが始まってからは、まず、韓日両方が調査した資料を検討して有用な資料を選び出した。足りない部分があれば再調査をしたり、お互いのインタビューを通じて埋めていった。現場実習地としては日本の名門大学である東京大学に行くことに決めて東京大学の学生たちを対象にアンケート調査とインタビューを実施することにした。大学に対する満足度、就職に関する項目、大学生活がどうなのかに対するアンケート調査を実施して入試のためにどのような準備をしたかどうかをインタビューした。すべての資料を集めて発表準備を始めたが、韓国側が日本語において不足な点が多いため、大半のことを日本の友達が引き受けてしてくれた。パワーポイントを作って台本を作る作業の大部分が日本の友達によって行われて韓国側は伝えた内容が一致しているかどうかを検討した。大変な発表の準備過程で歓送会の時に必要な出し物を練習したことが記憶に残る。韓国アイドル「クレヨンポップ」の「パパパ」の踊りを踊ることにして、皆で映像を見ながらダンスの練習をした。皆、発表準備によってくたびれていた中、難しいことを忘れて楽しむことができた時間だった。残念なことに練習不足で出し物を他のゲームに変えたが、教育組が楽しかった最初の時間だったと思う。

### 1.2 私の学び

セミナーの準備過程が息苦しくてうんざりだと感じたけれど日本の友達の熱情な姿を見てたくさんの方に気づき、心を入れ換えて準備に一生懸命取り組むことができた。実際に日本の友達のほとんどは私より年下だったが、彼女らのセミナーに参加する姿を見ると年の差を感じることはできないほど、誰より真面目で大人びていた。セミナー準備中、日本の友達は学校の日程でとても忙しかったと聞いた。私だったら私の個人的な仕事にだけ時間を使いたいと思うであろうが、ない時間を裂いて誰より熱心にセミナーに取り組む友達の姿を尊敬した。特に彼女らがみんなで集まって発表準備をする姿を見た時は韓国と比較して本当に多くのものを感じさせた。韓国の大学での授業では、メンバーたちの間の協同心と他人との疎通する方法を知るために、チーム発表をたくさん練習した。しかし韓国のメンバーたちは、協同心を発揮したり、メンバーで意思疎通をするというよりはお互いの役割を分担して自分の担当だけをまとめる形であった。しかし日本の友達は発表準備が終わるまで、自分の役割をするだけでなく、みんなで集まって意思疎通をしながら発表を作っていくという姿が本当に印象深かった。みんなが一生懸命に作った真のチーム発表に感銘を受け、これからはチーム発表を準備する際に日本の友達を見習ってメンバーで意思疎通をしながら成し遂げていきたいと思った。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

韓国と日本は地理的にとても近い国であり、交流した歴史が長いので、文化においてもあまり違いがないと思っていた。10日という期間は非常に短い期間だったが、それでも日本で日本人と生活する上で多くの相違点を見つけることができた。習慣と考え方においても多くの違いが感じられたが、私が一番大きな違いを感じた部分は言語行動だ。本セミナーが始まった時、一番最初に感じたのは、自分自身のことを考える前に他人をまず考えて配慮するという行動が日本人には身につけているということだ。自分たちと同じく大変な状況下でも、まず先に私たちに配慮する姿をたくさん見た。また、朝のあいさつや食事の前の感謝の言葉など、日常生活でのあいさつが習慣化されていた。また、日本人というと親切な姿が先に思い浮かぶから、嫌なことはきっぱりと嫌だと言うような、はっきりとした表現を韓国ほどは使わないと思っていたが、意外にも、自分が嫌だと感じることははっきりと嫌だと言っており、イメージとは違っていた。これらのことは、好き嫌いの曖昧な表現の使用により韓日の間で生じる問題を避け、お互いを確実に理解するための日本人の配慮ではないかと私は考えた。また、日本人は韓国人に比べて他人の視線を意識しないと感じた。私ならば個人的に解決するようなことや見せたくないことを他人に被害を与えない範囲で人目を気にせずする姿を見ることができた。

### 2.2 私の学び

克服すべきだと思う違いは感じられなかったけれど、多くの場合において見習いたい部分を発見することが出来た。一番基本的な部分だが、韓国では実践していない朝のあいさつなどの、日常生活の中でのあいさつが習慣化されているという部分は特に見習いたい。初日目は、朝、日本の友達が「おはよう」とあいさつすることにすこし違和感があったけれど、ちょっとしたあいさつというものが相手の心を気持良くさせることができるということに気が付いた。また、自分よりまず他人を配慮するという習慣を見習わなくてはならないと思った。韓国人だからと言ってあいさつをしないというのは、利己主義者であるということではない。気持良くあいさつが出来て、配慮もする。しかし、韓日間で異なる部分があり、そのような部分の良さを感じるようになったので、そのような姿を学んで実践したいと考えるようになった。

# 言語を越える関係

金希俊

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

교육 그룹에 들어가 사전 학습 준비를 하는 과정에 있어 일본인과 직접 영상통화를 하며 의견을 교류하는 것이 걱정되었지만, 일본인 교수님께서 간단한 대화, 즉 토론에 자주 쓰이는 문형 등을 알려주셨다. 그런 문형들을 보면서 일본인들의 대화 방식이나 사고방식을 어렵듯이 짐작할 수 있었다. 한일 국제 교류 라는 입장에서 각 나라의 습관을 알아보는 것 역시 좋았지만, 내가 선택했던 ‘교육’이라는 분야에서 세미나 준비를 하며 새롭게 배운 것들과 얻은 것 또한 많았었다.

‘교육’이라는 문제를 다루기에 앞서 예전 수업에서 한국의 교육은 일본의 교육방식을 그대로 가져왔다고 들어서 과연 한일 간에 어떤 다른 점이 있을까 고민을 많이 했었다. 그때 일본 측에서 내밀었던 문제점은 영어교육이었다. 영어교육의 경우 일본 측에서 내걸었던 문제점들은 ‘영어교육’이라는 주제 하나로 묶기엔 다소 가벼운 주제가 될 거라 생각해 교육전체를 다룰 수 있도록 전반적인 교육 시스템을 이야기해보자고 제안했었다. 한국 측이 떠올릴 수 있는, 그리고 우리가 학생으로서 겪었던 교육에 대한 문제점 등을 일본 측에게 알려주자 생각보다 크게 놀라는 모습에 한국의 교육 문제점에 대해 좀 더 심각하게 알아볼 필요가 있다고 생각했다.

한국 측은 한국의 교육 방식으로 인해 생긴 문제점들에 대해 일본 학생들에게 인터뷰를 하며 질문을 했다. 우리가 예상했던 것과는 답변이 달라 한일 간의 교육의 문제 역시 다름을 많이 느꼈다. 일본 측은 영어교육을 중점으로 일본 교육의 문제점을 지적하며 인터뷰를 진행했다. 일본 측의 경우 자국을 다루었지만, 한국 측은 일본이라는 다른 나라와 비교를 했기에 그 차이점을 명확하게 느낄 수 있었다.

教育グループに入って準備している過程において日本人と直接、映像通話をして意見を交流する際、とても不安があったが、日本人教授が簡単な会話、つまり討論によく使われる文型等を教えてくれた。そんな文型を見ながら日本人の対話方式や考え方をなんとなく推し量ることができた。韓日の国際交流という立場で各国の習慣を調べている点も良かったが、私が選択した「教育」という分野でセミナーの準備をして、新たに学んだことや得たことも多かった。

「教育」という問題を扱うことに先立って、以前の授業で韓国の教育は日本の教育方式をそのまま持ってきたと聞いて、日本との間にどのような相違点があるだろうとたくさん悩んだ。その時日本側が提示してきた問題点は、英語教育だった。しかし、日本側が提示した問題点である「英語教育」というテーマ一つにするとやや軽い主題なることを教育全体を取り扱うことができるように全般的な教育システムを話しあってみよう提案した。韓国側が考える、そして実際に学生として経験した教育についての問題点などを日本側に伝えると、思ったより大きく驚いている姿に韓国の教育問題点についてもっと深刻に調べる必要があると考えた。

韓国側は韓国の教育方式によって生じた問題点について日本の学生たちにインタビューをしながら質問をした。私たちが予想したものとは返事が異なり、韓日間の教育の問題も違うことをとても感じた。日本側は、英語教育を中心として日本教育の問題点を指摘し、

インタビューを進めた。日本側は自国のみを扱ったが、韓国側は日本という他国と比較をしたため、その違いを明確に感じることができた。

## 1.2 私の学び

한일 국제 교류 라는 점에 있어서 일본인들의 가치관이나 일본이라는 나라 자체가 가지는 전체적인 성격을 직접 느낄 수 있었다. 토론에 자주 쓰이는 문형만 보아도 상대방의 의견에 이의가 있을 때에는 정말 조심스럽게 말을 꺼내는 등 일본인들의 상대를 배려하는 태도 방식을 볼 수 있다. 세미나 ‘교육’ 그룹의 일본 학생들과 생활하면서 역시 알아간 것들이 많은 데, 일본인에 대한 선입견들이 전부 맞는 것은 아니란 것 또한 알게 되었다.

‘교육’을 주제로 세미나를 준비하면서 배운 건 역시 한국의 교육 문제는 심각한 단점이었다. 그리고 일본 역시 비슷할 줄 알았는데, 비슷한 점도 있지만 문제점을 개선할 수 있는 교육 방식들이 꽤 잘 준비되어있음에 놀랐다. 일본의 대학에서는 과를 정해놓고 입학 하는 것이 아니라 본인들이 관심 있는 분야의 과목이나 교양을 먼저 듣고 학점을 준비한 후에 학과를 결정한다. 한국의 많은 문제 중 대학교 이름만 중요하게 여겨 본인의 수험 점수에 맞춰, 관심 없는 과로 진학하는 경우가 많은 데, 일본의 경우는 좀 더 학생의 의미 있는 대학공부를 할 수 있도록 도와준다 할 수 있겠다.

일본의 교육열 역시 한국만큼 높다는 것을 알았지만 문제점에 있어 훨씬 체계적으로 준비되어있음을 느꼈다. 하지만 우리가 인터뷰 했던 대학생들 대부분이 명문대 출신이라 그 이외의 대학들 역시 비슷한지 확인 할 수 없었던 점이 아쉬웠다.

韓日国際交流という点において日本人の価値観や日本という国が持つ全体的な性格を直接感じることができた。討論によく使われる言葉を見ても相手の意見に異議があるときには本当に慎重に言葉を取り出すなど、日本人の相手を配慮する姿勢・態度を見ることができている。教育グループの日本の学生たちと生活しながらわかったように、日本人に対する先入観が全部正しいのではないということもわかるようになった。

教育をテーマにセミナーを準備しながら学んだのは、やはり、韓国の教育問題は深刻ということだった。そして日本も同様であると思ったのに、似た点もあるが、問題点を改善できる教育方法がかなりよく準備されていることに驚いた。日本の大学では科を決めて入学するのではなく本人たちが関心のある分野の科目や教養を先に聞いて単位を準備した後に学科を決定する。韓国の多くの学生は、大学の名前だけを大事にし本人の受験点数に合わせて、関心のない科に進学するケースが多い。日本の場合はもっと学生の興味のある勉強ができるように取り計らわれている。

日本の教育熱も韓国と同じくらい高いということを知っていたが、問題点においてはるかに体系的に準備されていることを感じた。しかし、我々がインタビューした大学生の大半が名門大学出身なので、それ以外の大学はどうかを確認できなかった点が残念だった。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

이번 국제 교류 세미나를 통해 다시 한번 일본인들의 사고 방식은 한국과 다른 점이 꽤 많음을 알 수 있었다. 아주 사소한 생활 행동에서 느껴지던 것들이다. 가령 밥을 먹을 때 일본 학생들은 함께 먹는 학생들이 모두 앉을 때까지 기다리다 밥을 먹는 다던가 하는 사소한 것들을 말하는 것이다. 특히 대중 육당은 한국 학생들이 오기

전부터 걱정하던 것이었다. 하지만 막상 들어가보니 너무나도 자연스러운 일본인들의 모습에 걱정했던 우리가 오히려 더 부끄러워졌다. 어쩌면 실례가 될지도 모르는 행동인데, 우리는 그런 광경이 꽤 신기해서 일본인들을 흘끗 쳐다보기도 했었다. 하지만 일본인들은 정말 아랑곳하지 않고 묵묵히 본인의 할 일을 끝낼 뿐이었다. 한국인의 입장에서 느끼기에 새로웠던 행동들은 이것뿐만이 아니다. 한국 학생들과 만나면 ‘오늘은 일본 친구 누구누구가 이런 행동을 했는데 역시 일본이라는 나라와 한국은 많이 다르다’ 라는 얘기가 자주 오고 갔었다.

今回のセミナーを通じて改めて、日本人の考え方は韓国と違う点がかなり多いということを知ることができた。ちょっとした生活行動で感じられたものも多い。例えば、ご飯を食べる際、日本の学生たちは一緒に食べる生徒たちが全員座るまで待ってからご飯を食べ始めるなどという些細なことだ。特に、大衆風呂は韓国の学生たちが来る前から心配したものだった。しかし、いざ入ってみたら、あまりにも自然な日本人たちの姿に、むしろ心配した私たちがもっと恥づかしくなった。ひょっとしたら失礼になるかもしれないことだが、私たちにとってはそのような光景がかなり珍しくて、風呂に入っている途中に日本人をちらっと見たこともあった。しかし、日本人は本当に気にしないで黙々と本人のする仕事を終えるだけだった。韓国人の立場で新鮮に感じた行動はこれだけではない。韓国の学生たちと会った時には「今日は日本の友達の誰誰がこんな行動をしたが、やはり日本という国と韓国はとても違う」という話がよく出てきたものだ。

## 2.2 私の学び

일본인들의 사소한 행동들에서 느꼈던 한일 간의 사고방식의 차이에 대해 말해보겠다. 한국의 경우는 남의 시선을 정말 많이 쓰는 편이다. 어떤 행동을 할 때 상대의 눈치를 보고, 비교하게 된다. 일본의 경우는 조금 다른 의미로 남을 많이 신경 써준다 할 수 있겠다. 하지만 그만큼 철저한 개인성이 있다.

두 나라는 이렇게 ‘다름’ 이 존재하지만 사실 그런 행동들이 나오게 된 원인은 비슷할 거라 생각한다. 한국은 단일 민족 국가라는 이유로 서로 개인적인 면까지 공유하면서 공동체를 구성해나간다. 일본 역시 和 를 중요시 여기며 서로 조화롭고 평화롭게 살아갈 것을 추구한다. 이렇게 보면 단일 민족국가를 이념으로 하는 한국과 거의 비슷할 거라 생각하지만 미묘하게 다른 차이가 한일 간의 문화 차이를 만들어낸다. 일본의 경우는 개인이 개인의 자리에서 주어진 일을 열심히 하며 남에게 피해주지 않으며 공동체를 구성한다.

국제교류 세미나를 하면서 이러한 차이를 느끼긴 했지만 나름대로 새로운 경험을 했다고 생각한다. 한국에서 겪었던 타인의 시선을 신경 쓰던 것에서 벗어나 일본의 개인성을 경험할 수 있었다. 특히 일본 친구들과 교류를 하면서 크게 배웠던 점은 사람이 태어나고 생활한 환경이 많이 다름에도 불구하고 ‘친구’ 로서 뭉칠 수 있고 사람 대 사람으로 이해하고 생활하면서 인간의 ‘정’ 을 느낄 수 있었다는 점이다. 국적은 절대 그 사람을 판단할 수 있는 잣대가 될 수 없음을 깨달았고 사람에 대한 따뜻한 언어를 넘어서는 어떤 것에 의해 느껴진다는 것을 알았다.

日本人の些細な行動で感じた韓日間の考え方の違いについて話してみたい。韓国の場合人は人の視線を本当によく気にする。いかなる行動をする時でも、相手の顔色を見て、比較する。それに比べて、日本の場合少し違った意味で人をたくさん気にしてくれるところがある。しかし、それは徹底した個人性がある。

兩國にはこのように相違点が存在するが、事実そういう行動が出るようになった原因は

似ているのだと思う。韓国は単一民族国家という理由でお互いに個人的な面まで共有しながら共同体を構成していく。日本も、和を重要視しながらお互いの調和で平和に生きることを追求する。こう見ると、単一民族国家を理念とする韓国と同じだろうと思うが、微妙な違いが韓日間の文化の違いを作り出す。日本の場合は個人が個人の席で与えられた仕事を一生懸命しながら他人に被害を与えず、共同体を構成する。

セミナーをしながらこのような違いを感じたものの、それなりに新しい経験をしたと思う。韓国で経験した他人の視線を気にしていた環境から脱して、日本の個人性を経験することができた。特に日本の友達たちと交流をしながら大きく学んだ点は、人が生まれ育った環境が大きく異なるにもかかわらず、「友達」として団結することで理解して生活しながら人間の「町」を感じるということができたという点だ。国籍は絶対にその人を判断できる物差しになりえないことを自覚し、人の温かさは言語を超えたものによって感じられるということが分かった。



# セミナーレポート

柳美莉

## 1. グループ活動報告と学び

私が所属したグループは教育グループだったので、両国の教育システムに関したことを調べる活動をした。そして、その活動をしながら両国の教育システムがどのような形で行われているのかを知ることができた。

### 1.1 活動内容

私たちのグループは、両国の教育を比較する活動をした。特に学びが多かった部分は両国の大学入試前の学校の教育システムに関する事だった。事前活動で韓国と日本の大学入試前のことに関する調査をした。その結果、次のようなことがわかった。

- (1) 韓国の学生は夜まで学校で自習をする。
- (2) 日本の学生は部活をする人が多い。

セミナーが始まってからは日本の他の大学生たちを対象にインタビューをして大学入試前の通常のスケジュールを書いてもらったり高校の時の話を聞いたりしていろいろな情報を知ることができた。

### 1.2 私の学び

この活動を通じて、私は両国間の大学入試前の教育システムの違いに関して詳細に比べることができた。私がこの活動を通して学んだことは、韓国は有名な大学に入るために子供の時からずっと入試むけの勉強をするのと反対に、日本は常に学校で部活動などを楽しみながら入試むけの勉強より自分自身が興味深く感じたことを中心の勉強をする。そして、日本より韓国の方が、社会の中でより良い環境で生活するためなどの理由で大学に入りたがる人が多いことを分かった。反面、入試前の英語教育に対しては、日本より韓国の方が英語をより勉強しており、韓国の学生は基本的な文章は中学生になったらほぼ理解できるということが分かった。この活動を通じて、両国の教育システムの中でお互いの良い部分を知ることができた。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

今回のセミナーは、私にとって本、ネットなどの文を通じて接した日本の文化を直接的に体で感じる事ができた初めての機会だった。直接に感じた日本の文化は、文章を通じて接したものよりより近くに感じられた。

### 2.1 日韓の文化の違い

私が感じた大きな文化の違いは食文化に関するものだった。

普通の食事をするとき、韓国では箸とスプーンを一緒に使う。しかし、日本では箸だけを使った。箸の種類も韓国では鉄で作られたものが多いので、派手な色で作られたものは少なく、箸に派手な形を彫刻して作られた物が多かった。反対に、日本は木で作られた箸を使った。お店で見た日本の箸は、派手な色をしていたものが多かった。

また、韓国は食器を持たずに置いたまま食べるが、日本は食器を持ち上げて食べるという点が違った。韓国の食器は磁器で作られたものが多いので、重くて持って食べることはで

きない。だから食器を置いたまま食べる食文化が発達した。日本の食器は、薄くて軽かった。食器が軽いので、持って食べる文化が発達したかもしれないと思った。

## 2.2 私の学び

私は普段、箸よりスプーンを使ってご飯を食べる。だから箸だけを使ってご飯を食べるのはとても難しかった。ご飯を食べる時に、箸を使ってお米を取るのが下手だったので、きれいに食べるができなかった。おかずを食べる時にも、最初はうまく取ることができず、不便だった。ところが、毎食箸を使ってご飯を食べていると、慣れてきてだんだん楽になった。

日本でご飯を食べながら感じたのは、韓国は食器を持ちあげないので、箸とスプーンを一緒に使う方が箸だけを使うより食べる時により楽であるが、日本は食器を持ち上げて食べるので、スプーンより箸だけを使う方が食べる時もっと楽だと思った。そういった理由で、日本はスプーンではなく、箸を使う食文化が発達した可能性が高いと思った。

# 忘れられないセミナーを終えて

姜ウンソム

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私は、教育というテーマを選択したため、グループの活動は主に、日韓の教育方法やカリキュラムの違いについて調査することでした。日本の学生たちと会う前にそれぞれの国の学生を対象に学業成績の調査をし、日本に行った際には、一緒に東京大学を訪問し、東京大学に在学中の学生をインタビューしました。韓国で準備した質問は、高校の時にどのように勉強してきたのか、大学あるいは学科の選択基準が何なのか、進路を決めるときにどのような点を重視するかなどについてのものでした。その過程で、韓国のシステムについても説明しながら、多くの会話を交わすことができました。

日本側で用意した質問は、幼い頃から、各年齢別でどのような勉強をどのようにしてきたかのことでした。このように、日韓の教育の違いをもっと知りたいとしました。

### 1.2 私の学び

ずっと韓国だけに住んでいたもので、韓国の教育システムにのみ慣れていた自分自身を、そして韓国社会をもう一度考えてみるきっかけになりました。韓国では、大学に通うまでは、ひたすら良い名門大学に通うために勉強をしています。ますます競争が激しくなって大学に行くための勉強をする年齢は早くなっています。このため、いくつかの問題が発生することになりますが、人々はそれを知りながらも受け入れるしかなくて、結局はその競争に参加することになります。しかし、日本の教育システムを見てみると、名門大学進学のための情熱は韓国と似ていますが、その数が韓国よりも少なくはなく、自分がしたい勉強をするという学生ははるかに多かったです。韓国の修学能力試験と同様のセンター試験を高校2~3年生の時に始めて、大学に進学した後も、自分の適性を最も重視し、その上で進路を決定するというので、驚きました。実際、韓国の大多数の大学生は、他の人が認めてくれる大企業に行きたいので、自分の適性ではなく、就職に有利な専攻を選択する場合があります。

似て非なる日本の教育システムが気に入りました。自分の適性と素質を優先的に考えているのは、韓国が学ぶべき点だと思いました。事前調査では限界があった部分を直接日本の学生たちと話をし、深く知ることができる良い機会でした。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

日本の人々は友好的である音は昔からよく聞いてきました。しかし、日本に行く前までは、その親切さというのが普通の優しさだろうと思っていましたが、実際に日本の学生とその他の人々に会って感じたのは私たちが思っている普通以上の優しさを持っているということでした。どの他の国の人よりも日本の人々は親切で優しかったです。日本の学生たちとあちこちまわって地下鉄を利用する際には、荷物も私たちよりも多かったのに席を常に譲歩してくれました。韓国の友人同士で旅行をする時にも日本人に道を尋ねると手作りの地図まで描きながら案内してくれました。

東京大学でインタビューをする際にも、日本語が少し不足している私たちのために途中

で言いたいことの意味が合ったのか、意図が正しく伝わったかなどを継続して確認してくれました。自分たちも準備で忙しい中、とても気を遣ってくれて、とても感謝しています。日本で出会った人々の友好的な態度は、私の日本全体のイメージをかなり良くしました。

## 2.2 私の学び

利己主義が広まり、社会において人に対して思いやりを失った自分の姿を反省するきっかけになりました。もし韓国でセミナーが行われた時、私は私が受けたその思いやりと優しさを彼らに施すことができたのだろうかと考えてみました。おそらく日本の友達、人々から受けたそれらの半分しか施すことができなかつたでしょう。そんな自分の姿をもう一度見て、今回のセミナーで学んだ彼らの態度を身につけることが目標です。

# 私より年下だけど、大人っぽい日本人の友達

金善京

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私は日本の学生は消極的だと思っていました。でも初日に会った時から荷物を持ってくれたり積極的に声をかけてくれたりして少し驚きました。それから、実習地の計画を立てるときも私たちが行きたい所へ連れ行くために一生懸命に相談してくれる姿にとっても感動しました。私たちが花火大会を見たがっていたので連れて行ってもらいましたが、雨がたくさん降って結局見ることができなくなりました。日本の学生たちのせいではないにもかかわらず、謝る姿に思いやりにたくさんあふれていると思いました。

そして私が一番印象深かったのは、日本の学生たちの明るくて肯定的な態度でした。発表準備をしたりダンスの練習をしたりするときに、私は少し心配でした。発表とダンスの全てが完璧ではない状態だったからです。コミュニケーションがうまくいかない時、いらいらして不安になってストレスを感じました。日本の学生達もきっと大変だったはずなのに、全然そんなそぶりを見せないで熱心に準備をしてくれました。いつも肯定的で明るくエネルギーを失いませんでした。それで私たちも元気を出せましたし、発表も成功させることができました。

### 1.2 私の学び

意外に積極的でアクティブな姿に驚きました。それから、なにより日本の学生たちのまじめさと前向きな態度から学ぶことが多いと思いました。約束時間は必ず守って、他人を配慮してあげて何をしてもしっかりしている姿にすごいと感じました。それから、不満を口に出さず、いらいらしないでより肯定的に頑張る姿がとてもよかったです。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

日本の学生たちと一緒に実習活動のなかで発表準備とダンス練習もしながら一週間という時間を過ごしました。実際に日本人と会って一緒に過ごして思ったのは、日本の学生たちは本当に配慮をたくさんしてくれて、大変なことがあっても表に出さないということでした。実習の日、私達は外へ出てたくさん歩きました。その日は蒸し暑くて、ずっと歩いたので足がすごく痛かったです。韓国人学生同士は「あ、暑い。大変だよ。足が痛いね。」と自然におしゃべりをしました。そのとき気付いたのは日本の学生たちは全然そんな話をしていないということでした。きっとヒールの高い靴を履いていて足が痛いはずなのに、なぜそんな話をしないのか不思議でした。そこで私は足が痛くないかと聞いたら、「痛いね」と答えてくれました。それにもかかわらずほとんど顔に現さなくて、私は驚きました。それから、地下鉄で席が空いたら私たちに譲ってくれようとする姿に、私は感動しました。お茶をするとき、私は正座がとても大変だったけど日本の学生たちは全く何でもないように見えました。終わった後に痛くなかったと聞いたらまた「痛い」と答えました。苦痛だとかそういった話をしないから、私は本当に大丈夫だと思っていました。ダンスの練習をする時も日本の学生が転んで足にあざができました。きっとすごく痛いはずなのに、笑って「大丈夫」と言いました。このように、他人に迷惑をかけないために我慢する姿を見な

がら本当に大人だと感じました。

その一方、日本人の学生が感情表現をあまりしないので「辛いのかな、大変ならば誰に話してもいいのに」と思いました。韓国人たちは自分の意見や感情表現に率直な方です。大変ならば誰かによく話をします。たまには、率直すぎて傷付けるときもありますが、深い話ができてもっと深い関係を結ぶときもあります。

韓国に帰って日本人先生に聞いたら島国であるため、周りの人たちと良い関係を結ぶことが重要であるために生じた文化だと教えてくれました。そして日本人は言葉には魂があると考えているために言葉を注意すると言いました。これが文化差だと感じて、それぞれの長短があるのだろうと感じました。

## 2.2 私の学び

日本人たちの真面目さと人に迷惑をかけないようにする行動として、配慮しようとする姿を学ばなければならないと思いました。しかし、日本の学生たちは大変なときも、あまり表現をしないから先に私たちが気づいて配慮をするのが必要だろうと思いました。それで私が先に席を譲ったり、体調は大丈夫なのかと聞いたり、言葉にもう少し気をつけるようになりました。

# 日本に来て気付いたこと

申秀珍

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

毎週月曜日に会議を通じての意見交換、LINEを通じての意見交換など無数の意見交換を通じて発表主題を選び、お互い資料を調べFacebookにアップロード。この課程を繰り返しながら主題と合う資料を選び、その資料についてさらなる意見のやり取りをしました。そして迎えた出会い。代々木で三日、草津で四日のセミナーが始まりました。代々木では私たちの発表の主題に合う映画『箱入りの息子の愛』を見に行きました。映画を見た後食事をしながらお互いの考えを話し合い、その中から私たちの発表主題に合う感想をまとめました。

代々木での日程を終えて草津へ行った私たちは、以前のテレビ会議やラインでの交流とは違って顔を見ながら話し合えたのでたくさんの意見のやり取りができました。たとえば、発表に以前にはなかった芝居を取り入れることができました。

発表準備をしながら私たちは出し物の練習もしました。出し物はラインで話し合った結果、ダンスをすることにしました。日本に来る前にも集まって練習しましたが簡単な振り付けを覚えただけであまり進んでいませんでした。日本に来てダンスを完璧に覚えていた山本さんと吉村さんの助けで皆の練習は進められました。発表準備と出し物の練習をともにするのは大変でしたが、楽しくできました。

### 1.2 私の学び

ずっと日本語を使うことに慣れなかったけれども一緒に生活して分かったのは、日本人は「～にくい」とか「キツイ」と言わないところでした。もちろん、ホストの立場というもののや、私たちの専攻が日本語だって言ってもせいぜい言葉が通じるだけで、その文化やルールまでは正確にわかっていないという点があったかもしれないけれど、いつも私たちのことを気遣って「疲れてない？」と聞いてくれるその優しさが嬉しかったです。その点に関しては本当に学ぶところが多かったです。私は自分が疲れたとか嫌だとすぐ顔に出してしまうタイプなので、どうしてそこまで優しくできるのかと考えました。人間関係でもこういった風に人に優しくすれば円満にできるし、私に対する他人の考えも変わることが分かりました。

また、映画を見る前に空き時間があつたので明治神宮や原宿などへ寄り道をしました。そこで明治神宮について簡単な説明を聞きました。そのとき思ったのは、私は誰かに韓国の宮廷や文化財を説明できるくらいに分かっているのかということでした。結論から言うと「分からない」でした。外国語を専攻していて今よりもっと外国人と話し合う機会が多くなるはずなのに分からないということがちょっと恥ずかしくなり、私も誰かに説明できるくらいに自国のことを勉強しようと思いました。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

旅行で日本に来たときに感じたことと同じですが、今回のセミナーで感じた文化の違いは「とにかく優しくする」ことでした。たとえば自分が知らない何かを聞かれると調べて

でも教えてくれる日本人の優しさなどを今回のセミナーでも感じました。また、草津で名前は知らないけど私が行きたい温泉を調べてくれたり実習のとき皆が行きたいところを調べてくれたりいろいろと親切にしてくれました。それが違いだと思います。韓国人は道を聞かれてその場所や行く方法を知らないときは「知らない」と答えます。聞いた人はまた誰かに聞かなければならない状況になります。

これは少し違うかもしれませんが「ルールを守る」ことも一つの優しさだと思いました。代々木で借りたシーツを「元通りに折って出してください」と聞いたときは「そこまでしなくてもどうせ洗うんじゃない」と思いましたが考えてみると出したシーツを運ぶ人や管理する人に対する優しさだと思いました。韓国は使った状態でそのまま出す場合もあります。元通りとまではいかなくてもちょっとした掃除くらいはすることに比べ、それをきちんと守る姿を見て驚きました。

## 2.2 私の学び

みんなの優しさ見て、好き嫌いがはっきりして嫌いな人にはつついっ優しく行動ができなくなる自分が嫌だと思いました。それで私は自分がもうちょっとだけ優しくすれば私も相手も気持ちよくすごせると思いセミナーの間なるべく笑顔でいようと努力しましたが、それが皆に伝わったのかはさすがに分かりません。

ルールを守るということももう一つの優しさだと言いましたが、私が日本文化に関する本を読んでも日本文化の授業を聞いても「日本人は迷惑かけるのを嫌がる」と紹介されていたので「他人に優しい＝迷惑かけない」ことだと思いました。心の中から他人を思いやる優しさ、それをいつも身に付けていることにとっても感動し、歴史の中の韓国と日本の関係で生まれた日本人の良くない価値観が少しはなくなりました。そしてこれからもこういう機会が多くなりどんどんなくなるといいと思いました。



# 体感した両国

李京恩

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

私は普段から韓国と日本の文化の違いに関心があったのですが、今回のセミナーを通じてその違いにさらに興味を持ち、深く理解することができました。事前学習では日本側とFacebook で互いに話し合ったり、在日韓国人の友達の何人かに両国の恋愛や嫁と姑の葛藤について聞いてみたり、いろいろな番組や本などの資料を調べてみたりしながらいくつかの違いを知ることができました。もともと知っていた事実ではあったのですが、事前学習を通じて日本の方が韓国より個人主義である、そして日本の女性の方が積極的であるということを知ることができました。

### 1.2 私の学び

今回はドラマを通してお互いの文化を比べてみようと思いました。今まで考えたことはなかったのですが、資料を調べているうちに2つ気づいたことがあります。

第一に、日本のドラマの中で嫁と姑の軋轢を描いた作品がほとんどないだけでなく、男主人公の母親がドラマに出て女主人公と悶着があるドラマも韓国に比べると格段に少ないということです。韓国には嫁と姑のドラマはもちろん、そのようなトーク番組までありますが、日本は嫁と姑が出たドラマ自体がとても少なく、なぜだろうとその理由について興味をそそられました。実は、その理由には韓国人の家族主義と日本人の個人主義がありました。日本のドラマで嫁・姑の軋轢があまり出ないのは、実際の日本の姑は「息子は結婚すると嫁と二人で新しい家庭を築くから、その後は干渉しない」と考えているからです。その反面、韓国の姑は「結婚しても私の息子という事実は変わらないから、嫁との関係にまで立ち入ることは当然」と考えています。日本人は結婚した息子に対してあまり立ち入らないことが、韓国人は干渉することが息子への配慮だと考えているようです。

第二に、韓国の女性に比べると日本の女性は恋愛について積極的だということです。韓国の女性は自分から告白することはほとんどありませんが、日本の女性は普通に先に告白する人もいるということを知って、互いにびっくりしました。日本側の質問は「じゃあ、女性から好きになったらどうするの？」でした。この場合、韓国の女性は片思いでも相手に告白させるようにしたり、普通に待ったりします。恋愛に対しては消極的かもしれませんが、実は、韓国には「男は天である」という昔の家父長的家族制度がまだ残っているのです。だから、女性から告白するということが結構大胆だと言われています。延いては、さきほどの嫁と姑の葛藤にも昔のこの考え方と関係があります。「男は天である」上、女性は夫から十分な愛情を与えられず、自分が言いたいことははっきり夫に言うことができず、その不満を満たしてもらいたいという考え方がどんどん息子への執着になり、嫁と軋轢を生じるそうです。しかし、日本は娘より息子が好きという考え方もそれほど強くなく、夫からも見下されるように扱われたこともあまりないので、執着が少ないのかもしれません。このように、恋愛と嫁・姑のバトルは決して別の事柄ではないのです。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

様々な文化の差異の中でも、特に言語行動の違いに気づきました。

まず、韓国人は何でもはっきり言う人が多い反面、日本人はだいたい曖昧な表現を使っていました。自分の意思を直接言わず、相手から分かってくれるのを待っている日本人が多いと感じました。例えば、ひょっとしたら集合時間に間に合わない場合、日本人は「そろそろ集合時間になるんだけど…」と言いました。一方、韓国人は“시간 다 됐어. 나와. (時間よ。早く来て。)”と言いました。同じ状況でもニュアンスや言葉が全く違い、こういうふうには日本人は言葉を最後まで言わず、意見も強くはアピールしないのだと思いました。最も頻繁に使っていたのは、「～はちょっと…」、「～だと思うけど…」、「～かも…」の3つです。一つのエピソードで、日本側の皆と寝る前に喋っていたら一人がすごく眠そうだったので、「〇〇ちゃん、今眠いよね？」と聞いたら「うん…眠いかも…」と答えました。あまり大した違いではないかと思われるかもしれませんが、よく考えてみるとこの状況で“음... 졸릴지도...”と答える韓国人はほとんどいないと思い、大きな違いを感じました。韓国人だったらきっと「眠い」と答えたのではないのでしょうか。

次に違いを感じたのはあいづちです。日本人があいづちをよくするというのはもちろん既知のことでしたので、これまであまり気にしたことはなかったのですが、今回のセミナーを通じ、相対して会話をしたいときあいづちは必須だと実感しました。私がグループの日本側の皆によく言われていた言葉は、「そうそう」、「そうなんだ」、「そうだね」、「すごい」、「〇〇ちゃんは?」、「うん」などでした。私が一言だけ発した際も必ず「えーそうなんだ! すごいー」とあいづちしてもらえて、すごく嬉しかったです。また、「〇〇ちゃんは?」というのはいづちに思われなくてもいいかもしれませんが、これも日本人の心遣いです。自分だけ話すのではなく、相手の話を聞いて共感したり質問したりすることもよくありました。これに関して、前から気になった「ノリツッコミ」という、テレビでよく出ているお笑いがありあまり理解できなくて日本側に聞いてみたところ、「正確には知らないけれど、自分が思うには日本人ってあいづちを習慣的にしているから、まずはあまり疑いも持たずに自然と『うんうん』って答えて、後で考えてみるとおかしいことに気づくことから始まったのではないかな」という面白い答えがありました。

最後は、日本人はよく受身を使っているということを知りました。セミナーに参加する前から私が気になっていたのは、「～と言われた」という言い回しでした。この言葉を韓国語に直訳したらすごく不自然だから、普通に「～と聞いた」でも大丈夫なはずなのになぜわざと受身を使うのかと不思議だったのです。でもよく考えてみると、誰かに言われた言葉を「～と聞いた」という日本人はあまりいません。そして2つの言葉は少し意味やニュアンスが違ふと思いました。日本側にも「韓国語で受身ってあまりないの?」と言われて、皆で普段使っている受身表現について考えてみたのですが、「蚊にさされる」、「足を踏まれる」、「雨に降られる」などは言うかもしれませんが、「母に起こされる」、「子どもに泣かれる」は絶対言わないと答えました。そしたら「じゃあ、泣かれるは韓国語で何ていうの?」と言われたのですが、正解は韓国語にはありません。もしそのニュアンスを伝えたいなら、普通に「子どもが泣いて困った」となります。こういう違いが面白い反面、すごく難しいと感じました。

### 2.2 私の学び

このセミナーを通して互いの言語行動の違いを知ることになり、日本人っぽく会話する術も学習できたので、とてもありがたくていい機会でした。実は、その術は前述した3つとも関連があります。

まず、自分の意見をはっきり言うのは日本人に対してはむしろ失礼になるかもしれません。他人に気配ることに慣れた日本人と会話するときは、自分の意見を控えめにするのもいいかもしれません。

次に、あいづちは円滑な日本語会話をするためには一番大事です。日本人の多くの方はリアクションが大きいので、普段他人の話を黙って聞く外国人でも日本人と会話するときには、あいづちと大きいリアクションをした方がいいでしょう。それによって、相手の日本人は楽に落ち着いて話せると思います。

最後に、受身も同様に慣れてないかもしれませんが、上で示した 2 点とは少し違った意味で勉強が必要です。あいづちや気配りは意識すれば、身につけることは比較的簡単だと思います。しかし、日本語の受身は韓国語に訳すと文法的に正しくない表現も多いので、知識がないと意識して頑張っても表現を間違ってしまう可能性があります。ゆえに、注意してしっかり勉強しなければなりません。

# ギャップを通じて学ぶ

姜秀珍

## 1. グループ活動報告と学び

### 1.1 活動内容

韓国で遠隔交流によってセミナーを進めていた頃、韓国の学生たちと細部テーマを決める過程でドラマのような映像媒体を通じて各国の文化を比較しようとした。様々な映像媒体の中でグループのメンバーに親しまれているドラマを中心に韓日文化に関連のある小テーマについて意見を交換した。会議を進める中、韓国ドラマを見た外国人が事実と実際の韓国文化に誤解しているという意見があった。例えば『冬のソナタ』のペ・ヨンジュンのように過度に優しい韓国の男性の姿と極端に描写されるドラマの嫁姑の葛藤などがあった。特に、日本人のグループメンバーと情報共有を通じて嫁姑間の葛藤は日本ドラマで描かれる可能性が低いことを知ることができた。このような嫁姑の葛藤を扱う韓国と日本ドラマの違いを通じて両国の家族文化を分析することができると考えられた。このような原因は、韓日に共通して現れるものもあるだろうが、韓国だけの慣習によって現れるものと韓国人にとっては新しい日本だけの家族文化、慣習をよく表すことができると考えた。そして、日本の家族文化を通じて韓国の嫁姑の葛藤の解決策を得ようとした。また、日本グループメンバーと情報共有をするうち日本ドラマではママボーイ（マザコン）を家族文化の一部分と扱うことにした。これを通じて、現実と違って嫁姑の葛藤が過度に描写されている韓国ドラマに対する誤解を解決できると思った。このテーマで、韓国ドラマで嫁姑の葛藤が頻繁に登場する原因と日本のドラマでは取り扱われる比較的頻度が低い原因を調べようとした。

「嫁姑の葛藤」が韓国のドラマをよく示しているテーマなら、日本のドラマをよく示すのは「草食男子」だった。日本ドラマに登場する「草食男子」と「干物女」などは日本のドラマに端を発し、韓国ドラマにも登場し、実際韓国人たちにも使用する新造語となった。ちょうど日本で草食男子が登場する映画が上映中だったため、観覧を通じて草食系男子をよりよく理解することができると考えた。映画やドラマで簡単に接することができる「草食男子」と「干物女」は日本だけでなく、韓国の新しいカテゴリーとしてもよく示している。こうした新カテゴリーは両国のドラマでロマンスのキャラクターとして登場するが、現実では、近年の経済不況と関連して説明できるといった。単純にドラマで登場する新しいタイプに対する興味を持つようになったという現象についてのみならず、こうした若い世代の姿が見られるようになった原因を説明しようとした。また韓国のドラマには日本のドラマの「草食男子」と対照される「肉食男子」が主に登場する違いを見つけた。韓国と日本のドラマの男性像が異なって表される理由について調べた。

### 1.2 私の学び

セミナーを通じて、従来考えられなかった原因を見つけることができた。嫁と姑の折り合いについては家族文化の違いから始まった場合もある。しかし、私たちは日本と韓国がドラマの放映構造の違いから生じるという点を発見した。韓国ドラマは日本ドラマに比べてドラマの放映回数と時間が長い点、主人公の周辺人物との関係を扱うことが容易にできた。しかし、日本ドラマの場合、ドラマの間に流れるCMによって展開の流れが切れること、韓国のドラマより放映回数が短い点、放送時間が短い点などによって主人公中心に

ドラマが進行されるようになる構造上の制限があった。

草食系男子に対する調査を通じて自発的か受動的な2つの類型が発見された。この2つの類型はどちらも社会的背景が原因となっている。長期化された景気低迷で韓国と日本の若い世代などは時代に合わせて変化しているということであった。ただし、こうした新しい私意タイプの人間が時代に適応するよりは過剰な責任を回避するための方法であるとみうけられた。また、韓国人男性の肉食性を比較しつつ、現実の男性像と肉食系男子キャラクターが頻繁に現れる原因について考えてみたのだ。これについて私たちは日本の男性と韓国の男性の最も著しい違いである「軍隊」について焦点を合わせて説明することになった。韓国の男性は軍隊で家族を、国を守らなければならないことを目的に2年間訓練を受ける。このような過程を通じて韓国の男性たちは「男なら女性を守らなければならない」と強要されることになる。したがって、ドラマに登場する肉食男子の姿は戦争後、社会が要求する韓国男性の姿が反映されたものだ。この部分について発表準備を進め、韓国軍隊の姿を説明するため、日本人グループのメンバーに韓国の芸能番組を紹介した。韓国女性たちが見ても軍隊は難しく大変なところだが、日本の学生たちが「虐待」と描写するほどさらに苛酷に映し出された。このような過程の有無によって、社会で要求される男性像の変化が生じたようである。

## 2. 日韓の文化の違いと学び

### 2.1 日韓の文化の違い

遠隔交流をしていたときは、日本の学生たちと大きな文化の違いは感じられなかった。しかし、日本でセミナーをしながら興味深い文化の違いを経験することができた。「人に迷惑をかけようとするな」日本人の特徴から始まる責任感を目にするのできる良い機会だった。実は以前韓国人にも「人に迷惑を及ぼそうとするな」姿勢を持っている人がいるために文化の違いを大きく感じないだろうと思っていた。しかし、日本の学生たちとセミナーを通じて生活してみた結果、些細な習慣から韓国人とは他の責任感を感じることができた。おそらく、このような日本人特有の責任感は小学校から強調され、教育に起因するものとみられる。韓国では責任感を育むような教育を行わないため、韓国人が日本人のような責任感を持つことは容易でないものとみられる。

また、日本の学生たちと対話を交わしながら、自分たちの学校に対する高いプライドを感じる事ができた。これは韓国と日本の他の大学入試制度で始まったものと思われる。韓国の学生の場合、志望する学校に志願する場合もあるが、ほとんどの生徒は修学能力試験を通して点数に合った学校、学科を決定する。そのために自分の前で勉強する大学や学科に対する考えが浅いのが事実だ。しかし、日本の大学入試の場合、自分が志望する大学に向けた受験勉強を行うことで、進学しようとする大学と学科に対する理解が高い状態と考えられる。これがお茶の水大学の学生たちに自分たちの学校に対する高いプライドを感じさせた原因なのかもしれない。

### 2.2 私の学び

日本の学生たちの責任感が韓国の学生らに影響を与えた。外国語で進行されるセミナーに困難を感じたのは事実だが、日本の学生たちのセミナーに対する責任感と真剣さに触発され、もっと使命感を持ってセミナーに取り組めた。日本の学生たちの姿勢が韓国の学生たちにも相乗効果で9泊10日を意味のある旅にすることができた。韓国に帰ってからも日本の学生たちの責任感は私にとって新鮮なカルチャーギャップだった。日本の学生たちと生活を通じて文化の違いを感じるようになった。日本人に特徴的な事例を経験して彼らの長所を学ぶことができた大切な機会だったと思う。たとえ韓国と日本が歴史によって外交

関係が悪化しても、韓国人が日本人に学ぶ点まで無視してはならないと思った。実はセミナーに参加する前、留学生や外国の学生との交流に対して消極的だった。これを通じて学ぶことができることは多くないだろうと思ったからだ。しかし、今回のセミナーを通じて日本の文化を経験して違いについて学びながら他の国の文化を知っていくことに対する重要性を悟ることができた。残った大学生の期間、国外のいろいろな学生達と交流しながら、他文化に対する理解を高め、新しいものを学びたい。



## 第9回 日韓セミナーを終えて —もやもや感の先にあるもの

松野志歩（お茶の水女子大学 大学院生）

今年のセミナーが始まる前、前回や前々回の報告書を読みながら、わたしの期待と疑問は、どんどん膨らんでいました。

日本でのセミナー開催は、震災をはさんで3年ぶりです。3年前に参加した学生によると、その頃の連絡手段は、Eメールだけだったそうです。今年は去年と比べても、FaceBook やLINE、カカオトークなどのSNSでやりとりするグループも増え、事前交流の方法が多様化してきました。また、セミナー自体も、今回初めて日本の学生も7日間寝食を共にしたり、歓送迎会や文化体験、研究発表会などの運営を学生たちに任せたり、と学生主体が強まったので、SubのTAとして参加させてもらう身としては、楽で楽しみばかり多い準備期間でした。おそらく3年前とも、韓国で開催された去年とも全く違ったセミナーができあがるのだろう。その中で自分が何か役に立てるのかという不安も覚えつつ、7月25日を迎えました。

初日、代々木オリンピックセンターで韓国のみんなを迎えた場面が強く印象に残っています。バスから降りたみんなの顔は、TV会議で見慣れた顔で、けど動いているのが何だか不思議で、芸能人に会って話しかけるような気持ちになりました。その時、今までにない、新しいスタイルの交流が始まった、と思いました。

1週間にわたって話し合われた各グループのテーマ、「共生」「文化」「報道」「教育」「歴史」は、どれも多くの人が生涯をかけて取り組んでいる問題だと思います。それらの重大なテーマに、真っ向から挑んで短期間に答えを出そうとしているみんなの姿に、尊敬の気持ちを感じました。おそらくみんなの中に、大小さまざまな、もやもやした感じが残ったのではないのでしょうか。それでも、臆せず疑問点や課題を共有し、外国語でもやもやを表現しようとする努力に、我が身を反省しました。

実は、みんなの準備を見ながら、発表を聞きながら、忘れていた大学の学部生時のほろ苦い思い出が、たくさんよみがえってきました。例えば、国際交流サークルに入りながら、いつも日本人ばかりと遊んでいた日々。大学3・4年時のゼミ合宿で、いろいろな人に話を聞くほどに頭が混乱し、最終日にはぼろぼろになっていた記憶。これら学部時代に味わったもやもやは、10年以上経った今でもすっきり解決はできていません。でも、その時の気持ちや友人たちは、わたしの中の核になっているような気がします。

もしかしたら、日本と韓国の関係も、そのようなものかもしれません。お互いに知れば知るほど、分からないことも増していきませんが、もやもやをお互いに共有することが大事だと思います。両国の間には、知らないということや、こうしたもやもやを感じないこと自体が恥ずかしい事実が存在するのではないのでしょうか。わたしたちはまず、両国間と自分の中にあるもやもやを認め、それに溺れてしまわないように、でもずっと忘れないで考え続ける必要があると、セミナーを通して強く感じました。

この報告書を書きながらまた、もやもやした気持ちがよみがえってきています。ネット環境が整えられず、皆さんの交流と発表準備に迷惑をかけてしまったことや、もう少しTAとしてできたことがあったのではないかと、など。もろもろいたらなくて申し訳なかったです。でも、わたし自身はとても楽しませてもらいました。あとはもうしばらく、この



もやもやと向き合いたいと思います。

最後になりますが、このセミナーに参加する貴重な機会を与えてくださった森山先生、いつも学生に的確なアドバイスをしていた 2 人の金先生、笑顔で同じハングルを何度も教えてくれたTAのナレさん。セミナー開催とこの報告書作りのために何か月にもわたりご尽力いただいている両大学のスタッフのみなさん。そしてなによりも、オリンピック選手のように感動を与えてくれた日韓の 1 人 1 人の学生たちに、感謝したいと思います。参加できて幸せでした。ありがとうございました。

## 学生間の交流から見える日韓の新たな関係構築の可能性

チヨナレ（お茶の水女子大学 大学院生）

変化が激しく、問題が国境を超えて同時多発的に起こる現代社会において、機敏な問題解決能力のために要求される頭の良さとは「曖昧さに耐えられる能力」だという。答えがはっきりしない状況で、安易に答えを出そうとせず様々な可能性を考えられる能力、今回のセミナーを通して得られた成果の一つとして、このような能力を育む機会を提供したことを挙げられるのではないだろうか。

韓国と日本は「近くて遠い国」という言葉が表しているように、あらゆるレベルで交流が活発に行われている一方、昔から対立が絶えない国同士である。首脳会談の決裂、ヘイトスピーチなど問題は今も様々な形で頻繁に起きているが、問題の本質が複雑で多面的であるため、その解決は簡単ではない。そのような状況の中での個人間の交流は、社会の雰囲気と矛盾し、個人の気持ちに混乱を感じさせる可能性がある。実際、このような葛藤は自分が韓国人というアイデンティティーを持って日本で生活しながら時々ぶつかる問題でもあるため、期待半分・不安半分でこのセミナーを迎えた。

7日間にわたり皆が行動を共にしながら考え、向き合ったテーマはどれも正解がなく深い考察が必要な問題である。そのような問題と向き合うと同時に新しい友人関係を作るという濃い時間の中で学生の皆は頭も心もフル稼働して取り組んでいた。合宿中のプログラムの運営の多くも学生が担当していたため、充実している分、負担も大きかったと思う。

しかし、合宿中の皆の姿は私の心配を見事に裏切ってくれた。一つの共同目標を設定して、それぞれの持っている知識を共有し力を合わせてタスクを遂行していくうちに、みんなすっかり仲間になっていて、最後の日には泣きながら別れを惜しんでいた。グループ別の発表を準備する際にも、自分の意見や立場だけを主張することなく、情報収集の際にも偏った情報に振り回されることなく、グループの皆で十分に考え、自分たちなりの納得のいく結論を出すために頑張る姿から大きく感銘を受けた。今回の合宿及び発表会は日本で、日本語で行われた点で、韓国側の学生にハンディキャップがあったといえるが、お互いにわかりやすい言葉で言い直したり、英語を使ったりして、話し合いの内容においては対等な立場を保とうとしていたのも印象深かった。

取り組んだ課題の明確な答えを探すことは難しかったと思うが、一緒に考える時間を通して大切な仲間を得た学生たちの顔はキラキラと輝いていた。この時代の生き方をこの子たちは掴みかけているのかもしれない。そう思った瞬間に、今まで自分にはこのような機会があまりなかったことに気づき、学生たちに一種の嫉妬心さえ覚えた。

個人のアイデンティティーは国家と密接に関係しており、それなしに説明することは難しい。しかし、国家の価値観と自分を同一視しては個人間の交流は発展しない。国家の価値観の対立に起因する問題を、協働して解決すべきものとして認識し、同等の立場で話し合うといった成熟した関係の一端を、このセミナーから窺えた気がする。

# 日韓一相互理解のための文化意識における基礎知識

## 一文化相対主義の次の段階へ

金囁泳（同徳女子大学校）

日本と韓国は長い歴史を通じて対立と反目を続けてきました。両国の間にはかつての文禄・慶長の役、また現代の二次世界大戦など、大きな戦争が何度もあって、今まで協力と競争、また侵略と非侵略を繰り返してきた両国の間には他のどの国々よりも深い溝が存在しています。近來にはワールドカップを共同開催したり日本で韓流が流行したりするなど、日本と韓国は一時でありながらも相互理解と協力が深まるようでありました。しかし、最近の両国の関係をみると、未だに真の相互理解と同伴者的意識の定着は未だに程遠いような気がします。このような現実の中で今回のセミナーに日本と韓国の学生たちと参加した私には次のような一連の疑問が思い浮かびました。

日本と韓国は相互理解することが出来るのか。

そして、私たちは相互理解を本当に願っているのか。

また、それを本当に願うのであれば私たちはこれから何をどうすべきなのか。

私は以上の問いに対して結論から先に言うと、「根本的に人間を全ての思考の中心において考えること」だと思います。皆が認めるころだと思うが、どのような価値も人間が人間らしく生きる権利以前に存在しません。つまり、全ての人間は生まれ育った文化の中で疎外されず、また差別されず平和で自由に暮らす権利を持っていますし、それはどの価値よりも優先されることであります。もちろん現実には国家や民族など、私達が属している共同体のためのより大きくて偉大に見える大儀を何より優先し、大事であると信じている人々もたくさんいると思います。そして私もそのような大儀の為に生きることも意味があることで、価値のあることであると思います。それは、そのような努力が国など私たちの共同体をより大きくて強く成長してくれましたし、他の共同体から私たちの命と財産を守ってくれたのも事実であるからであります。しかし私は、究極的な話ではあるが、国民のような一般の共同体の構成員が幸せではない或いは不当で一方的な犠牲を強いられる国家と民族のような共同体にどのような価値を置くべきであるのかという疑問を持っているのであります。個人の犠牲を基盤としたある共同体の繁栄が果たしてどこまで有効であるのでしょうか。人間を中心においていない共同体意識は、極端には人間を戦争の駒のような消耗品に転落させてしまう危険を抱えています。いつか何かの大きい大義のために我々は共同体のために自らの意思に反する犠牲を強要される可能性が常に存在しているからであります。もちろん、先に述べたように、共同体のためにある程度の個人の犠牲は必要ではありますし、それを通じてお互いの權益を向上させようとする姿勢と努力も尊重すべきでありますし、とても意味のあることだと思います。しかし、構成員の生命と尊厳を脅かしながら、必要のない領土紛争などの消耗的で意味のない戦いに共同体が加わることは断じて許されないことだと思います。それは言うまでもなく何より人間の生命と尊厳が大切だからであります。

一方、以上のような共同体の内部における人間中心的思考は、共同体と共同体、つまり特定の文化圏の間或は国家間の問題に拡大させることも可能であります。他の共同体の権

益を阻害するまでして自分が属している共同体の繁栄だけを得ようとする帝国主義的発想の危険性は、かつて二回に渡って起きた世界大戦の惨状から十分に確認できましたし、我々は現在にも頻繁に起こっている数多くの局地戦と紛争の中でもその残酷な結果を簡単に目撃することができます。ここで私は、私達全ての人間は自分が生まれ育った特定の共同体が享有する文化の中で幸せに暮らす権利を持っていますが、それは他の文化或は他の共同体の人間の犠牲と涙を踏み台にしてはいけないという前提を言っておきたいのであります。誰もが自分が願ってない原理や方法、そして目的によって自分の生活様式、つまり文化を強要されてはいけませんし、文化はそれを享有する人自らの決定によって存在しなければなりません。例えば、日本人の文化は日本人のものでありまして、他のどの文化の比較対象になれませんし、また他の文化を持って振り返られない存在でありますので、それ自体でその存在の意味や意義は完結性を持っていると思います。ちなみに、ここで日本人というものは、人種的・血統的・地理的次元による定義ではなく、構成員自らの判断に基盤する定義である点を言っておきたいです。従って私たちは、お互い異なる文化を持つ他の共同体を尊重する必要があるのであります。全ての人間は自分の文化を享有し、発展及び継承させていく権利を持っていますし、他の文化の犠牲によって成立するものでもなく、優劣判断などの対象になる理由もまたどこにもありません。つまり、「文化相対主義的」な観点から異文化との関係を規定する必要がありますし、それは人間がその文化の中心にあるという考え方から起因するものであります。

しかし上記のような文化相対主義には見落としやすいもう一つの大事な前提があります。それは他ではなく「人類普遍的な価値」、つまり人間中心の思考という次元から文化を見なくてはならないということでもあります。それは、あらゆる文化が尊重されなければならないことには間違いありませんが、その全ての文化の全ての点が絶対的に正しいとは限らないということでもあります。なぜならば、人間が生まれ育った環境で自然に自分の言語を使用して生活するに際して幸せになる権利、それは文化自体から由来するものではなく「人間中心の思考・人類普遍的な思考」から生まれるものであるからであります。従って、特定の共同体の文化の存続と保存の以前により大事な点は、その文化の中で我々が思う人類普遍的な価値が尊重されることが出来るのかという点である。どの文化に属しているにせよどの文化を自分の文化として認識するにせよ、その人間が自由かつ幸せでなければならないことが何より大事な点であることは全ての共同体の文化を貫く共通の原理であると思います。

まとめると、私達は人類普遍的な価値観を基盤とした人間中心の思考を持って自分の文化を自ら享有して発展また継承しなければなりません。その時に前提になるものは同じ共同体の構成員或いは他の共同体の構成員の犠牲と涙を踏み台にしてはいけないという考え方でありましょう。よって日本と韓国、韓国と日本は、お互いの文化その中でも人類普遍的な価値観に相応しい文化を尊重すべきでありますし、それは絶えない交流と理解のための努力を通じて可能になると思われまます。そしてそのような努力はそれぞれの構成員の無意味な犠牲を食い止め、人々に人間としての真の尊厳を与えてくれると思われまます。もちろん、今の現実を考えると簡単ではない道のりであり、難しいことであることは誰もが知っていることだと思われまます。しかし、だからこそ今日本と韓国がお互い理解しあうために努力しなければならない時期でありますし、かつてないほど切実にお互いの協力が必要とされる時であると言えますでしょう。そして、その鍵は誰でもなく私達の世代が握っていることを忘れてはいけないと思われまます。

P. S. 私が同徳女子大学の学生を引率して日韓大学生国際交流セミナーに参加したのは今年が最初のことであります。よって経験もない上に不備な点が多く、韓国の学生たちの

みならず、日本の学生たちにもあまり良いアドバイス・支援などを与えることが出来なかったと思って本当に申し訳なく思っています。しかし、私は今回のセミナーを熱情的に準備して、またお互いの心を分かり合えようと頑張る日本と韓国の学生たちの姿を見て多くの感銘を受けましたし、このような心をこれからも多くの学生に伝えていきたいなあと思うようになりました。短い時間でありましたけれども、今回のセミナーは大切な思い出と経験として韓国の学生たちに残ると思います。この場を借りて、森山先生とチョ・ナレさんと松野さん、日本の学生の皆さん、そして韓国の学生の皆さんに感謝の言葉を伝えたいと思います。本当にありがとうございました。そしてお疲れ様です。

## 居場所を共有した中での主体的な対話と協働

森山新（お茶の水女子大学）

第9回を迎える今回のセミナーで大きく進展をしたのは以下の2点であった。

第一にセミナーの全期間で合宿を行い、対話と協働の場を確保したことである。講演でも述べたように、本セミナーは過去と国境の壁を越えられずにいる東アジアの、とりわけ日韓の学生が、日韓と東アジアの共生を実現するための道を模索することを目指している。そのために前回からTV会議システムを導入し、毎週のように遠隔の事前交流を続けてきた。今回はそれに加え、セミナーの全期間、日韓の学生が寝食をともにすることで、共生のための対話と協働の場を確保した。韓国での開催では前半はホームステイ、後半は研修所での合宿を行ってきたが、日本での開催の場合には、前半は韓国側の学生が大山寮に宿泊しており、前半の交流が十分とは言えなかった。それで今回は大山寮をやめ、代々木オリンピックセンターに日韓の学生が寝泊りすることで、セミナー実施期間すべてで合宿による親密な交流を可能にした。

第二にセミナー運営の多くを学生にゆだねたことである。それにより、学生の姿勢が受身にならず、自らが築き上げるという意識を高めた。前回の韓国でのセミナーでは韓国側の学生の主体的で熱いおもてなしに日本側の学生すべてが大いに感激したが、今回は日本側で、学生が先頭に立ち、学生がアイデアを出し合って企画した。5つのグループは、それぞれ、報道グループが歓迎会（25日）、文化グループが講演会（26日）と研究発表会（29日）、教育グループが日韓文化体験（26日）、歴史グループが草津・白根山観光（30日、31日）、共生グループが送別会（30日、8月3日）をそれぞれ担当したが、どれも学生たちが学生らしいアイデアを持ち寄って企画、運営した。

最終日、東京に着いた我々は、ひそかに準備した寄せ書きノートを韓国側の学生に手渡すと、韓国側の学生は涙で喜びと別れの悲しみを表現、それに日本側のメンバーももらい泣きする結果となった。学生にゆだねることはある意味不安もあり、失敗も覚悟しなければならぬが、最終日のその光景は、学生に運営を委ねてよかったとの思いを抱かせてくれた。また学生たちが国を越えて一つのゴールを目指して協働する経験は、今後グローバル時代を生きる彼女たちに大きな経験となったし、国や政治が超えられずにいる国境の壁を私たちは越えることができるということを確認できたに違いない。

もちろん1学期間の遠隔交流と、1週間の合宿でできることは限られている。しかし今回の経験は、これからグローバルな心を持ちながら、日韓を、東アジアを、そして世界をまとめる力と自信を、彼女たちにあたえてくれたと信じている。

今回の経験が今後、フェイスブックや交換留学という形に変えて、継続、発展していくことを願ってやまない。

## 【グループ研究】

### 1. 報道グループ

## 報道

## アウトライン

- 動機と目的
- 調査
  - 調査結果
  - テレビ
  - 新聞
  - インタビュー調査
  - 調査の考察
- 日韓問題の報道～靖国神社を例に～
  - 歴史
  - 行く前のイメージ
  - グループ実習の報告
  - ディスカッション結果
  - 靖国神社をどのような報道をすべきか
- 日韓問題報道の考察～今後の日韓報道のあり方～
- 参考文献

## 動機と目的

- ◆ 動機
  - ◆ 韓日間でも最近では社会文化の交流が増している。
  - ◆ しかし、韓国と日本のように加害者と被害者であった国は、接触の頻度の高さにも関わらずなお誤解が深くなり、偏見が固定化されるのではないか？
  - ◆ これに対し韓日の報道の特徴と違いを比較してどのような影響を与えているのか調査しようとした。
- ◆ 目的
  - ◆ 受信者が一つの事実を曲げないように正しく受け取ることができる。
  - ◆ その事実に対して様々な角度からの意見を知り、偏見なく自分の意見や考えを持つことができる。  
→そのような報道のためにはどうすればよいか？

2013年5月13日

アメリカの軍司令官に対して・・・



戦時中は、慰安婦がいた。  
慰安婦は必要だった。  
現代では風俗を活用してほしい。

5月13日、日本の政治家、橋下徹氏が「慰安婦」に関する発言をした。日本と韓国でどのような報道をしたか、この問題についてのTVと新聞の調査をし、比較することで、日韓問題の報道の差や特徴を考えた。

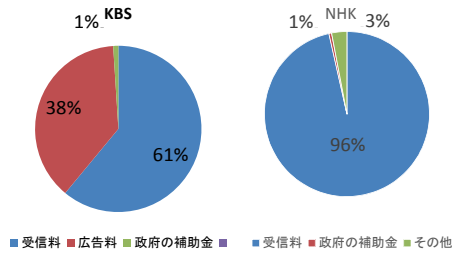
## ○テレビ局に見られる二カ国の違い○



## ○歴史的背景○

KBS		NHK
1927年 京城放送局として民間により設立	設立	1926年 社団法人として国家により設立
1961年 大韓放送局が放送権利を政府に委譲 1980年 全斗煥元大統領により言論統廃合が実施され、TBS・DBSなどを強制的に統合	変革	1950年 放送法により特殊法人となる 1951年 民間放送局が初めて設立
1961年 受信料制度開始 はじめは自ら徴収 1994年 韓国電力の電気料金に上乗せして徴収	受信料	1950年 受信料制度開始 2008年 訪問集金廃止

### ○予算○



### ○他の民放との違い○

組織の経営に関して、

- ・経営委員会は12人、そのうちの5人は与党が推薦
- ・社長選出は経営委員会の2/3以上の同意が必要

KBSがNHKや他の国の国営の放送局の仕組みを見習った

**目的**

<p><b>KBS</b></p> <p>人権と所有権の政治的独立を保障</p>	<p><b>NHK</b></p> <p>公安および善良な風俗を害しない政治的に事実をまげた報道をしない意見が対立する問題は多くの角度から論点を明らかにする</p>
--	--

### KBS newsにおける報道

日	月	火	水	木	金	土
	13日	14日	15日	16日	17日	18日
	7	11	7	9	2	8
19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日
4	14	11	17	22	13	7
26日	27日	28日	29日	30日	31日	
13	9					

※下段数字はニュースにおける順番

13日～27日までの15日間にわたり報道された

### KBSニュースの言論報道の特徴



5月13日の字幕をみると、「進撃の日本」などと視聴者の関心を惹きつけるような刺激的な字幕を使用

### KBSニュースの言論報道の特徴



5月20日  
アナウンサー:「日本政府の妄言、一体どこが果てなのか分かりません。」  
字幕:「これが日本！」  
→一人(橋下)の発言がまるで日本全体を代表しているかのように報道

### KBSニュースの言論報道の特徴



5月20日  
デスク分析をしたが、時間的問題により、背景説明など細かい分析はなかなか難しかった



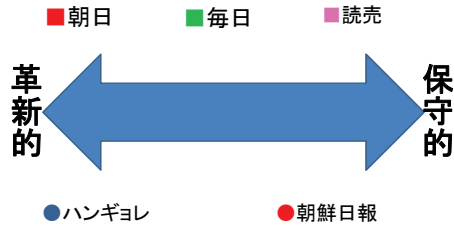
## KBSニュースの言論報道の特徴

- 刺激的で、過剰な表現 → 刺激的な字幕使用
- 韓国について好意的な人がいるにも関わらず、一人（橋下）の発言がまるで日本全体を代表しているかのように報道
- 時間的問題により、背景説明など細かい分析はなかなか難しい  
 → このような報道により否定的な印象になってしまう傾向がある
- でも、過去より日本問題に関する報道の態度は客観的になりつつある

## 日韓の報道の差



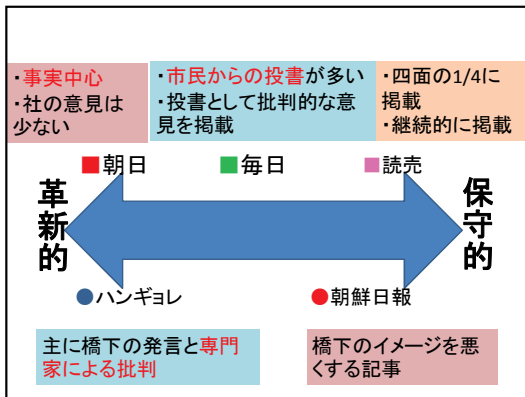
## 新聞について



	日数	ページ数
朝鮮日報	9	11
ハンギョレ	7	10

	日数	ページ数
毎日 朝刊	16	32
毎日 夕刊	3	4
朝日新聞	10	14
読売新聞	8	8


朝鮮日報	すべて国際面
ハンギョレ	特に特徴はない
毎日新聞	1面: 8日 2面: 7日 3面: 1日 5面: 7日 9面: 1日 10面: 2日 23面: 1日 27面: 3日
朝日新聞	1面: 6日 2面: 1日 4面: 2日 38面、39面、政治面、社会面: それ
読売新聞	4面(政治面): 8日



◇共通点  
TVよりも新聞のほうが思想に傾いた報道をする。  
新聞会社によってページの数異なる

◇差異点  
日本・・・事実が多い  
韓国・・・意見が多い

## インタビュー調査結果



同徳女子大学  
ホン・ウォンシク教授

報道機関に就職後  
大学教授として大学で教えている

質問内容

- 1 KBSによる報道は繰り返し、刺激的な字幕や慰安婦の映像を流していますが、歴史観や価値観に影響を与えているか？
- 2 韓国での橋下発言の報道は報道の機能をよく活用したと思うか？
- 3 これから韓国の言論が日本のことを報道するとき、正しい方法はなんだと思いますか？

ホン・ウォンシク教授からの回答のまとめ

韓国の橋下発言の問題点

- ・発言がまちがっていると報道しているが根拠ははっきりと報道していない
- ・一部分が拡大されて報道されている
- ・韓国報道の特徴である言論報道がされている

報道はどうしたらいいのか

- ・一部分をピックアップせず多様な面を扱うこと
- ・ジャーナリズムの基本である事実報道をすること

## TV、新聞報道のまとめと考察

一つの事件の取り扱い方が、  
国家間ではもちろん、国内でも大きく違う。

個人が情報を見極める能力を備えるとともに  
新しい報道の方法を探る必要があるのではないかな。

よい報道の実現のために、  
日韓の不仲のシンボル  
**靖国神社**の報道を話し合ってみました。

## 靖国神社とは？

・明治天皇により建てられる。

- ①日本のために死んだ人々を供養する
- ②日本のために死んだ人を英雄として後世に残す。

外国との戦争のみではなく、  
国内の戦争の戦死者も供養する。

## なぜ問題となるのか

### 靖国神社に参拝すること

- ⇒日本のために死んだ人の冥福を祈る
- ⇒戦前の日本を肯定する行為
- ⇒日本の帝国主義の被害を受けた中国・韓国は批判

東アジアで協力することが求められる現在、  
首相の靖国神社参拝は認められてもいいのか？



## 靖国神社の印象は？

### ネガティブなイメージ 怖い 悪いところ

しかし、靖国神社には何があるか分からない・・・

- ⇒メディアで否定的な報道
- ◇三月一日に小泉総理大臣が参拝した  
→過激な報道、感情的な批判内容
- ◇政治家168人が靖国に参拝  
→日本への嫌悪感を抱かせるような報道



## 靖国神社の印象は？

- ・祭りでしか行ったことがない。
- ⇒過激な言葉を見かけた
- ・右翼団体が多い、危険な場所。
- ・靖国神社の歴史を説明できない。



実際訪れてみました



## 訪問してみようだった？

- ・訪問中も始終怖かった。
- ・外国人も多く意外に観光地だった。
- ・ほかの神社に行ったことがないから比較できずわからない。
- ・靖国に来る人はみんな右翼だと考えていたが、イメージが変わった。



## 訪問してみてもうだった？

- 普通の神社と変わらなかった。
- 行く機会がなかっただけ。
- 外国人が多かったことに驚いた。



## 靖国神社を正しく報道するためには どんな報道をすべき？

- 日韓
  - 歴史的事実について
  - 若者の意見を伝える
    - ディスカッション (discussion)
    - ドキュメンタリー (documentary)
- 韓国 (批判的報道が多い)
  - ディスカッション番組での議題にする
  - 他の神社に関する知識
- 日本 (事実中心)
  - 正直な論評、意見を入れた報道

## 日韓問題はどのような報道が 良いのだろうか？

- 日本: 事実中心の報道だから・・・
  - 論評や意見を増やす
- 韓国: 批判報道が多いから・・・
  - 刺激的な言葉や表現、写真は減らす
- 日本も韓国も・・・
  - 歴史的事実を増やす
  - いろいろな見方ができる報道にする

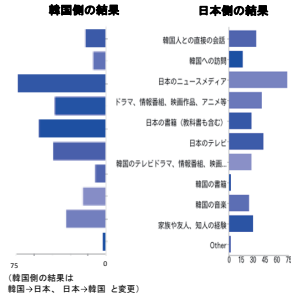
ご清聴ありがとうございました。  
들어주셔서 감사합니다.

## 参考文献

- NHK <http://www.nhk.or.jp/>
- KBS <http://www.kbsworld.ne.jp/>
- 朝日新聞
- 毎日新聞
- 読売新聞
- NAVERまとめ (韓国)
- Wikipedia
- 한국문제와 한국언론의 보도태도에 관한 연구 (論文)
- 언론보도를 통해서 본 한일 커뮤니케이션의 갭 (論文)



## 相手国に関する情報をどこから 得ているか



## 日韓関係に関心 がありますか。 日韓関係の問題を知っ ていると思いますか。

	日本 (%)	韓国 (%)
はい	37%	82%
どちらかといえばはい	40%	46%
どちらでもない	14%	12%
どちらかといえばいいえ	4%	18%
いいえ	4%	18%

## 相手国側の歴史認識は正しいと 思いますか。

	日本 (%)	韓国 (%)
はい	3%	2%
どちらかといえばはい	10%	
どちらでもない	53%	
どちらかといえばいいえ	22%	
いいえ	12%	98%

## 日本(韓国)は韓国(日本) に対してひどいことをした と思いますか。

	日本 (%)	韓国 (%)
はい	52%	12%
どちらかとい えはい	29%	
どちらでもな い	13%	
いいえ	3%	
どちらかとい えはいいいえ	2%	88%

## 反対に、韓国(日本) は日本(韓国)に対してひ どいことをしたと思いま すか。

	日本 (%)	韓国 (%)
はい	7%	97%
どちらかとい えはい	25%	
どちらでもな い	46%	
どちらかとい えはいいいえ	14%	
いいえ	9%	3%

## 結果が示唆するもの

日本側の悪い印象のもととなっているのは

- ・ 領土問題
- ・ 報道される反日感情

韓国側は、

- ・ 歴史問題
- が圧倒的である。

回答者の情報取得元は、両国ともニュースメディアが一番多く、次いで日本はドラマ、アニメ等のテレビコンテンツ、韓国側は書籍・教科書が多かった。

→メディアを通じた情報は、ニュースバリューがあるものに限られる。教科書は、国のイデオロギーを反映している。情報にかかっているバイアスを主体的に見分けていく必要性

## 韓国の友人や知り合いがいますか。

	日本 (%)	韓国 (%)
親しい友人・知り合いがいる	27%	11%
挨拶を交わす程度の友人・知り合いがいる	38%	23%
いない	35%	65%

その方と文化や民族などの違いから、誤解や衝突が生じたことはありますか。

	日本 (%)	韓国 (%)
はい	8%	13%
どちらかといえ ばはい	4%	
どちらでもない	18%	
どちらかといえ ばいいえ	11%	
いいえ	59%	87%

## 具体的な例

韓国側

- 生活のパターンの違い
- 食べ物が違う
- エチケットの違い
- 文化に関して、同じ言葉でも違う意味をさすことがある
- 具体的な衝突はないが、日韓問題・政治問題になると(韓国側が)話題を変える

日本側

- 礼儀作法、マナーの違い
- 政治・歴史観の衝突
- 日韓問題を話題にすること

## 友人関係と相手国に対する印象の相関関係

	親しい友人がいる		挨拶をかわす程度の人がいる		いない	
	日本	韓国	日本	韓国	日本	韓国
良い印象	16%	50%	11%	28%	28%	20%
どちらかというくらい良い	44%		43%		28%	
どちらともいえない	24%	25%	23%	16%	22%	14%
どちらかというくらい悪い	12%		14%		19%	
良くない印象	4%	25%	9%	56%	3%	66%

## 結果が示唆するもの

両国において、

「韓国人に実際にあってみて、自分達と変わらない普通の人だとわかったから。」

「親しい日本の友人がいるから。」

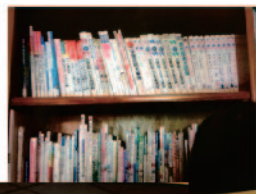
など個人的な友人関係が、相手国全体に対する印象そのものを良くしていることがわかった。

→個人を知り友人関係を結ぶことで、波及的効果がある

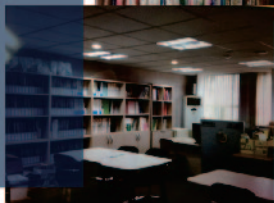


Interview, 19.07.13

日本文化院  
施設



図書館



## 人形展示



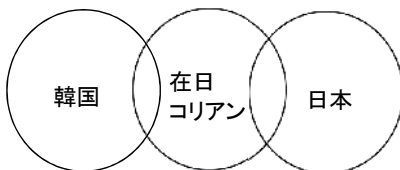
## アニソングランプリ



## 日韓交流おまつり



## 在日コリアンとは



## 例1. 朝鮮学校

- 朝鮮学校に通っているのは、在日コリアンの1、2割程度。
- 各種学校である。

- \* 日本の学校・・・いじめ、差別
- \* 在日コリアンのネットワークの必要性



“在日コリアン”としてカテゴライズ

↑  
個人として付き合い合っていく

結果

- ・個性を生かして安心して過ごせる環境
- ・個を知ること、人間としての共通性に気付く

→個人としての交流の機会が増える  
→社会に浸透すれば、共生が実現する

## 例2. ヘイトスピーチ

民族差別の法は日本にはないため、容認されてしまっている。

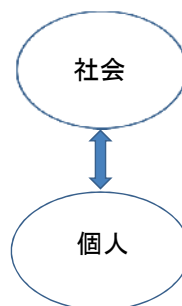
この社会を生み出した理由

・・・多民族国家的意識の欠如(国、個人)

この状況を打開するには

メディアからの情報を受動的に解釈するだけでなく、自分で判断する力をつける  
(バイアス、ステレオタイプ、決めつけをなくす)

→個人の正しい認識



## 結論

- ・ 日本、韓国共に民族的同一性が高く、根拠ないマジョリティ意識を共有しやすい社会  
→国内の民族的多様性に対して不寛容  
また、あいまいなマジョリティ観は、対照にあるマイノリティの多様性にも鈍感にさせる
  - ・ 韓国、日本両国における相手国に対する世論が、国内に住む相手国出身者の立場を左右している
  - ・ 一方で、友人関係が相手国に対してよい印象を与える契機となっていることが確認される  
→個の異文化理解が、世論を動かす
- =異文化理解が、ローカルな共生の後押しとなる



### 3. 歴史グループ

## 日韓の歴史認識について

鄭根姫 金粧皎 張有鎮 姜智媛 權英芽  
笠智遙 加藤紗紀 小山奈月 佐藤文香

## 歴史認識とは？

### 人々の歴史認識

◆アンケート結果まとめ  
→ 身近な人間に韓国についてどのように思うか尋ねた

### 韓国の好きなところ

50代	<ul style="list-style-type: none"><li>• 善悪がはっきりしているところ</li><li>• 愛国心が強いところ</li><li>• 目上の人を敬う</li><li>• 親しみやすい</li></ul>
40代	<ul style="list-style-type: none"><li>• 韓流ドラマがおもしろい</li><li>• ご飯がおいしい</li></ul>
20代	<ul style="list-style-type: none"><li>• 情が深い</li><li>• リベラルな政治体制(女性大統領)</li></ul>

### 日本の好きなところ

50代	<ul style="list-style-type: none"><li>• 国民の勤勉性、誠実性</li><li>• 温泉・夜景や景色がいいところが多い。</li></ul>
40代	<ul style="list-style-type: none"><li>• 日本人たちは優しい。きれいだ。</li><li>• 儉素な生活</li></ul>
20代	<ul style="list-style-type: none"><li>• 日本人はみんな礼儀が正しいようだ。</li><li>• 職人気質、韓国より文化がもっと発達して、支援も多い。アイデア商品の多様化</li></ul>
10代	<ul style="list-style-type: none"><li>• きれいな街</li><li>• さっぱい味の食べ物、環境</li></ul>

### 韓国の嫌いなところ

50代	<ul style="list-style-type: none"><li>• 歴史認識について被害者意識が強い、歪んでいる</li><li>• 自己主張が強い、声が大きい</li><li>• 韓流ドラマが合わない、反日感情</li><li>• すべて相手のせいにする</li></ul>
40代	<ul style="list-style-type: none"><li>• 反日感情が強い</li><li>• 日本人をよく思っていない</li></ul>
20代	<ul style="list-style-type: none"><li>• 愛国心が強い</li></ul>

## 日本の嫌いなところ

50代

- 形式的な親切さっぽい。
- 極右勢力がだんだん強くなっている

40代

- 本音と建前
- 不安定な環境

20代

- 過度に性に露骨であること
- 自国民をたませるほど、歴史の歪曲が激しすぎる。虚飾が多すぎる。

10代

- 歴史認識
- 独島問題



## 韓国からの靖国神社のイメージ

50代

- あまり悪感情はない
- 第2次世界大戦のA級戦犯が合祀されている

40代

- 戦犯を英雄視して旭日旗のように軍国主義の復活を国民に扇動するよう見える
- たまにはちよつと度を越す

20代

- 帝国主義的なイメージ
- 戦犯を祀る神社

10代

- 戦争を正当化するよう見える
- たぶんうちの仏教、キリスト教のような存在だと思う

## 日本からの靖国神社のイメージ

50代

- 英霊を祀るところ ※戦死したすべての人
- 外国にとやかく言われることはない
- 戦争で戦って亡くなったすべての人を弔うのは日本人にとって普通のこと

40代

- 旧植民地時代の人にとっては政治家の参拝は望ましくないと思う
- 政治家の参拝について;個人的なものはいと思う

20代

- 政治家が行くなら、政治家を辞めてから行けばいいと思う
- 靖国が論争になるなら、戦犯は別に祀るべきでは

## 靖国神社訪問感想

戦没者を英雄視

微妙

悲しい  
残念

普通の神社っぽい

戦争責任を持たない

日帝的な価値観

建物が普通

## 歴史先生のインタビューの回答

## 歴史認識の要因－高校教員－

### 韓国

- ◆ 歴史教育の問題より入試制度に問題がある。
- ◆ 歴史認識は自分で成り立つもの
- ◆ 時代のいい、悪いところを教えるより歴史的教訓を得るように指導するのが大事
- ◆ お互い知るため中道的な態度を取ること
- ◆ 政治的な和解が必要

## 歴史認識の要因－高校教員－

### 日本

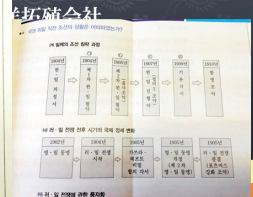
- ◆ 何故、歴史を学ぶのか、ということを念頭に置いて学ぶべき
- ◆ 歴史＝自分は何者なのか、というアイデンティティの土台になるもの
- ◆ 歴史を学ぶことは、国際社会に出る為に必要なこと
- ◆ 考える力を育むための教育を行うようにしている

## －教科書①－

### ◆ 韓国併合まで (1904～1910)

年代	事項
1876	日朝修好条約(江華条約)
1882	壬午軍乱(壬午事変)
1884	甲申事変
1889	防毅令(朝鮮、米穀・大豆などの輸出を禁止)
1894	甲午農民戦争、日清戦争がはじまる
1895	下関条約、日本人仕立、領土を統廃
1897	朝鮮、国号を大韓帝國(韓国)と改める
1904	日韓議定書、第1次日韓協約
1905	第2次日韓協約(韓国保護条約)、統監府設置
1907	ハーグ密使事件、韓国皇帝の譲位、第3次日韓協約、義兵運動が高揚する
1909	伊藤博文、ハルビンで暗殺される
1910	韓国併合条約(韓国併合)、韓国を朝鮮に、漢城を京城に改める、統監府を朝鮮総督府とする

近代日本と韓国(朝鮮)関係年表



## —教科書②—

- ◆ 3・1 独立運動  
韓国においてはとても重要な運動。だが...
- ◆ 日本  
→ 日本史の教科書では僅か**数行**の記述。  
武力を用いた統治(武断統治)から、文化統治へ
- ◆ 韓国  
→ **7ページ**にわたる記述。  
民族運動のきっかけ  
文化的統治について  
しかし、日帝はむしろ警察力を強化してわが民族の独立運動を巧みに弾  
圧し、民族の分裂を画策した。

## —教科書③—

- ◆ 関東大震災(1923)
- ◆ 日本  
社会不安が高まる中で暴動の流言を信じた民衆は  
自警団を作り、彼らの手によって多数の朝鮮人・  
中国人が殺害された(一部抜粋)
- ◆ 韓国  
在日6000人あまりが惨殺される  
韓国に**強制移住**させ、植民地政策に利用した  
日本の川北新聞・下野新聞を引用(3ページ)

## —教科書④—

- ◆ 皇民化政策について
- ◆ 日本  
日本語教育の徹底・神社参拝の強制・創氏改名など  
の極端な日本への同化を求める路線  
→ **せいぜい3つの政策**しか紹介されない
- ◆ 韓国  
**愚民化教育、民族抹殺政策**と呼称  
ハンゲル使用の普及運動による抵抗  
内鮮一体・日鮮同祖論などの歪められた歴史教育  
1919年に3・1運動が起きると、日帝は**韓国人の独立精神**  
を抹殺させるため、資料的な性格である「朝鮮史」を作った。

## —教科書⑤—

- ◆ 強制労働・従軍慰安婦
- ◆ 日本  
慰安婦・強制労働については、「**強制**」という文言が**入ると検定を通らない**為、表現を工夫することで記載する教科書が多い  
→ 日本軍に連行され、『従軍』慰安婦にされる者もいた
- ◆ 韓国  
**強制連行**と明記。邪悪な日帝。非人道的蛮行。すべての朝鮮人が犠牲となった。民族的良心。日帝の朝鮮侵略は近代化を志向していた朝鮮民族の努力を挫折させるものである。

## まとめ

- ◆ 歴史認識  
教育...重要な影響がある  
自分の国の歴史ばかり見てはいけ  
ない
- ◆ 日韓関係のこれからについて  
(インタビューより)

## まとめ②

### 正しい歴史認識とは？

- ◆ 色々な資料・意見を見たり聞いたりすることで  
作られる
- ◆ 例えば...  
幼い時から日韓キャンプなどを行い、  
お互いの立場を分かり合いながら  
作り上げていくべき



### まとめ③

◆ 今までの教育

→ 注入式・知識詰め込み型の教育



◆ 歴史を客観的に学び、お互いに立場を理解して受け入れ、相互共存することで関係はよくなるだろう





#### 4. 教育グループ



## TODAY'S OUTLINE

- ・日韓におけるスタディヒストリー
- ・英語教育
- ・受験勉強
- ・大学における学習意欲
- ・まとめ

### Study History in Japan

☆幼稚園入学前☆  
文字を読む／書く教育がまだ始まらない  
勉強よりは遊び中心

☆幼稚園／保育園☆  
この頃から遊びに基づいて文字や数字を少しずつ覚え始める  
(絵本を読んだり、ブロックを使ったり、通信教材を使ったり)  
音楽／スポーツなどの習い事を始める

☆小学校☆  
英語の授業は小学5～6年生から  
週／月1回程度ALTの先生がくる。  
授業はゲーム中心の英会話程度  
...英語をしたい子は英会話教室に通いだす  
通信教育(ドリル形式)を始めたり、小学校5年生になると塾に通いだす(苦手分野の補充、中高一貫校の受験のため)

☆中学校☆  
中高一貫校に入る子が多い？  
授業にさえついて行けばよく、+αはあまりしない  
高校受験のある子は塾に行く子も  
受験のために英検／漢検を学校が推進する  
部活が生活の中心

☆高校1～2年生☆  
生活態度さえしっかりしていれば、高校は推薦で入れたりする  
基本的に宿題／授業の予習／復習のみで、テスト前に詰め込む  
内申点(大学受験のときに大学に提出する成績)を気にして、テスト勉強をしたり、部活や、生徒会に入ったりする

☆高校3年生(受験期)☆  
受験勉強のスタートは早く2年の秋～遅く3年の夏  
都心部: 予備校などに通う子が多い  
地方: 学校のサポートのみに頼る場合もある  
2次試験(応用問題)よりもセンター試験(単純な知識の詰め込み)を重視する  
推薦で12月には大学が決まってしまって、あとで勉強しない子も多い

☆大学☆  
大学に入学したとたん勉強への意識が低下する...

■ 誰も悪くないのに「勉強しない大学生」が生み出されるメカニズム

採用担当: 大学の成績は信頼できないから、面接ではバイトやサークルの話を聞くしかないんです。正直、大学の先生にももっとしっかりの成績をつけてほしいです。

学生: 就活で、成績を見る企業はほとんどないだったら、素直に面接が聞かれる理由を言って、面接でネタになるバイトやサークルに時間を割いた方がいい。

大学の先生: しっかり教育しようとするほど、学生が離れていく。これはよくある。通学やバイトの都合で、自分の研究に時間を取らせる。そもそも、学生が就職に迷っているから、授業に興味を持ってくれないんだ。

学生: 先生がきちんと教える気になって、授業がつまらない。こんな授業なら、さぼってバイトやサークルに出たほうがマシだよ。

## Study History in Korea

### ☆幼稚園入学前☆

母親から絵本の読み聞かせや歌を歌ってもらって韓国語を自然に習得

中には単語カードを母親に作ってもらう子も

### ☆幼稚園／保育園☆

道徳教育(あいさつ、礼節)を幼稚園で学ぶ

ハングルや計算を母親に教えてもらったり、公文に通ったりして学ぶ

絵本は自分で読むようになる

...中には

小学校入学前に1年くらい英語、数学、化学、韓国語を勉強する子も

### ☆小学校☆

学校の授業と宿題が中心

音楽／スポーツなどの習い事を始める

小学校4～5年生で塾／家庭教師／英会話教室を始める

夜の6時くらいまで

英語は週に2回くらい(ネイティブの先生もくる)

### ☆中学校☆

試験期間に勉強を詰め込む感じ

朝学習があった

塾／家庭教師は引き続き続ける(6～7時くらいまで)

高校受験のための勉強はあまりしない

部活やっている子は少ない

英語のクラスはレベル別

クラスに1～2人頭のいい子は外国語高等学校の為に勉強する(名門大学にはいりやすい高校)

### ☆高校☆

塾／家庭教師は継続して行う

高校1年生から夜間自立学習(10～11時くらいまで)

週末も学校で勉強

朝補習あり

サークルとか部活には入らない

サークルや部活は、実績がなければ、学校側に廃止されてしまうところもある

### ☆大学☆

大学の成績は就職に重大

TOEICなどの成績がよければよい就職先、いい給料がもらえる

夏休みも英語塾のようなものに行き勉強する(Wスクール)

## 日韓の違い

### ◎小学校での英語教育

...日本:ALTが月に1回きて英会話程度の学習

韓国:週に2回

### ◎受験勉強

...日本:受験勉強スタートは2年の秋～3年の夏

韓国:高校1年生から行う

### ◎大学の授業への意欲

...日本:就職には関係ないため、単位のとりやすいものを適当

にとる

韓国:就職に重大に関係する

## 小学校における英語教育

### <韓国>

- ・小学校3年生から義務
- ※最近**幼稚園、小学校1年生**から始めているところが増えてきた。
- ・週に3～4回くらい
- ・英語のテープを聞いて、まねして繰り返す
- ・発音はネイティブの先生が教える
- ・アルファベットも学び始める

### <日本>

まだスタートしない



### <韓国>

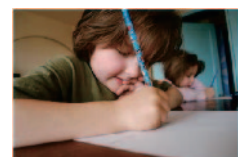
小学校5～6年生

- ・文法中心
- ・英単語の試験がある
- ・小学校が終わった時点でI like apples.程度 of 英語は問題なく話せる。
- ・動詞の簡単な過去形を教える。また文法のみならず完了形も習う。

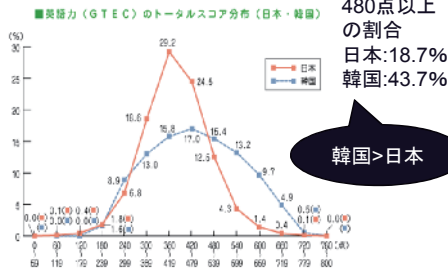
### <日本>

小学校5年生から義務

- ・週に1回のみ
- ・ALTの先生が来る
- ・簡単な単語や、よく使うフレーズを覚える



## 英語力(GTEC)比較



## 英語教育における問題点

- ・日本では現在の英語能力を改善するために初等教育の改善などに取り組んでいる
- ◎英語の小学校の義務教育がスタートしたばかりで成果が見えていない
- ◎教員の養成や、地方でのALT数が確保できない
- ⇒韓国では幼稚園での英語のみの教育が韓国語の習得を妨げている
- ・ギロギアツパ(기러기아빠)
- ...子供と母親が早期留学のため父親を置いて海外へ行き、その間に精神病になったりする。

## 英語教育における改善策

- ・英語教育の本格的な徹底は小学校低学年以上からとする
- ...幼稚園からの徹底だと母語の妨げになり、また高学年からでは遅すぎる可能性がある
- ・授業数を週3~4回程度にふやす
- ・年齢にあった教育を(小学生のうちはゲーム感覚で学ぶ方がいいのでは...(´ω´)?)

## 受験勉強

- |   |   |
|---|---|
| <p>&lt;韓国&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・早い人は中学2年生～(良い高校に入って、大学に行くため)</li> <li>・ほとんどの人は高校1年～</li> <li>...どの大学に通ったかが就職に関係するため</li> <li>・ほぼ全員が大学に行く</li> <li>・ソウル市内の大学なら私立/国立関係なくどこでも</li> </ul> | <p>&lt;日本&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・早くて高校2年秋、遅くて高校3年夏</li> <li>・それまでは部活中心</li> <li>・とりあえず国立大学に入る(学費も安いし、就職の際に有利)</li> <li>・私立については、本当に行きたいことがあって行く人と、国立大学の滑り止めで行く人の2通りに分かれる</li> <li>・レベルの高い高校ほど国立大学志向</li> </ul> |
|---|---|

## 受験勉強の方法

- |   |   |
|---|---|
| <p>&lt;韓国&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校では教科書中心。</li> <li>・塾で受験対策を行う</li> <li>・学校の自習中に人気の先生のインターネット講義をみる</li> <li>・学校には22:00まで残り、そのあとに塾へ向かう。(そのため終わるのは日を越えることが当たり前)</li> <li>・塾に行かないのはクラスに1人いるかないか</li> </ul> | <p>&lt;日本&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自主学习</li> <li>・塾/予備校に通う</li> <li>・高校によっては(特に地方では)学校でサポートが受けられる。</li> <li>・学校には19:00くらいまで</li> <li>・塾は遅くて23:00には終わる</li> </ul> |
|---|---|

## 受験勉強に関する問題点

- |   |  |
|---|--|
| <p>&lt;韓国&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・部活などがないため、道徳教育・礼儀などを実生活で学ぶ場がない。</li> <li>・親の干渉による強迫観念</li> <li>・私費負担が重い</li> <li>・夜遅くまで塾にいるため授業中に寝てしまう</li> <li>・入った大学によって将来が決まってしまう</li> </ul> | <p>&lt;日本&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・部活中心の生活のため、勉強がおろそかになる。</li> <li>・高校の受験方針による圧力</li> </ul> |
|---|--|

入試対策のために教育の画一化  
受験が一発勝負

## 解決策

- ・(韓国側に)部活を活性化し、受験の内申点に、部活の成果も加味するようにする
- ・全国統一試験(韓国:修学能力試験、日本:センター試験)を年に数回行えるようにし、その平均点をとれるようにする
- ・生徒自身の意思を尊重する



## 大学生活の現状(学習面)

- |                          |                          |
|--------------------------|--------------------------|
| <韓国>                     | <日本>                     |
| ・興味関心中心に学習<br>(しかし単位が優先) | ・興味関心中心に学習<br>(しかし単位が優先) |
| ・受け身形式の授業                | ・受け身形式の授業                |
| ・授業中は発言少                 | ・授業中は発言少                 |
| →授業後先生へ質問                | →授業後も質問にほぼ行かない           |
| ・夏期休暇に語学講習               |                          |
| ・海外短期留学                  | ・海外短期留学                  |

## 大学生活の現状(生活面)

- |                             |                         |
|-----------------------------|-------------------------|
| <韓国>                        | <日本>                    |
| ・サークルに入るのは1/2程度             | ・サークルをしている人がほとんど        |
| ...サークルをしても<br>自習学習をする余裕がある | ...自主学習を行う時間が<br>足りなくなる |

## 就職に対する意識

- |  |                     |
|--|---------------------|
| <韓国>                                       | <日本>                |
| ・高校1年生から<br>(早い人は中学から)                     | ・大学3年生の夏休みから        |
| ・大学の成績が重視される                               | ・公務員を目指す人は大学2年生後期から |
| ...単位を取ることに集中<br>高校~大学の勉強<br>=<就職活動>に対する意識 | 日々の勉強≠就職活動          |

## 大学生における学習意欲の問題点

- <韓国>
- ・就職活動に有利になる講義を中心に選択するので、自分が本当に興味のある学問を勉強できない
  - ・単位を取りやすい授業を優先してとる
  - ・真面目に出なかった授業の単位をなんとかして取ろうと、教師にいろいろと交渉する
- <日本>
- ・企業は積極性/企画性/自主性を求める
  - ⇨大学では受け身形式の授業ばかり
  - ...社会が求める人材と学校教育方針のずれ
  - ・サークルやバイトを楽しみ、勉強をしない

## 問題解決方法

- 《韓国》
- 就職するまでの社会構造が教育システムを決定している  
→社会構造を変化させる必要がある  
Ex)大学のname value よりも、個人の能力を重視する
- 《日本》
- 先生の話を一方向的に聞くだけの授業  
自主性を低下させ勉強に対する意識が下がる  
→教育プログラム/教師の質の向上!  
Ex)日韓交流セミナー、実験形式授業など  
教師/学生ともに工夫しながら協力できる授業づくり

## まとめ

- ・日本と韓国という近距離の国であっても、教育の点について多くの違いがみられた

- ・お互いの教育には、メリット、デメリットが存在する  
ex) 韓国では英語早期教育が母語習得の妨げになる可能性があることが問題になっている。

日本では受験勉強を始めるのが高校3年生からで韓国に比べると遅い

- ・そのことを加味した上で、よりよい教育作りを目指すべき




## 5. 文化グループ

2013同徳女子大学とお茶の水女子大学 日韓国際交流セミナー  
**メディアから見る日韓文化研究**  
 家族文化と男女関係を中心に

池田亜柊 酒井佑果  
 山本梨紗 吉村茜  
 강수진 김선경  
 김윤아 신수진 이경은

# 1 家族関係



## 韓国ドラマ

よめしゅうとめ  
 ・ほとんどのドラマで嫁姑問題が登場する



남굴재 굴러온 당신 (2012)



금 나와라 독막 ! (2013)

## 韓国のトークショー



월근투 시월드(2012~)




고부 스캔들(2013)

## シワールド(시월드)

夫の家族の世界のこと。  
 シ+ワールドの合成語  
 シ...夫の家族を指す言葉。  
 例) シオモニ シアポジ  
 ワールド...world

「シワールドが怖い」  
 「シワールドがしんどい」



## よめしゅうとめ 嫁姑問題はなぜ起こる??

① 儒教の影響で家族を大事にする  
 →母親が息子離れできない

夫からの愛情をもらえない! ♡

↓


息子に愛情を注いで執着。  
 いつまでも子供のように扱う

↓

自立できない未熟な息子

↓

嫁姑関係でもめごとが生まれる。



嫁姑問題はなぜ起こる??

### ② 儒教の考えが崩れている

昔…親の意見を尊重      最近…夫婦中心

<b>姑</b>	<b>嫁</b>
自分がしてきたやり方でやってほしい (家計・家事など)	女性の社会進出が活発に → 自己主張するようになった 言いたいことは言う!

嫁には家において欲しい      **対立**      働きたい!

### 嫁姑劇場

自分の意見を尊重してほしい

嫁には家で息子を支援してほしい

嫁と姑の間で苦労している

嫁 ソンギョン      息子 カンスジン      姑 池田

### 嫁姑問題: 日本のドラマ

『渡る世間は鬼ばかり』(1990～)    『オトメさん』(2013)    『となりの芝生』(1976・2009)

多くのドラマで扱われているというわけではない!

### 理由その① ドラマの放送形態

韓国	日本
<ul style="list-style-type: none"> <li>16話～24話</li> <li>CMなし</li> <li>1時間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>12話～13話</li> <li>CMあり</li> <li>50分程度</li> </ul>

### 理由その② 現代の嫁姑関係 犬猿の仲に変化の兆し?

【目1】同居する姑との関係

【全体】 (n=310)

仲が良い	14.2%
まあ仲が良い	53.5%
あまり仲が良い	18.1%
仲は良くない	12.9%
無回答	1.3%

【30代以下】 (n=98)

仲が良い	15.3%
まあ仲が良い	63.3%
あまり仲が良い	10.2%
仲は良くない	10.2%
無回答	1.0%

### 理由その② 続き

【目4】同居する姑との関係(同居後の変化別)

【「思ったより気を遣わなくてもよくなった」と思う人】 (n=125)

仲が良い	31.2%
まあ仲が良い	64.0%
あまり仲が良い	3.2%
仲は良くない	0.8%
無回答	0.8%

【目3】同居後の嫁姑関係の変化: 同居前と同居後(変化別) (n=138)

同居してからは仲が良くなったと思う	42.4%
同居してからは仲が悪くなったと思う	3.0%
同居してからは仲がかわらないうち	44.4%
同居してからは仲がかわらないうち	3.0%
無回答	0.0%



## 嫁の本音

- 「(姑が)夫よりも自分の味方になってくれることが多い」
- 「思ったよりも気を遣わなくてもよくなった」
- 「コミュニケーションをとる機会が増えた」



## 「ママボーイ」(마마보이)

何でも母親に相談する  
母親の言うとおりに行動し、自分で決断しない



백년의 유산 (2013)



겨울새 (2007)

## 日本ドラマ: マザコン

- マザコン・・・母親にべったりな息子のこと  
「母親離れしていない」「自己決断力に欠ける」



『ずっとあなたが好きだった』  
(1992)

『マザー&ラヴァー』(2004)

『理想の息子』(2011)

## 日本のマザコンの定義？

日本の新聞や雑誌によると...

- 「母親と二人で行動することがある」
- 「実家との連絡が密である」

韓国では「情がある」「親孝行」とされる行動も  
日本ではマザコンと呼ばれることもある

## まとめ

- 韓国は嫁姑問題を取り扱うドラマが多く、  
日本には少ない。
- マザコン・ママボーイ像の違い  
どちらも嫁姑問題の原因になることがあるが、  
日本のマザコンは、韓国ではママボーイでは  
ないことがある



## 2 男女関係

## 草食系男子とは

- 恋愛に「縁がない」わけではないのに「積極的」ではない、「肉」欲に淡々とした男性のこと。

具体的には

- ①恋愛経験がなく  
交際に踏み切れない男性。
- ②モテるけれど恋愛に執着しない男性。

対義語は肉食系



## 日本人男性の草食化

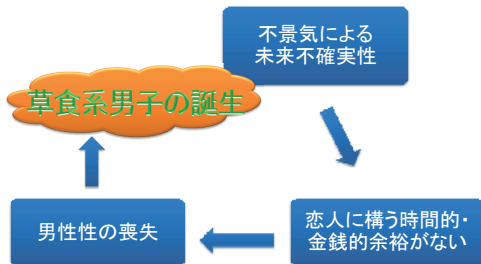


『僕の初恋を君に捧ぐ』(2009)



『モテキ』(ドラマ2010/映画2011)

## 草食化の原因



## 韓流ドラマに見る肉食系男子



『シークレット・ガーデン』(2010～2011)



『紳士の品格』(2012)

## 韓国の肉食系男子が多い背景

- 「軍隊に行く」と一人前の男になる  
責任感が芽生える  
「国」を守る  
→「家族・恋人」を守る
  - 草食系男子ではモテないから、  
肉食系男子になるために努力する。
- ⇒肉食系男子の増加



## 日韓キャストイングの違い

- 日本  
線の細い男性。  
かわいらしい外見と頼もしい男らしさとの意外性
- 韓国  
筋肉質の男性。  
男らしい外見に備えられた優しさとの意外性

## 『箱入り息子の恋』



## 『箱入り息子の恋』

あまのしずくけんたろう  
雨雲健太郎のプロフィール



35歳独身(彼女いない歴35年)  
外見:白くて細身。印象が薄い。  
性格:野心がない。人と付き合うのが苦手。  
几帳面。  
趣味:格闘ゲーム、貯金

## 『箱入り息子の恋』検証

交際経験のない30代男性が...

- 恋人が欲しいと思わない理由:  
趣味に没頭(49.3%)、恋愛が怖い(19.7%)
- 異性と交際する上での不安:  
自信がない(44.7%)

(内閣府「平成22年度結婚・家族形成に関する調査報告書」より)

## 結論

- ドラマはその時代の現実と願望を反映するもの。
- 社会的背景によって求められる男性像が異なる。
- 親世代とは異なる、新しい男性像の創出。  
女性の地位向上と家父長制度によるターニングポイントである。

## 編集後記

日韓大学生国際交流セミナーも早いもので今回が第9回目、今年から参加した同徳女子大学の学生にも多文化交流実習の単位が与えられた。日韓関係が良好とは言えない今日にあって、このセミナーが両国の間に友好の架け橋となってくれることを祈っている。

**東アジアの共生のために日韓の若者ができること  
～第9回 日韓大学生国際交流セミナー報告書～**

発行年月日 2014年1月31日

発行 お茶の水女子大学グローバル教育センター・グローバル文化学環

住所 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

電話&FAX 03-5978-5965

<http://jssl.i.ocha.ac.jp/index.html>

発行協力 同徳女子大学校外国語学部日本語科

住所 〒134-714 ソウル特別市城北区月谷洞 23-1

電話 02-940-4370 FAX 02-940-4191

編集 森山新（お茶の水女子大学）

印刷 よしみ工産



第9回日韓大学生国際交流セミナー